気仙沼市文化財調査報告書第８集

嚮　館　跡

Mukaitate-Ato

防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業（大谷地区）に伴う

発掘調査報告書

２０１６

気仙沼市教育委員会

気仙沼市文化財調査報告書第８集　嚮館跡　二〇一六　気仙沼市教育委員会

嚮　館　跡

Mukaitate-Ato

防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業（大谷地区）に伴う

発掘調査報告書

本吉郡北方岩尻村分間絵図（上が北）　東北歴史博物館蔵

刊行にあたって

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震が引き起こした巨大津波は、東日本の沿岸部を襲い、気仙沼市でも壊滅的な被害をもたらしました。被災家屋約16,000棟、被災世帯約9,000世帯、1,200人を超える尊い命が犠牲となりました。

未曾有の大震災からの一日も早い復旧・復興を目指し、個人での住宅再建をはじめ、高台への集団移転、各種産業施設やインフラ関係等の多くの大規模な開発が計画されました。本市には、縄文時代の貝塚や集落跡、中世の城館跡など180カ所以上の遺跡が周知されていますが、これらの多くは沿岸部の丘陵上に立地しているため、津波の浸水域を避けた土地を求める場合、必然的に埋蔵文化財との関わりが増すという地理的な状況にあります。

本市では、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との調整を図るため、職員の再任用や任期付職員の採用に加え、他自治体へ職員の派遣要請を行い、埋蔵文化財の発掘調査に対応する専門職員を確保するほか、文化庁、宮城県教育委員会等の支援により、調査体制を整備してまいりました。

本書は、平成26年度に、国の東日本大震災復興交付金事業として実施した嚮館跡の発掘調査成果を綴った報告書であり、周知の遺跡への防災集団移転促進事業としては、最大の面積のものとなりました。嚮館跡が所在する本吉町は、平成21年9月1日に気仙沼市と合併しましたが、合併以降町内で初めて行われた本格的な埋蔵文化財の発掘調査となりました。

嚮館跡は、これまで江戸時代の大肝入の屋敷推定地とされていましたが、今回関連資料が発見されたことから、遺構の一部を保存することができました。市内の集団移転促進事業で遺構が保存されたことは初めてであり、調査成果とともに、大震災後の本市の復旧・復興に向けたまちづくりの一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査や遺構の保存に対し、御理解・御協力をいただいた関係者の皆様、文化庁、宮城県教育委員会や発掘調査のため支援をいただきました全国からの自治法派遣職員の皆様並びに派遣元自治体の皆様、さらに実際の調査に当たられた皆様に対して、厚く御礼を申し上げます。

平成28年5月

気仙沼市教育委員会

教育長　白幡　勝美

例　　言

1　本書は、東日本大震災の復興事業の防災集団移転促進事業･災害公営住宅整備事業（大谷地区）に係る嚮館跡の発掘調査報告書である。

2　確認・発掘調査は、気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力支援を受けて、平成 26 年度に実施した。

3　整理・報告書作成作業は、気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力支援を受けて、平成 26・27 年度に実施し、印刷・製本は平成 28 年度に実施した。

4　第２図は国土地理院発行の「気仙沼」「津谷」（1/25000）電子地形図（2015）を使用した。

5　測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。方位は真北である。

6　使用した遺構略号は、SA：柵列　SB：掘立柱建物跡　SD：溝状遺構　SE：井戸跡
SI：竪穴建物跡　SK：土坑　SX：包含層・集石土坑・不明遺構などである。

7　遺構・遺物の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
遺構：竪穴建物跡・掘立柱建物跡 1/60・1/80　土坑 1/40　井戸跡 1/60　埋設土器 1/20
遺物：土器 1/4　土器片 1/3　土製品 1/2（土偶は 1/1）剥片石器 4/5　礫石器 1/2・1/3
古銭 1/1　金属製品 2/3

8　土器の断面に〇があるものは、繊維の混入を示している。土製円板の→は、研磨箇所を示している。打製石斧は、自然面を裏面（右側）に置いて図化してある。

9　掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表及び写真図版の遺物番号は一致する。

10　発掘調査成果の内容や土層の色調等の表現については、原則として現場担当者による注記等を採用した。土色の記載は『新版標準土色帖』を使用したが、本書には掲載していない。

11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は㈱イビソク、Ｂ地区の遺構配置図は㈱アスコにそれぞれ委託した。本書の遺構のデジタルトレースは㈱とっぺん、石器（石製円板を除く）実測及び石器写真撮影業務は創和システム㈱、遺物（石器以外）の写真撮影は㈱アートプロフィール、黒曜石の原産地推定は㈱パレオ・ラボ、報告書の編集作業は㈱とっぺんにそれぞれ委託した。

12　本書の執筆は、第Ⅲ章２（１）･（３）の土偶･（４）、第Ⅳ章１（黒曜石分析のコメントを除く）を堤が、他の執筆と編集は野﨑が行った。なお、SUMMARY は阿部嘉子氏に英訳をお願いした。

13　出土遺物及び実測図・写真等の記録類は、気仙沼市教育委員会が保管している。

14　発掘調査から報告書作成にあたり、以下の方々・機関からご指導・ご協力を賜った。
相原淳一　阿部嘉子　小野寺昭英　宮本毅　山内繁　九州陶磁文化館　仙翁寺　東北歴史博物館

目　　次

刊行にあたって
例言

第Ⅰ章　遺跡の概観 …… 1
　１．地理的環境 …… 1
　２．歴史的環境 …… 2
第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過 …… 6
　１．調査に至る経緯 …… 6
　２．確認調査 …… 6
　３．本調査 …… 8
　４．遺構保存地区 …… 9
　５．発掘調査方法 …… 10
　６．基本層序 …… 10
　７．遺跡の名称について …… 10
　８．調査体制 …… 10
第Ⅲ章　発見された遺構と遺物 …… 12
　１．遺構 …… 12
　　（１）Ｂ区 …… 12
　　（２）Ｄ区 …… 13
　　（３）経塚 …… 13
　２．遺物 …… 32
　　（１）縄文土器 …… 32
　　（２）土師器・陶磁器 …… 52
　　（３）土製品 …… 53
　　（４）石器 …… 58
　　（５）古銭・金属製品 …… 77
第Ⅳ章　まとめ …… 87
　１．縄文土器と石器 …… 87
　　（１）土器 …… 87
　　（２）石器 …… 88
　２．近世の遺構について―大肝入小野寺宮内との関連― …… 91

SUMMARY …… 96
附編　黒曜石原産地推定分析 …… 97
写真図版 …… 101
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図 …… 1
第 2 図　周辺の遺跡 …… 3
第 3 図　開発地点位置図 …… 4
第 4 図　開発区域及び調査区図 …… 7
第 5 図　確認調査トレンチ配置図 …… 7
第 6 図　Ｂ区遺構配置図 …… 15
第 7 図　Ｂ区詳細遺構配置図１ …… 16
第 8 図　Ｂ区詳細遺構配置図２ …… 17
第 9 図　Ｂ区遺構実測図１ …… 18
第 10 図　Ｂ区遺構実測図２ …… 19
第 11 図　Ｂ区遺構実測図３ …… 20
第 12 図　Ｂ区遺構実測図４ …… 21
第 13 図　Ｂ区遺構実測図５ …… 22
第 14 図　Ｂ区遺構実測図６ …… 23
第 15 図　Ｂ区遺構実測図７ …… 24
第 16 図　Ｂ区遺構実測図８ …… 25
第 17 図　Ｄ区詳細遺構配置図 …… 26
第 18 図　Ｄ区遺構実測図１ …… 27
第 19 図　Ｄ区遺構実測図２ …… 28
第 20 図　Ｄ区遺構実測図３ …… 29
第 21 図　経塚実測図 …… 30
第 22 図　遺構出土土器１ …… 36
第 23 図　遺構出土土器２・
　　遺構保存地出土土器 …… 37
第 24 図　SX13 包含層上層出土土器１ …… 38
第 25 図　SX13 包含層上層出土土器２ …… 39
第 26 図　SX13 包含層上層出土土器３ …… 40
第 27 図　SX13 包含層上層出土土器４ …… 41
第 28 図　SX13 包含層上層出土土器５ …… 42
第 29 図　SX13 包含層上層出土土器６ …… 43
第 30 図　SX13 包含層中層出土土器１ …… 44
第 31 図　SX13 包含層中層出土土器２ …… 45
第 32 図　SX13 包含層中層出土土器３ …… 46
第 33 図　SX13 包含層中層出土土器４ …… 47
第 34 図　SX13 包含層下層出土土器…… 48
第 35 図　土師器・磁器 …… 52
第 36 図　土製円板１ …… 54
第 37 図　土製円板２・土偶 …… 55
第 38 図　遺構出土石器１ …… 64
第 39 図　遺構出土石器２ …… 65
第 40 図　SX13 包含層出土石器１ …… 66
第 41 図　SX13 包含層出土石器２ …… 67
第 42 図　SX13 包含層出土石器３ …… 68
第 43 図　SX13 包含層出土石器４ …… 69
第 44 図　SX13 包含層出土石器５ …… 70
第 45 図　SX13 包含層出土石器６ …… 71
第 46 図　SX13 包含層出土石器７ …… 72
第 47 図　SX13 包含層出土石器８ …… 73
第 48 図　古銭１ …… 78
第 49 図　古銭２ …… 79
第 50 図　古銭３ …… 80
第 51 図　古銭４ …… 81
第 52 図　古銭５ …… 82
第 53 図　古銭６ …… 83
第 54 図　金属製品 …… 84
第 55 図　嚮館跡周辺絵図 …… 91

表　目　次

第 1 表　遺構観察表 …… 31
第 2 表　土器観察表 …… 49
第 3 表　土師器観察表 …… 52
第 4 表　陶磁器観察表 …… 52
第 5 表　土製品一覧表 …… 56
第 6 表　石器一覧表 …… 74
第 7 表　古銭計測値比較 …… 77
第 8 表　金属製品一覧表 …… 77
第 9 表　古銭一覧表 …… 85
第 10 表　層位別土器分類表 …… 87
第 11 表　石器石材組成表 …… 89
第 12 表　磨石分類表 …… 90
第 13 表　小野寺宮内関連年表 …… 92
第 14 表　江戸時代初期の災害・凶荒の被害年表 …… 94

写真図版目次

巻　頭　本吉郡北方岩尻村分間絵図
図版 1　嚮館跡空中写真１ …… 101
図版 2　嚮館跡空中写真２ …… 102
図版 3　Ｂ区遺構写真１ …… 103
図版 4　Ｂ区遺構写真２ …… 104
図版 5　Ｂ区遺構写真３ …… 105
図版 6　Ｂ区遺構写真４ …… 106
図版 7　Ｂ区遺構写真５ …… 107
図版 8　Ｄ区空中写真 …… 108
図版 9　Ｄ区遺構写真 …… 109
図版 10　経塚 …… 110
図版 11　経塚・その他 …… 111
図版 12　遺構出土土器１ …… 112
図版 13　遺構出土土器２・遺構保存地区出土土器 …… 113
図版 14　SX13 包含層上層出土土器１ …… 114
図版 15　SX13 包含層上層出土土器２ …… 115
図版 16　SX13 包含層上層出土土器３ …… 116
図版 17　SX13 包含層上層出土土器４ …… 117
図版 18　SX13 包含層中層出土土器１ …… 118
図版 19　SX13 包含層中層出土土器２ …… 119
図版 20　SX13 包含層中層出土土器３ …… 120
図版 21　SX13 包含層中層出土土器４・下層出土土器・土師器 …… 121
図版 22　土製品 …… 122
図版 23　遺構出土石器 …… 123
図版 24　SX13 包含層出土石器１ …… 124
図版 25　SX13 包含層出土石器２ …… 125
図版 26　SX13 包含層出土石器３ …… 126
図版 27　SX13 包含層出土石器４ …… 127
図版 28　古銭１ …… 128
図版 29　古銭２・金属製品 …… 129

第Ⅰ章　遺跡の概観

１．地理的環境（第１図）

気仙沼市は宮城県北東端の太平洋岸に位置し、北・西側を岩手県と接しており、宮城県から少し飛び出した場所にあるため、岩手県南の沿岸部と地理的・歴史的結びつきが強い場所である。市域は北上山系の支脈に囲まれ、そこから流れる河川は西から東に向かって流れ、太平洋に注いでいる。

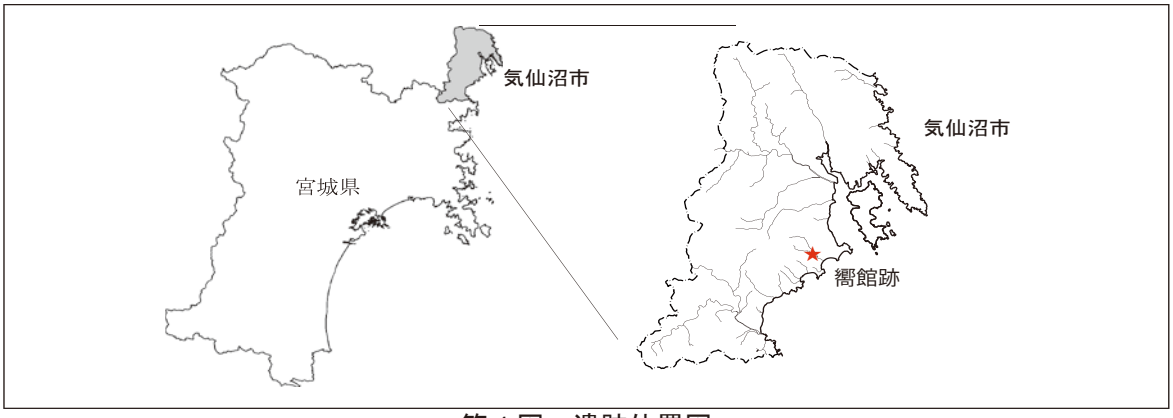
青森県八戸市から宮城県石巻市の金華山まで、北上山地の南北 254km、海岸延長約 600km が三陸リアス式海岸で、その三陸沖は世界三大漁場と呼ばれるほど漁業資源が豊かな場所となっている。このため、岩手県久慈市から気仙沼市までの南北約 180km が陸中海岸国立公園に指定され、東日本大震災後の平成 25 年５月に、八戸市の種差海岸等を編入して三陸復興国立公園が創設された。

またこの一帯は、太平洋プレートの沈み込み帯である日本海溝に面し、日本でも古い地質を持つ北上山地があることから、古生代から新生代の５億年に及ぶ大地の歴史が刻まれ、化石が多く出土するなど特徴的な様相を呈している。これにより、青森県八戸市から気仙沼市までの海岸線約 300km、面積 6,000 ㎢を超える地域（三陸ジオパーク）が、平成 25 年９月に日本ジオパークに認定された。一方で、平成 23 年３月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震をはじめとする地震や津波に、繰り返し見舞われている。

三陸リアス式海岸は、北部は隆起海岸のため直線的であるが、岩手県宮古市以南は沈降地形のため、湾と岬が交互に連続する海岸となっており、特に大船渡湾以南は沈降と隆起を繰り返したため、海岸線に沿って平らな丘陵が並ぶ海岸段丘を形成している。気仙沼市内では、この海岸段丘上に多くの遺跡が点在している。また、大きな海湾の中に小刻みに屈折があり、小さな入江が点在する溺れ谷も見られる。

嚮館跡は、合併前の旧気仙沼市域の南側で、旧本吉町の北端に位置する。東海岸から約 750 m、南の大谷海岸から約 1.1km の内陸にあり、沖の田川と滝根川に挟まれた標高 30 m程の丘陵上に立地する。

この丘陵は、標高 487 mの長森山から派生して、北側を沖の田川と並行しながら東西に横たわり、東側の大谷漁港方面に向かってなだらかに傾斜する。丘陵の南側を流れる滝根川は、丘陵と並行して東流するが、大谷小学校周辺で、大谷海岸に向かって南流する。沖の田川などの川の周辺の沖積地は開田され、丘陵地帯は畑として一部耕作されているが、宅地を除き総じて山林となっている。



第１図　遺跡位置図

海岸寄りの水田の多くは東日本大震災の津波を被り、再圃場化が進められている。遺跡の周囲には、湧水を利用した溜池が散見できる（第３図）。調査前の状況は大半が荒蕪地であったが、以前は田畑の耕作が行われていた。

２．歴史的環境（第２・３図）

震災前の気仙沼市域では、これまで遺跡の所在する箇所での開発が少なかったこともあり、発掘調査はあまり多くなかった。本遺跡周辺は、国道 45 号線や旧 JR 気仙沼線が海岸線に沿って縦断するが、遺跡も海岸線に沿った海岸段丘上に点在し、その多くが縄文時代と中世の城館跡である。しかし、震災に伴う高台への集団移転などにより、調査が増加し、少しずつ遺跡の概要が解明されてきている。

〇縄文時代

南最知貝塚（31）や前浜貝塚（14）、平貝遺跡、藤ヶ浜貝塚、田柄貝塚、磯草貝塚、平館遺跡などで調査が行われ、震災後は、杉の下貝塚（20）、台の下遺跡・貝塚、波怒棄館遺跡、磯草貝塚、高谷遺跡、緑館遺跡（38）、石川原遺跡（23）などで調査が行われ、遺構が見つかっている。嚮館跡（１）の東隣の野々下遺跡（２）でも調査が行われたが、遺構は確認されなかった。

〇古墳時代

市内に明らかな古墳と思われるものは少ない。嚮館跡の南側の三島古墳群（12）は、現在８基が残存するだけであるが、当初は 21 基あったと言われている。平成 25 年の個人住宅の調査で、新たに１基の古墳が確認されている。明治時代末期、付近の宅地造成で多量の玉類が出土し、現在東京国立博物館に所蔵されている。また、嚮館跡のすぐ南に寺谷古墳群（４）があり、円墳状の高まりが２基残る。

〇古代

市内の周知の遺跡は、十数遺跡程度である。このうち、市内北部の塚沢横穴古墳群では、８～９世紀の横穴墓が 10 基以上確認されている。また、石兜貝塚などで遺物が確認されているが、発掘調査で遺構が確認された例は少ない。ところが、震災以降の発掘調査により、星谷遺跡（42）、緑館遺跡（38）、南最知貝塚（31）、杉の下南遺跡（19）などで、古墳時代後期～平安時代の竪穴建物跡が確認されている。

元々、この地域は一大産金地と知られ、奥州藤原氏の繁栄は、その金の採取が背景にあると言われ、藤原秀衡の第四子本吉冠者高衡の居城があったことからもその重要性が窺え（推定地は、南三陸町の志津川城旭館）、今後、遺跡や遺構が増加するものと思われる。また、田東山の経塚群（11 基）も、はっきりはしていないが藤原氏の造営だと推定されている。この他に旧平磯村の大谷鉱山跡も、古代には採掘していたと言われるが、定かではない。

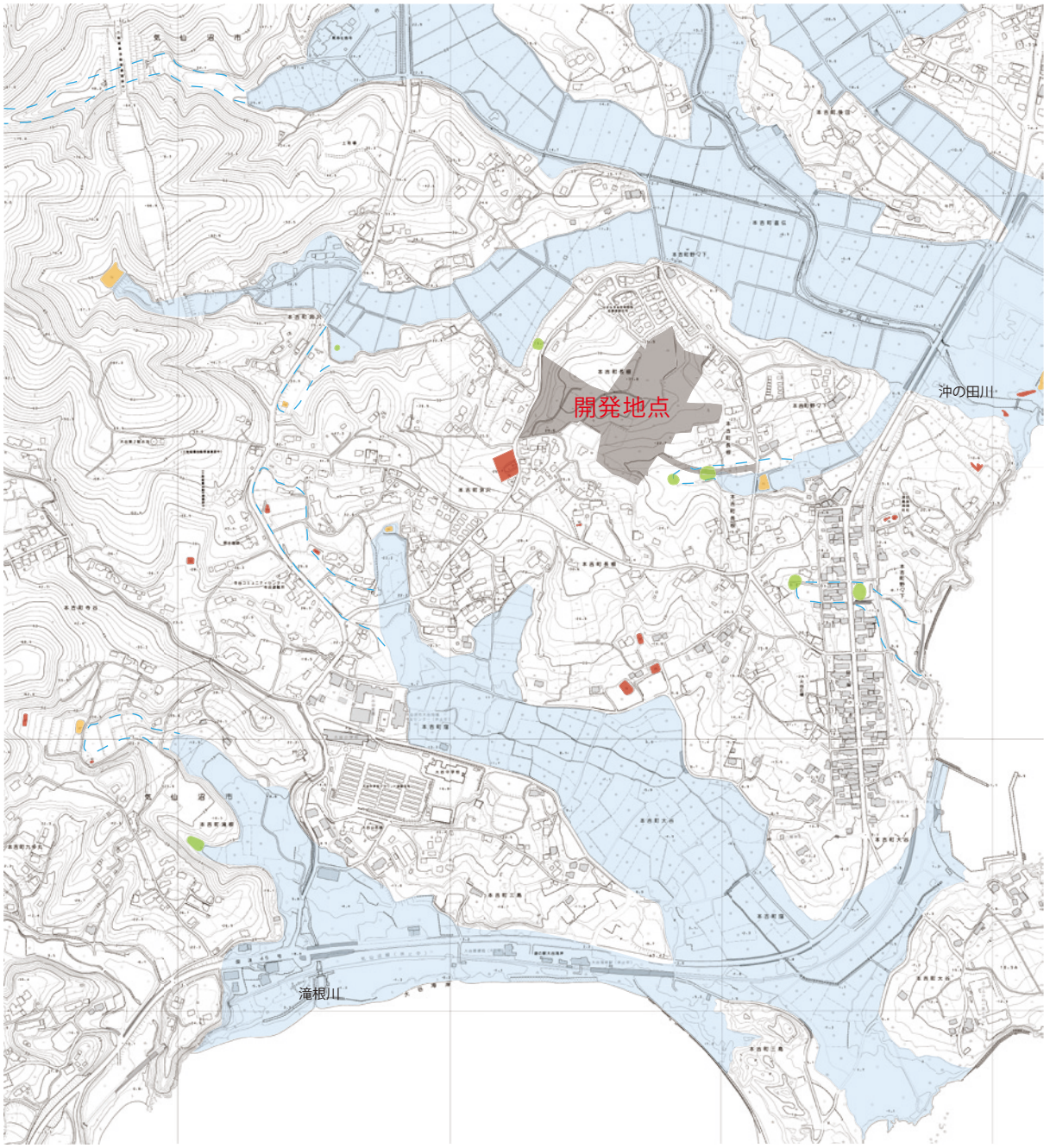
〇中世

城館跡は市内に 80 か所以上と極めて多い。震災前には、猿喰東館跡（39）や陣山館跡で確認調査が行われているが、実質的な調査は行われていない。震災以降、猿喰東館跡で調査が行われ、堀跡などが見つかっている。

峰平館跡（６）は、本遺跡の北約１㎞に位置するが、修験（本山派）の大寿院跡である。ここに、桃生郡中島城主の小野寺出雲守道広の六代孫の小野寺道重が、天文年間（1532 ～ 1555）に当地を

１．響館跡（縄文･古代･近世） ２．野々下遺跡（縄文・古代） ３．鳳京館跡（中世） ４．寺谷古墳群（奈良） ５．洞館跡（中世） ６．峰平館跡（中世） ７．堀合館跡（中世） ８．直伝遺跡（縄文） ９．塚館跡・土久戦場館跡（中世）10. 照合館跡（中世）11. 中学校付近遺跡（縄文・古代）12. 三島古墳群（古墳）13. 鳴壺館跡（中世）14. 市史跡 前浜貝塚（縄文）15. 府中館跡（中世）16. 平磯古館跡（中世）17. 波路上西館跡（中世）18. 波路上西遺跡（縄文）19. 杉の下南遺跡（奈良・平安）20. 杉の下貝塚（縄文）21. 波路上東館跡（中世）22. 岩井崎遺跡（縄文）23. 石川原遺跡（縄文）24. 道貫館跡（中世・近世）25. 菖蒲沢遺跡（縄文）26. 南最知城跡（中世）27. 内田遺跡（縄文）28. 堀合館跡（中世）29. 長磯浜遺跡（縄文）30. 森館跡（中世）31. 市史跡南最知貝塚（縄文・古墳）32. 末永館跡（中世）33. 長磯高遺跡（古代）34. 最知中館跡（中世）35. 塚館跡（中世）36. 海蔵寺遺跡（古代）37. 海蔵寺北遺跡（古代）38. 緑館遺跡（縄文･古墳･古代）39. 猿喰東館跡（中世）40. 猿喰西館跡（中世）41. 荒沢遺跡（縄文）42. 星谷遺跡（縄文・古代）43. 相馬館跡（中世）44. 八幡館跡（中世）45. 長平遺跡（縄文）46. 寺沢遺跡（古代・近世）47. 古館跡（中世）48. 高谷館跡（中世）49. 金取館跡（中世）50. 曲要箒松下遺跡（縄文）

第２図　周辺の遺跡



凡例

- 溜池（絵地図に無、現在は有）
- 溜池（絵地図に有、現在は無）
- 溜池（絵地図に有、現在も有）
- 沖積地他

※　破線部は絵地図で沖積地と想定される地域

第３図　開発地点位置図 (1/12,000)

賜り、平館を築いたとされる。その子（重房）や孫（但馬）が山伏となり、大和国大峰に入峰し、孫が吉祥院中将公権大僧都に補せられたので、峰館と云われるようになったとされ、そのことを契機として、平館と峰館を合わせて、峰平館と呼ぶようになったとされる（岩尻邑風土志）。ここで重要なのは、但馬の子が小野寺宮内であり、嫡子弥惣エ門とその子円寿院に峰館を譲り、仲子の兵左エ門と嚮館を築いたことである。

なお、元禄９（1696）年に、仙台藩第四代伊達綱村が岩尻村峰屋敷源内宅に宿泊していたが、この峰屋敷とは峰平館のことである。

〇近世

嚮館跡が所在する本吉町長根は、江戸時代には岩尻村で、明治８年に岩尻・平磯村が合併して大谷村となるが、両村の境が滝根川である。

大谷は、仙台藩と南部藩を結ぶ気仙道の宿場町として、1600 年代に順次整備されたが、明治 29 年の津波で大きな被害を受けたと言われる。この道は、仙台から石巻市小野で石巻街道と別れて、柳津を経由し海岸沿いに大谷、気仙沼を通り南部領に至るが、先の津波で低地を通るルートは被害を受けている。なお、気仙道は、明治に入ると陸前東浜街道と称されるようになる。

本吉郡では、金・鉄・塩が重要な産業となっており、仙台藩において重要な位置を占めていたと思われ、鮎貝家などの一部を除き、直轄地となっていた。金に関しては、岩尻村内にも岩倉金山と岩尻坑があり、元禄６（1693）年に仙台藩第四代伊達綱村が、「ふることのためしを誰もいわじりに今を春べと黄金花咲く」と詠んでいる。鉄に関しては、近隣ではその痕跡を認められないが、塩はやや時代が異なるが波路上で大規模な塩田が営まれていた。寛永３（1626）年に、伊達政宗は塩の専売制を実施し、この頃、市内には、内の脇と鹿折村の蔵底に塩田があったとされ、天和２（1682）年に、波路上塩田の開発が許可されている。当然、これ以前にも製塩がおこなわれており、近年の調査で古代から中世の製塩土器が出土し始めている。嚮館跡は、中世の屋敷として遺跡登録されているが、実際は、江戸時代の慶安年間（1648 ～ 1651 年）に小野寺宮内が屋敷を構えた場所と認識されていた。

仙台藩第五代伊達吉村が、享保 15（1730）年７月に本吉郡を巡視し、『続隣松集』の同年７月 23 日には、「岩尻の小野寺何がしとかやいふもののやどりに着ぬ。四五日足をとどめて山野逍遥し侍り。このやとりはわきて異方より景色勝れ海のおもても居ながらに見わたされて後は廣野田地につつきいく日ありともあきたるまじき所なり」とある。この小野寺某の屋敷については、後述する。

なお、経塚の周囲は墓地（地目も墓地）となっており、江戸時代の天和２（1682）年～安政年間までの墓石 40 基が確認されたことから、発掘調査期間中に改葬され、仙翁寺の墓地の一画に集められた。また、追加伐採された地点から、江戸時代の明和～天保年間までの墓石 14 基が確認され、こちらは女性や子供の墓が多く見受けられた。こちらも、併せて仙翁寺に改葬された。

市内の経塚の調査例としては、国道 45 号線のバイパス建設時に発見された赤岩館経塚がある。経塚からは経石が 8740 点出土し、大半が一字一石であったと報告されている。この経塚は２回の埋納があり、１度目が享保３（1743）年で、２度目は時期が不明となっている。

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

震災により、約 9500 世帯が被災し新たな居住地確保が必要となり、新たな造成による集団移転先が検討され、平成 23 年度に、「今後の住まいに関する意向調査」が実施された。大谷地区についても、地元の協議会と気仙沼市の間で協議がなされ、本吉町長根地区に移転する方向性が決まり、平成 24 年 11 月 20 日に本事業の国土交通省の大臣同意が得られ、測量・設計・用地取得に着手することとなった。また、災害公営住宅に関しても、平成 24 年度に「今後の住まいに関する意向調査」が実施され、集団移転事業地に併せて建設されることとなった。

平成 24 年７月 12 日には、防災集団移転候補地の現地踏査が、宮城県教育委員会、気仙沼市教育委員会、気仙沼市用地課の三者によって行われ、大谷地区の集団移転先候補地である嚮館跡における確認調査の必要性が認識された。

平成 26 年５月７日付で、埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出されたことから、５月 27 日、県教育庁文化財保護課、市教育委員会、市防災集団移転推進課の三者が現地で協議をし、雑草などの除草終了後、７月頃から確認調査に入ることを確認した。

６月に除草状況の確認のため現地に赴いたところ、竹林となっていた墓地の一画に塚状の高まりがあり、その上に石碑を確認した。後日、拓本を取ったところ、心と 137 文字が彫られていて、延宝７（1679）年に小野寺宮内が経石を埋納した経塚であることが判明した。

その後、６月 16 日に、事業者の市、工事主体者の大成建設及び市教育委員会の三者で打合せをした。この段階では、地権者が開発に同意し、発掘調査の承諾は得られていたものの、立木は未買収のため伐採できないことから、とりあえず調査可能な範囲のみを対象とし、確認調査の状況によって対応することとした。また、経塚に関しては、調査の状況によりその取り扱いを協議することとした。６月 19 日付で埋蔵文化財発掘の通知が提出された。

なお、調査費用は、確認調査が市教育委員会分、本調査並びに整理・報告書作成が市役所（防災集団移転推進課）分で、いずれも国の東日本大震災復興交付金によるものである。

２．確認調査（第４・５図）

確認調査は地権者からの同意を得て、用地買収に先立って平成 26 年７月１日から開始し、８月６日で終了した。本事業は、防災集団移転 37 戸、災害公営住宅 67 戸（いずれも調査開始時点）、対象面積は 5.07ha（未伐採区域を含む）であり、便宜的にＡ～Ｄ区の調査区を設定し、63 か所のトレンチを調査した。調査面積 2,184 ㎡であった。

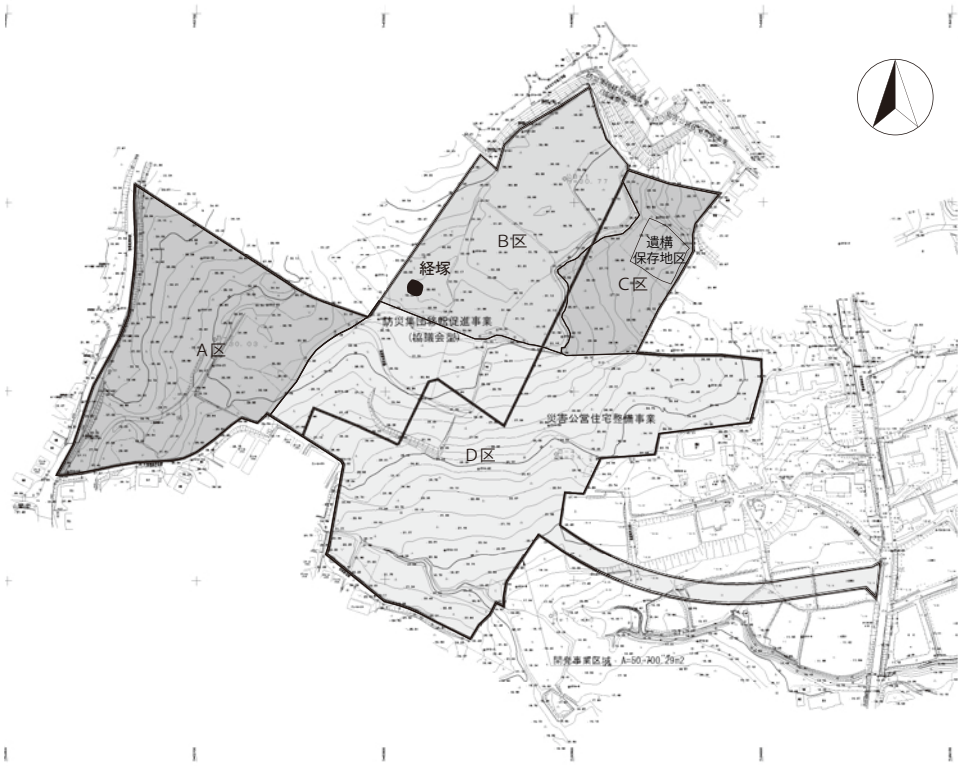
事業地の地目は、田、畑、山林、ため池、原野、雑種地、墓地、公衆用道路であり、調査前には、過去の造成工事で、かなり改変を受けているという情報を得ていたが、結果的には、改変を受けているものの、遺構が残っていることが確認できた。

調査の結果、Ｂ・Ｃ・Ｄ区の一部で、下記のような遺構が確認された。

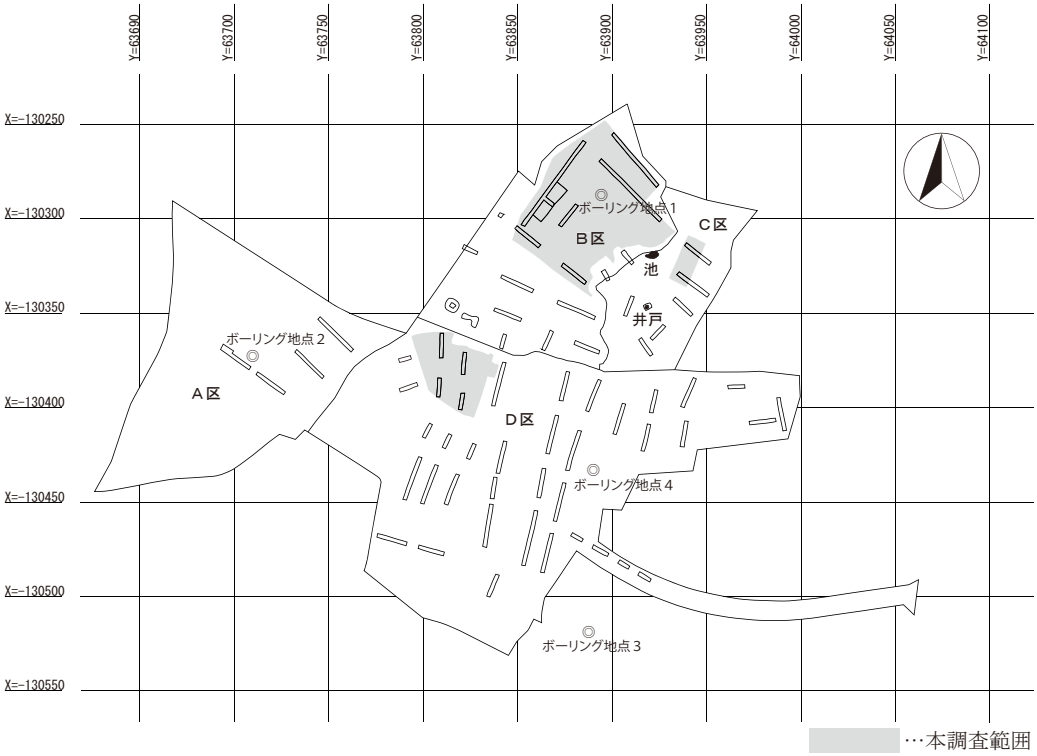
Ｂ区－縄文時代の包含層、土坑・ピット多数

Ｃ区－縄文時代の土坑、ピット若干

Ｄ区－柱穴と落とし穴



第４図　開発区域及び調査区図(1/4,000)



第５図　確認調査トレンチ配置図(1/4,000)

これにより、７月 23 日に、県文化財保護課、市教育委員会、調査員が現地で協議し、本調査の計画について協議を行い、B･D区を本調査とし、特に包含層にサブトレンチを入れて、詳細なデータを得ることとした。C区で遺構が見つかった箇所については盛土予定地であることから遺構保存地区とし、遺構を確認できなかった場所については工事の着工を認めることとした（追加の確認調査個所を除く）。

経塚の東側の墓地に関しては、８月４・５日に仙翁寺に改葬が行われ、調査員が立会い、最終的に墓石の数を 40 基と確定した。

なお、遺跡台帳で土塁とされていた高まりを墓地の東側及び南側の一部で確認したが、トレンチ調査の結果、耕地掘削により墓地側に土を寄せたかのように観察され、近年のものと判断した。

３．本調査

確認調査の結果を受け、８月１日に、市教育委員会、事業者の市防災集団移転推進課と工事主体者である大成建設の三者で協議した。復興調査では、原則として調査の対象は工事によって壊される範囲までとされているが、B・D区は最大５mの削平を行う予定であり、計画変更は困難なことから本調査を実施することとなった。なお、後述するC区は、東側半分が盛土されることから、遺構保存地区とすることとした。調査期間は９月から 12 月いっぱいとし、墓地の南側（D区）を先行して調査を終えることとし、立木による未調査部分については、今後立木の伐採の進捗に合せて追加の確認調査を実施することとした。なお､この追加伐採地区（対象面積 2,400 ㎡）については、11 月５日～７日に確認調査を行い、計５か所（112 ㎡）のトレンチを入れたものの、遺構は確認できなかった。また、確認調査を要しない追加伐採地区に 20 基程度の墓地が見つかり、こちらも改葬された。

経塚に関して､事業者から設計変更により保存できる余地があるということから､８月 20 日付で、市教育長から市長宛に要望書を提出した。

本調査は９月１日から墓地の南側のD区において調査を開始し、９月 19 日には一連の調査を終了し、10 月９日に、D区の空中写真撮影を実施し、この地区の調査を完了した。調査面積は 1,229 ㎡であった。

B区は、９月５日から表土除去を始め、断続的に行い、表土除去は 11 月 19 日に終了した。調査は９月 10 日から調査を開始し､徐々にD区からB区に移行し､９月 24 日からB区のみの調査となった。

９月 16 日には、地元の大谷小学校６年生（42 名）と教員２名を対象に、B区の SX13 で体験発掘を実施した。また、11 月 29 日に現地説明会を実施する予定だったが、降雨のため中止にした。ところが、近隣住民を中心に来場者（約 60 人）があったため、急きょ簡易的な説明会を実施した。

経塚に関しては、この場所に集会所を建設する計画であったが、設計変更により保存されることに決まったので、一部トレンチ調査を実施し、現状のまま保存した。

C区に関しては、工事による削平箇所の一部の表土を改めて除去し（338 ㎡）、遺構が残存してないことを確認した。また、井戸跡については工事により削平されるが、周辺住民の聞き取り調査から、近代のものと判明し、截ち割り状況の写真撮影のみで終了とした。

11 月下旬からは天候不順のため、調査の進捗が悪くなったものの、なんとか 12 月 10 日に空中

写真撮影を終えることができた。12 月 25 日には、機材の撤収を終え、すべての調査を完了した。Ｂ区の調査面積は 4,130 ㎡であった。最終的な本調査の範囲は、第５図を参照されたい。

発掘調査が完了したのを受けて、平成 27 年 1 月 23 日に、現地において、市防災集団移転推進課、大成建設、市教育委員会の三者で、今後の埋蔵文化財に関する取り扱いを下記の通り確認した。

①経塚は保存することとし、周囲の立木と竹の根を取り除くために表土を漉き取って、土を入れ替えること。②経塚は掘削せず、山砂と土砂で覆い、供養碑を建て直すこと。③Ｃ区の保存地区は、表土を 30 ㎝漉き取る際に立会い、災害公営住宅を建設するためには再度書類の届出が必要であり、災害公営住宅整備課に引き継ぎをすること。④Ｂ区の包含層（SX13）の西側については、重機による掘削時に立会うこと。

このことを受け、平成 27 年３月４日と５月 14 日に、SX13 の西側を掘削し、遺物の回収を行ったが、遺物は少なかった。

４．遺構保存地区

確認調査で、事業地の北東端（Ｃ区の一部）において、縄文土器や石器を伴う土坑などが若干見つかった。当該地区は東側に向かって下がる斜面にあり、一部浅い谷状となっており、最大 110 ㎝の表土が残っている。この個所は、盛土により遺構が破壊されないため保存地区とし、その面積は 273 ㎡である。平成 27 年３月９日に、保存地区の表土を 30 ㎝削平するため、立会っている。

ところが、５月 29 日に遺構保存区域で業者が表土の掘削をしているのを偶然発見し、すぐさま工事を中断させ、６月１日に状況確認の調査を実施した。その結果、保存地区の表土などが削平され、地山までは掘削が及んでいなかったものの、確認調査で発見した土坑に加え、新たに落し穴状の土坑１基を確認した。６月５日に当該地区の追加の表土漉き取りに立会っている。また、８月６日、保存区域の北端に擁壁を設置するための掘削に立会っているが、新たな遺構の発見はなかった。

遺構保存地区は災害公営住宅の事業地であり、２軒分の住宅が建設されることから、平成 27 年７月 13 日付で、埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、11 月 16 日付で埋蔵文化財発掘の通知が提出され、浄化槽掘削部分のみの確認調査となった。

12 月２日に、浄化槽掘削に関する打合せを現地で行い、平成 28 年３月 25 日に、浄化槽の確認調査を実施したものの、遺構・遺物は確認されなかった。

一方、経塚に関しては前述の１月 23 日の現地協議にもかかわらず、５月 26 日に、工事業者が経塚の頂部の一部を掘削し、コンクリートの基礎を打ってしまったと連絡を受けたため、現地に赴き作業を中止させ、コンクリートが固まった 29 日に持ち上げ、状況を確認した。その結果、寛永通宝２枚を採集した。６月１日に、改めて掘削した土を精査したところ、76 枚の寛永通宝を確認し、出土した扁平な石を洗浄したが、肉眼で経石は確認できなかった。

経塚の保存に関しては、平成 27 年 11 月４日に現地で再度確認の打合せを行い、11 月 10 日から整備工事に着手して、12 月１日に保護工事を完了した。この際、数回立会い、前述の掘削土を埋め戻す際に、10 枚の寛永通宝を追加で発見している。

なお、この一連の掘削行為に関し、事業者である市防災集団移転推進課と工事主体者である大成建設に抗議を行い、市防災集団移転推進課から再発防止のための始末書を提出させている。

５．発掘調査方法

調査はまず重機で表土を除去し、その後人力により遺構確認し、この段階で出土した遺物は、10m グリッドメッシュで取り上げた。その後、必要に応じて人力で精査し、遺構は半截し掘り上げている。SX13 については、最初にサブトレンチを入れて土層を確認し、その後層位ごとに遺物を取り上げた。

Ｄ区の遺構の平面測量は、GPS による基準点測量を行い、㈱ソキア・トプコン製の自動追尾トータルステーションと㈱CUBIC 製の測量専用ソフト「電子平板遺構くん」を使用した。Ｂ区についても、平面及び断面の測量には、上記の測量機器を使用したが、最終的な平面図は、㈱アスコに測量を委託し図化した。写真撮影は、各調査員がデジタルカメラを使用して撮影した。

６．基本層序

調査の段階で、基本層序のための図面は作成していない。これは、確認調査の段階で、表土の厚さに差異はあるものの、表土の下が確認面である岩盤などの地山であったからである。確認調査の段階でトレンチごとに地山が一様ではないことが多かったのは、地元で「あま岩」と呼ばれている岩盤が、風化などにより土壌化する様々な段階の状況で確認されたものと言える。また、一見するとローム層のような土も確認されたが、土壌化する過程の一段階であることが確認できた。

以下、工事用のボーリング調査結果があるので、それを掲載しておくが、学術的裏付けはしていない。ボーリング箇所は第５図を参照されたい。

〇ボーリング１（Ｂ区）　表土の下 0.11 ｍで暗褐色粘土（泥質岩片を少量含み、全体的に固結粘土状を呈する）、0.43 ｍで強風化褐色泥質岩（風化作用が著しく、軟質で土壌化が顕著だが、岩組織は残す）、3.93 ｍで風化黒灰褐色泥質岩（やや軟質化しており、全体的に亀裂が発達している）である。

〇ボーリング２（Ａ区）　表土の下 0.23 ｍで強風化灰褐色砂質凝灰岩（著しく軟質化し、粘土状を呈する。亀裂面は不明瞭である）である。1.35 ｍより明褐色になり、岩組織は明瞭になるが軟質である。

〇ボーリング３　表土下 0.18 ｍで暗褐色粘土（凝灰岩礫を含む）、1.86 ｍで強風化明褐色泥質岩（著しく風化し、土壌化するものの岩組織は残す）である。

〇ボーリング４（Ｄ区）　表土より 0.25 ｍで暗黒色有機質粘土（腐植物を含み、一部炭化物が混じりやや固結粘土状を呈する）、0.48 ｍで強風化褐色砂質凝灰岩（風化作用によりコアは軟質化著しく、粘土状を示す。亀裂面は不明瞭であるが岩組織はやや認められる）である。

７．遺跡の名称について

本遺跡は嚮館跡であるが、読み方は、「むかいたて」「むかいだて」「きょうだて」など様々ものが入り乱れていた。そこで、調査前に調査員で協議を行い、遺跡の呼び名は、紫桃正隆著の『史料仙台領内古城館』に準じ、訓読みの「むかいたて」に統一することとした。

８．調査体制

気仙沼市では、震災復興計画が策定される中で、集団移転事業など多くの開発事業が、周知の埋蔵文化財包蔵地で行われることから、震災以前の文化財保護体制では、発掘調査を迅速に行うことができないことが見込まれた。

そこで、市では平成 24 年４月に専門職員１名を再任用するとともに、平成 25 年１月からは、地方自治法 252 条の 17 項に基づく職員派遣（自治法派遣）により、鹿児島県からの派遣職員１名と宮城県が復興事業推進のため採用した任期付職員２名の派遣を受け、発掘調査体制の整備を図った。さらに、平成 26 年度からは文化庁の協力による自治法派遣を１名増員し、平成 25 年４月及び平成 27 年１月に市任期付職員各１名を採用して、体制の強化を図った。また、発掘調査の規模や内容等を勘案し、宮城県教育委員会に専門職員の派遣を随時お願いし、平成 26 年度からは報告書作成のためにも派遣協力を得ている。

各年度の調査体制及び宮城県教育庁文化財保護課の調査協力は、以下のとおりである。

調査担当　気仙沼市教育委員会　生涯学習課文化振興係

平成 26 年度

≪事務局≫

生涯学習課長　菅原京子　　主幹兼文化振興係長　昆野賢一

主幹　幡野寛治　原田享二（市任期付職員）

主査　千葉絢子　森幸一郎（鹿児島県派遣）　石川　郁（市任期付職員　１月～）

技師　鹿島直樹（県任期付職員　～８月）

平成 27 年度

≪事務局≫

生涯学習課長　菅原京子　　課長補佐　鈴木實夫　　主幹兼文化振興係長　幡野寛治

主幹　原田享二（市任期付職員）　永濵功治（鹿児島県派遣）

主査　千葉絢子　山本克美（横浜市派遣）　石川　郁（市任期付職員）

≪嚮館跡調査体制≫

平成 26 年度

〇調査担当

課長補佐　鈴木實夫　　主幹　野﨑　進（山梨県笛吹市派遣）

〇調査協力　宮城県教育庁文化財保護課

加藤勝仁（神奈川県派遣）細川金也（佐賀県派遣）小山　朗　髙橋洋彰　傳田惠隆（宮城県）

〇調査補助員

石田俊一　伊藤喜利子　伊藤大雅　伊藤正治　岩渕敏明　尾形良信　小国義雄　小野寺功

小野寺信幸　小野寺勝　片桐卓雄　榧木政夫　木下富男　熊谷昭徳　小松文一　小松正芳

佐藤善一　佐藤孝夫　佐藤廣幸　菅原哲也　菅原元和　千葉春夫　照井　修　常世俊市

畠山国蔵　畠山孝雄　三浦重雄　三浦八朗　守　千秋　横山久義　吉田俊男

平成 27 年度

〇整理・報告書作成担当　主幹　野﨑　進（山梨県笛吹市派遣）

〇整理・報告書作成協力　宮城県教育庁文化財保護課　堤　英明（佐賀県派遣）

〇整理作業補助員

窪田　朋　齊藤千歳　千葉修一　藤本　愛　村上英年　村上英博

平成 28 年度　印刷・製本　気仙沼市教育委員会　生涯学習課

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

今回、縄文時代早期・後期、古代、近世の遺構が確認された。縄文時代のものは、竪穴建物跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、落とし穴、フラスコ状土坑、集石土坑、土坑、ピット、溝状遺構などである。古代は竪穴建物跡、近世は掘立柱建物跡、竪穴状遺構、井戸跡、経塚、柵列などである。

以下、地区ごとに概要を報告するが、主な遺構データは一覧表としてまとめて掲載してあるので、参照されたい。

１．遺構

（１）Ｂ区（第９～16図）

この調査区は、後世に水田として土地利用がなされたため、もともと凹凸があった地形を平坦に削平したと思われ、遺構の残存状況は遺構ごとに異なっている。

建物跡（第９図）

SB41は、北側３間、南側４間と不整な形態の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－65°－Ｗである。遺物は少ないが、縄文時代の所産としておきたい。SB43の主軸方向はＮ－70°－Ｅである。

SI81は、ピットの配列から建物と推定し、径４ｍ以上の竪穴建物跡が削平されたものと考えた。

SI40は、竪穴建物跡と考えられる。一辺が6.1ｍで、遺物は縄文土器が１点出土しているのみである。ただ、SX13の包含層から古代の坏などがわずかに出土していることから、古代の遺構があっても不思議ではないことから、根拠はないが、古代の所産としておきたい。

集石土坑（第10図）

SX55は、当初集石土坑として確認したが、集石を取り上げた段階で、土器が複数出土し、小さな竪穴状の遺構となった。小竪穴は、2.7×1.9ｍと文字通り小規模なもので、土器から縄文時代早期末と考えられる。集石は82点の石が出土したが、一部は小竪穴の覆土の石を含んでいる可能性があり、やや大きさにばらつきが見られ、火熱や加工の痕跡は認められなかった。総体的に、長軸５～10cm、短軸４～８cmの自然礫が主体で、概ね亜円形の石が選別されていることが窺える。重量は200～400gに集中する。

SX42も集石土坑で、79点の石を確認し、76点が完存していた。火熱や加工の痕跡は認められず、長軸５～８cm、短軸４～７cmの概ね亜円形の自然礫が選別されている。重量は100～300gのほぼ範疇である。

埋設土器（第10図）

SX66は埋設土器で、重機で表土を除去した段階で確認できたもので、後世に上部を削平されている可能性が高い。周囲に柱穴の配列を見つけることができなかったので、屋外埋設土器としておきたい。

落し穴（第10図）

SK56は落し穴で、底面に小ピットが１個見つかった。覆土の状況から、縄文時代早期の可能性が高い。

井戸跡（第10図）

SE60は近世の井戸跡と思われ、あまり深くないことから、溜め井戸かと思われる。

土坑（第 11 ～ 14 図）

貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑は、13 基確認された。削平されているため、深さは様々であり、最大で 1.2 ｍである。平面形態は概ね円形に近いが、多くは上端が崩落していた。比較的に残存状態がよいのが SK62 で、上端に比べ下端の大きさが倍近くになっている。底面に小ピットを有するのは、SK27 と SK62 だけである。この他、土坑は 35 基中、22 基を図化した。覆土の状況から、縄文時代と近世のものと考えている。

柵列（第 15 図）

柵列は、６列が見つかった。SA47・48 は１個ピットが欠けるが、５～６個のピットが柱筋を揃えて南北に並ぶことから、同時期のものと考えられる。主軸方向は、Ｎ－ 6°－Ｗである。SA50 ～ 52 は４個、SA54 は３個のピットが並び、SA50 の主軸方向はＮ－ 70°－Ｅ、SA52 の主軸方向はＮ－ 69°－Ｅで軸方向が同じで、また、SA51 の主軸方向はＮ－ 87°－Ｅ、SA54 の主軸方向がＮ－ 84°－Ｅとほぼ同じ東西方向であることから、それぞれ関連性があるのではと思われる。年代の根拠は希薄だが、近世の所産と思われる。

包含層（第 16 図）

SX13 は、確認調査時に多くの遺物が黒色土の広がりで出土したことから、本調査に入る大きな契機となった包含層（埋没谷）である。調査区内では、表土から深さ最大 1.5 ｍを測り、幅 17 ｍほどの谷が、南から北に向かって下がっている。サブトレンチ調査により、大きく３層に分かれることが判明したため、層位ごとに遺物を取り上げている。土器は、重量換算で全体の約８割が出土した。

（２）Ｄ区（第 17 ～ 20 図）

縄文時代の遺構は、落とし穴 3 基である。SK01・02 は、いわゆるＴピットの下部と思われ、本来は上部が大きく開く形状だったと想定される。Ｔピットは、本吉町内では平貝遺跡で１基が確認されている。SK07 は底面に小穴が２つを有する落とし穴である。

その他、掘立柱建物跡が３棟、竪穴状遺構１軒、井戸跡１基が確認されたが、概ね近世の所産とみられる。

SB10 は、東西２間、南北６間の南北棟で、すべての柱穴で柱根跡を確認している。主軸方向はＮ－ 19°－Ｗで、平面規模は、北側柱列で総長 3.82 ｍ、西側柱列で総長 11.46 ｍである。また、北側で間柱の柱穴を５個確認したことから、出入口などの施設があったと推測される。遺物は煙管が１点出土し、小泉編年の第Ⅲ段階である。SB11 の主軸方向は、Ｎ－ 20°－Ｅである。

SI08 は削平されていたため、遺構確認段階で不整方形であった。もともと掘り込みがほとんどない建物と想定されるが、柱穴などの痕跡は見つかっていない。土間状の硬化面が中央部に広がっていた。主軸方向は、Ｎ－ 17°－Ｗである。遺物は、陶磁器、釘や青銅製品が少量出土し、陶磁器は概ね 17 世紀後半から 18 世紀前半段階のもの、煙管は小泉編年の第Ⅱ段階である。

SK05 は、その形状や深さから溜め井戸と考えられ、SB12 はその周囲にあることから、井戸の関連施設かもしれない。主軸方向は、Ｎ－ 21°－Ｗである。

（３）経塚（第 21 図）

Ｄ区の北側、Ｂ区の南東端で発見されたもので、本吉町時代に行われた石碑の悉皆調査からは漏

れていたもので『本吉町の石碑』には掲載されていない。調査前には竹林となっており、周囲の墓石群は確認されていたものの、竹林の伐採後、塚状の高まりと頂部に供養碑が見つかり、その碑文から経塚（礫石経）と判断した。

経塚は、長軸（東西）7.3ｍ、短軸（南北）6.7ｍ、比高差は西側で1.5ｍ、東側で1.1ｍの東西にやや長い長方形を呈する。東側の斜面の下部が緩やかな傾斜となっているため、東側が主たる登り口と推定される。表面には、扁平な河原石が散乱していた。頂部の標高は33.7ｍで、調査区では一番高い場所に築造されている。表土は最大で約50㎝であるが、調査前に確認された竹や樹木の根によって攪乱されたものと思われ、元々は10㎝程度ではなかったかと推測される。

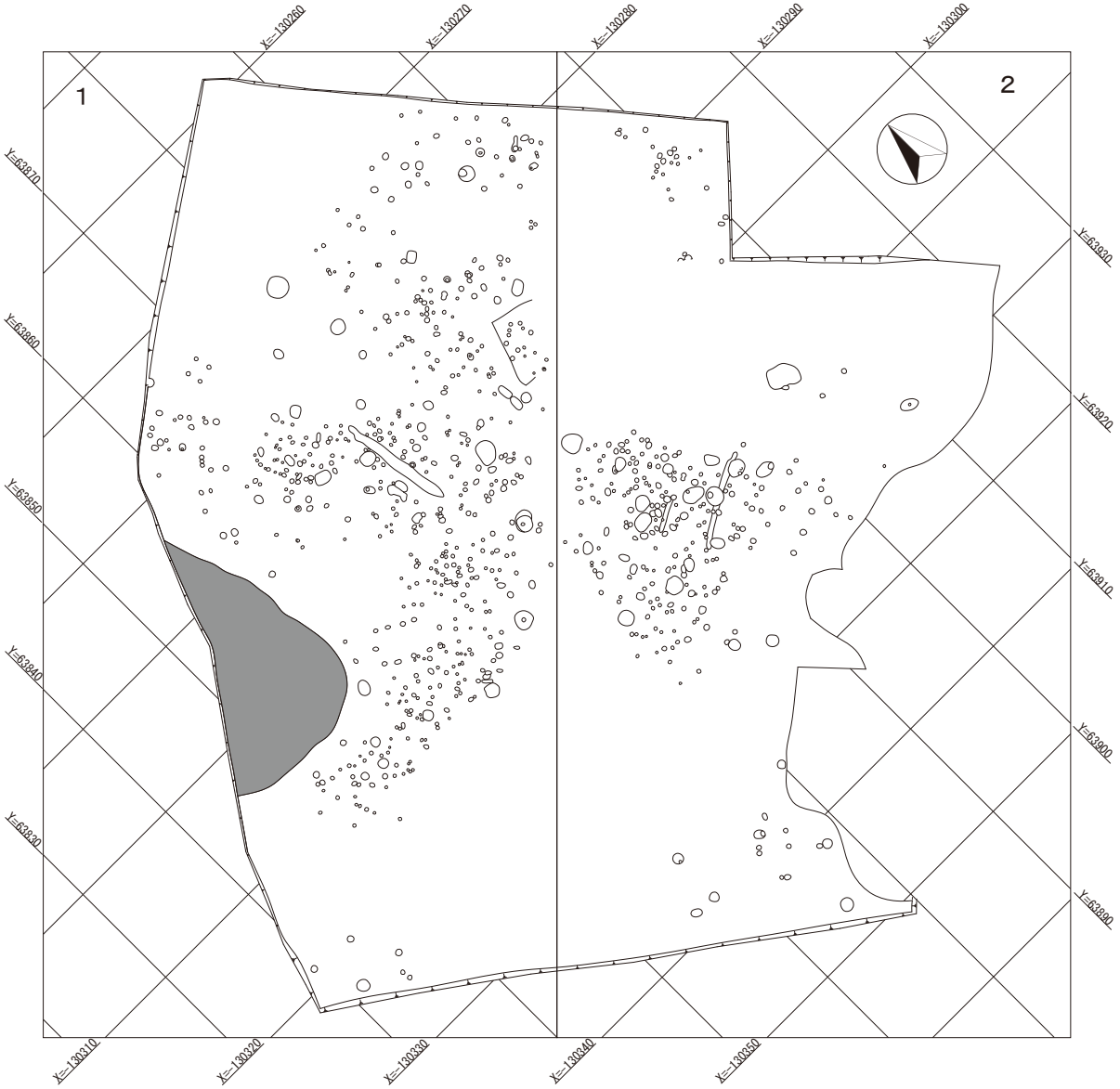
築造にあたり、地山面まで表土を削平し、五段階の盛土を版築状に搗き固めている。頂部の表土を除去すると、最上部の盛土に、蓋石のような平坦で大形の石が置かれ、周囲に小形の石が囲むように設置されていた。大形の石の上には玉石のような石が、表土から10㎝ぐらいの深さから下にある程度固まって確認された。

遺物は、古銭が出土しただけで、他の人工的な遺物は出土していない。ただし、扁平な河原石が地表面やトレンチから採取できたことから、肉眼や一部赤外線による観察をしたが、墨書は確認されなかった。古銭はすべてを発掘調査で確認したわけではないが、明確な集中は認められず、蓋石状の大形の石の周囲から平面や層位的にランダムに出土している。これらは、蓋石状の大形の石を設置する前後の段階で、地鎮的目的で古銭を撒いたものと思われ（散銭・撒き銭）、築造時に用意できた銭を使用したと考えられる。

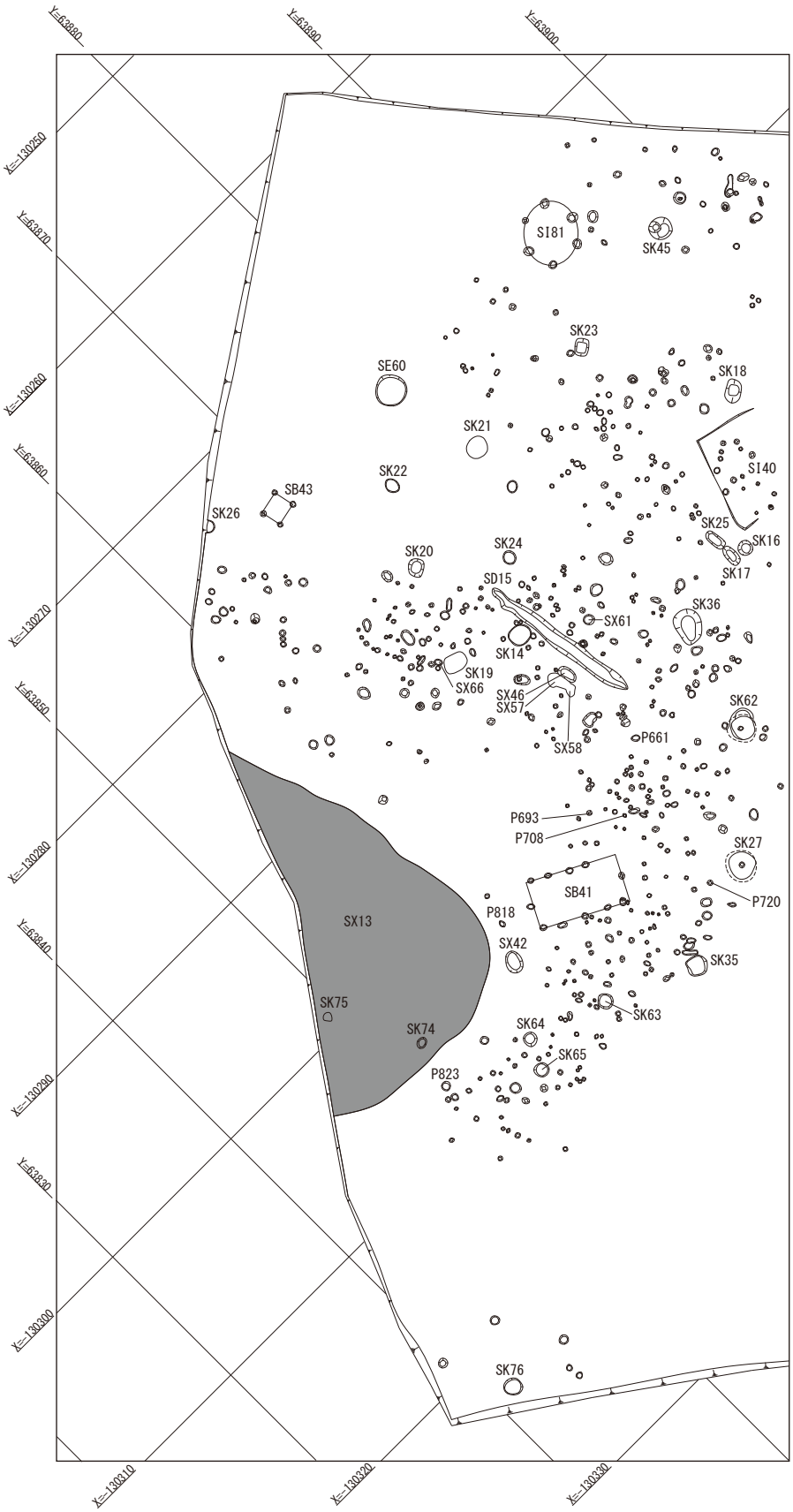
古銭は122点が出土し、渡来銭の元豊通寶（宋銭、篆書体、始鋳1078年）１点、古寛永通寶96点、新寛永通寶（文銭）23点、寛永通寶（新古の判読不明）２点である。古寛永通寶は、万治２（1659）年まで鋳造されたもので、新寛永通寶の文銭は寛文８（1668）年から天和３（1683）年の16年間に亀戸鋳造所だけで造られたものである。その後、元禄10（1697）年から、無背の新寛永通寶の鋳造が始まることから、経塚の築造年代は、文銭の始鋳以降の寛文期から、無背の新寛永通寶の流通が始まる元禄期までと、概ね古銭から限定される。

一方、頂部で確認した供養碑は、長さ約165㎝、幅約65㎝、厚さ約30㎝で先端がやや尖った板状（いわゆる尖頂方形）の自然石を使用し、細部に若干の加工があり、正面上部にせん刻された心と137文字が彫り込まれていた。肉眼では判読が難しい文字もあり、拓本をとったところ、図版10のように判読できた。要約すると、大乗妙典一千部の読誦供養に、子孫繁栄を願って法華経八巻分を写経した石を入れた塚を、延寶７（1679）年に小野寺宮内が造立したとある。古銭の内訳結果とも齟齬がなく、信憑性は高いと言えよう。

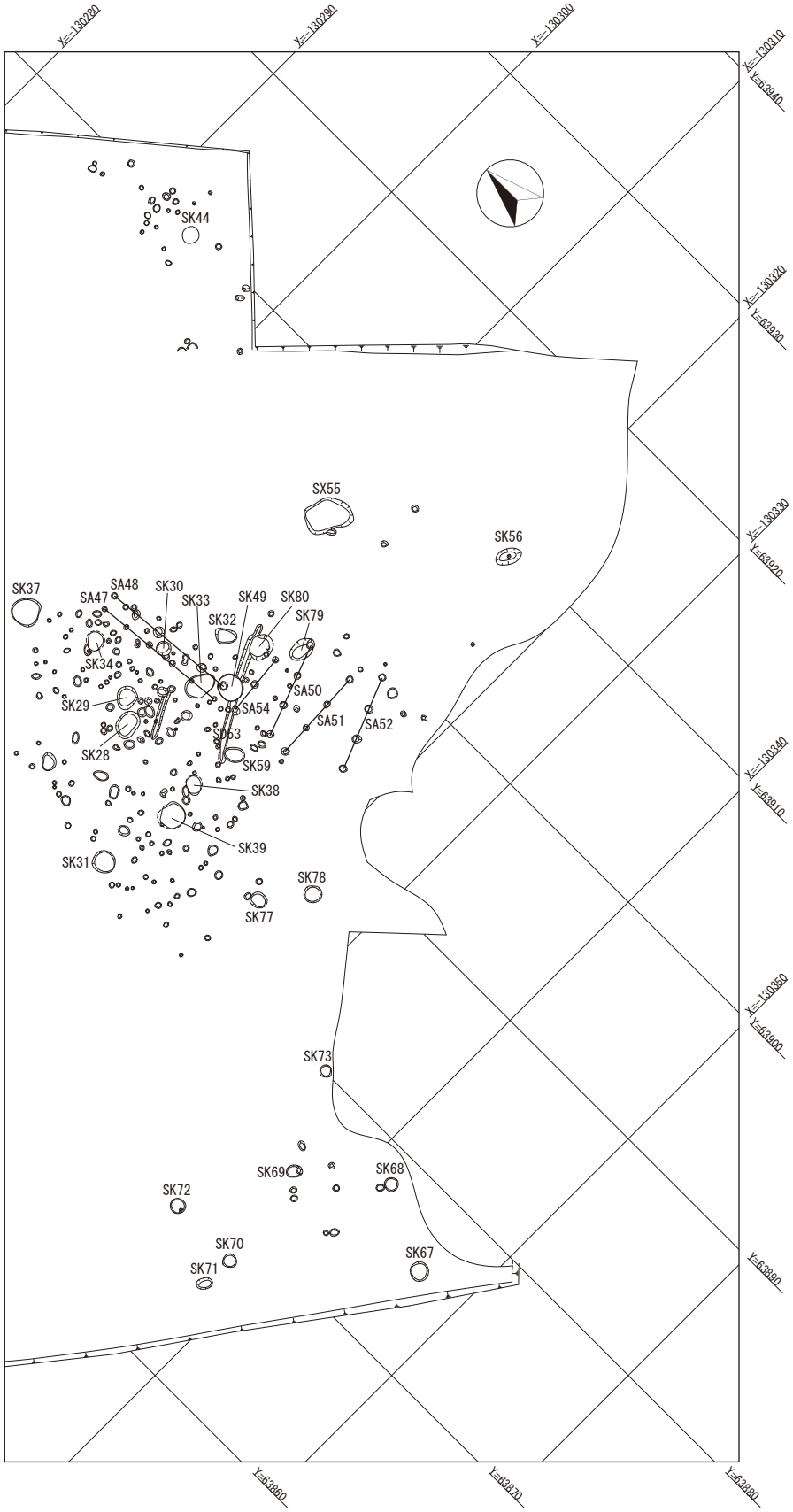
この経塚は市内で最古の経塚（礫石経）であり、小野寺宮内については後述するが、築造者が大肝入を務めた人物と特定できることから、一部トレンチ調査を実施しただけで、保存に至っている。



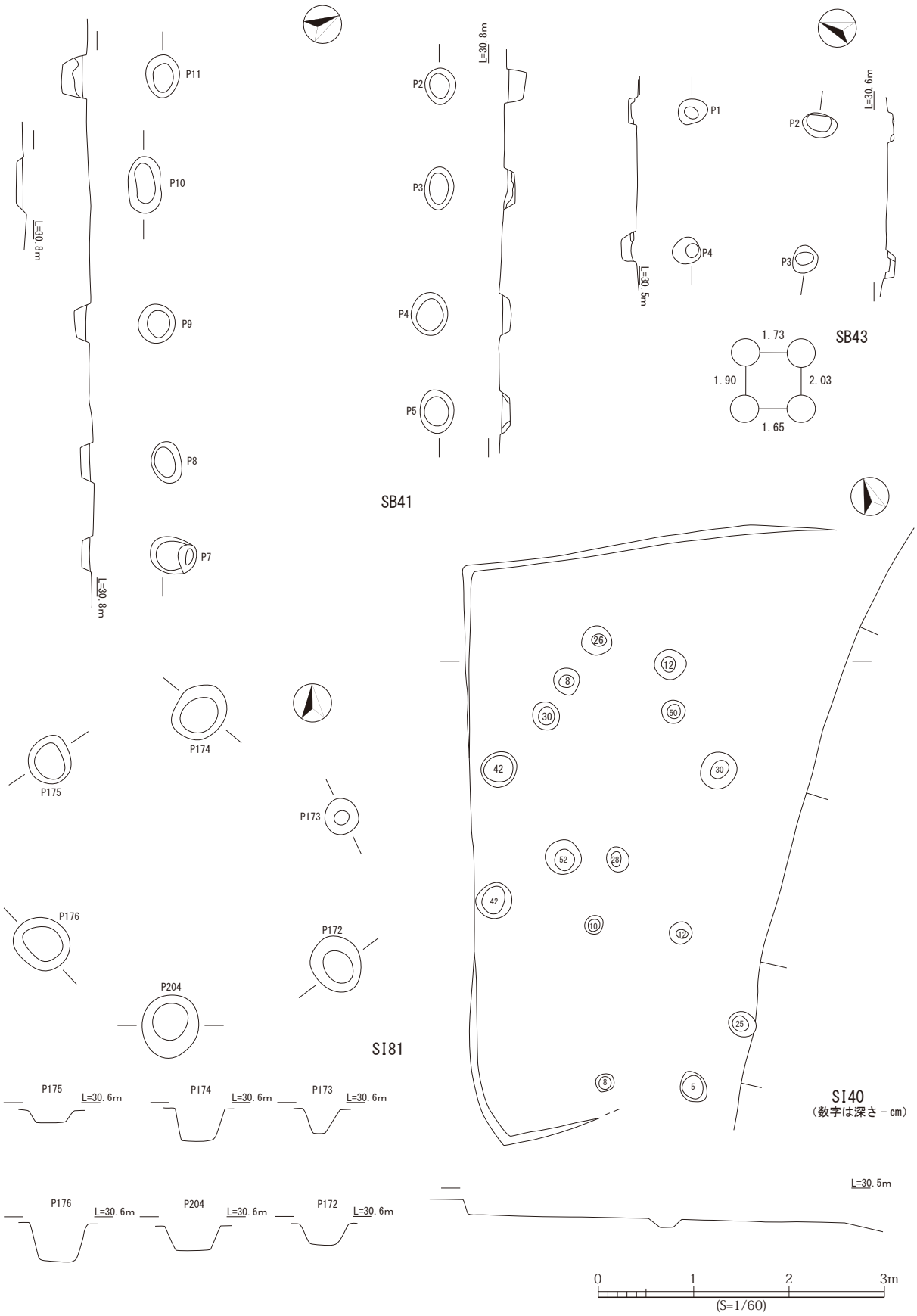
第６図　Ｂ区遺構配置図(1/600)



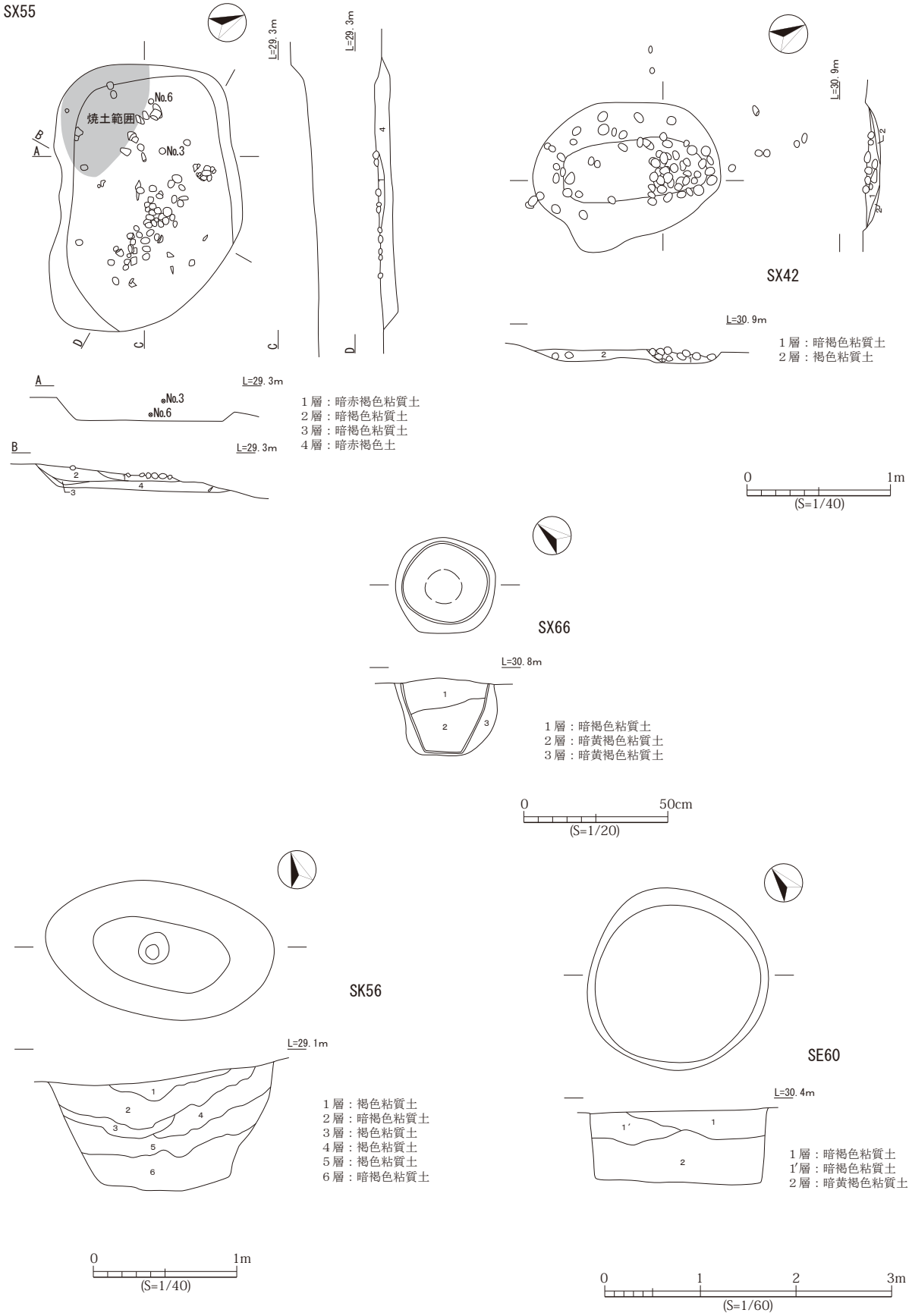
第７図　Ｂ区詳細遺構配置図１(1/400)



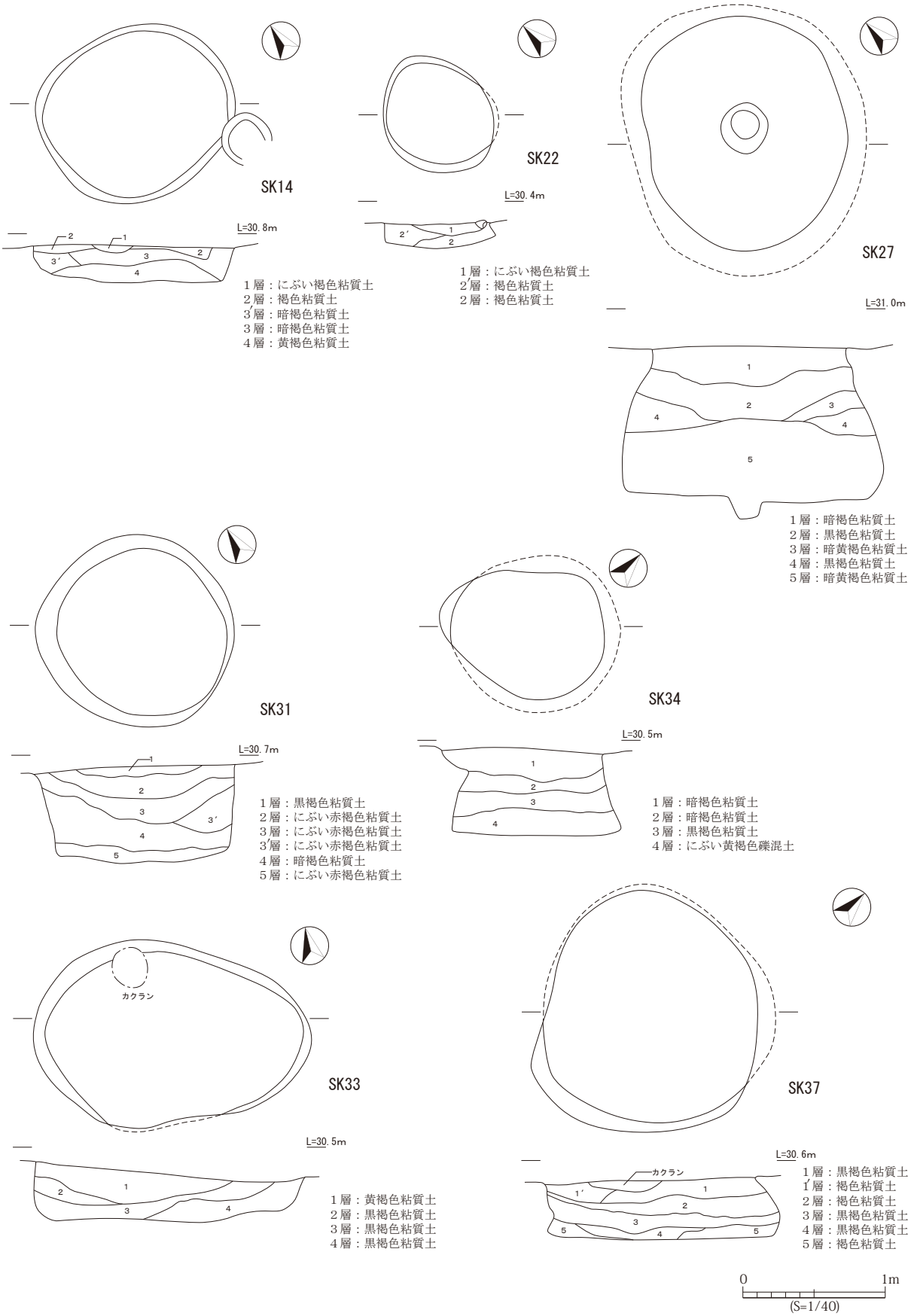
第８図　Ｂ区詳細遺構配置図２(1/400)



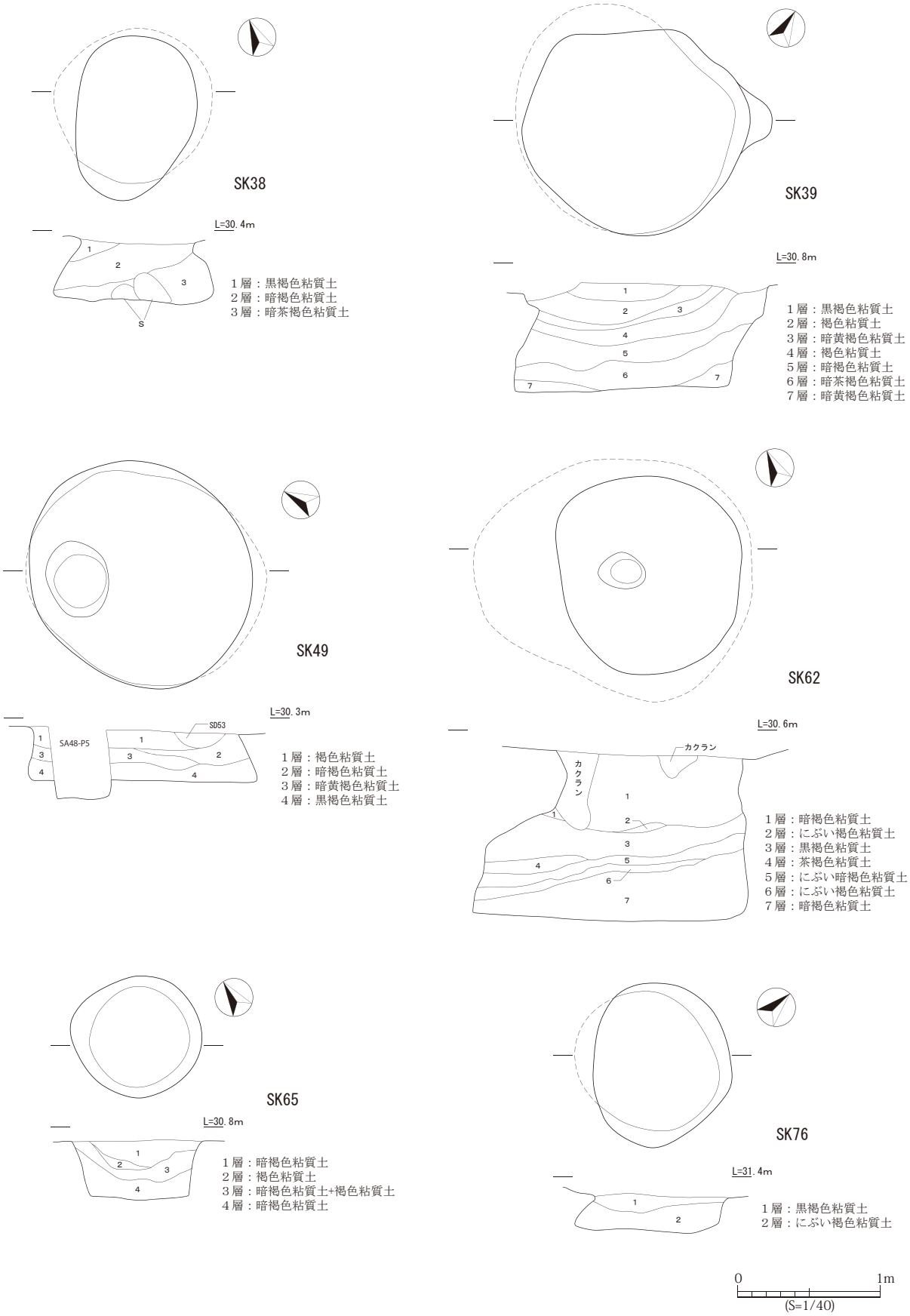
第９図　Ｂ区遺構実測図１



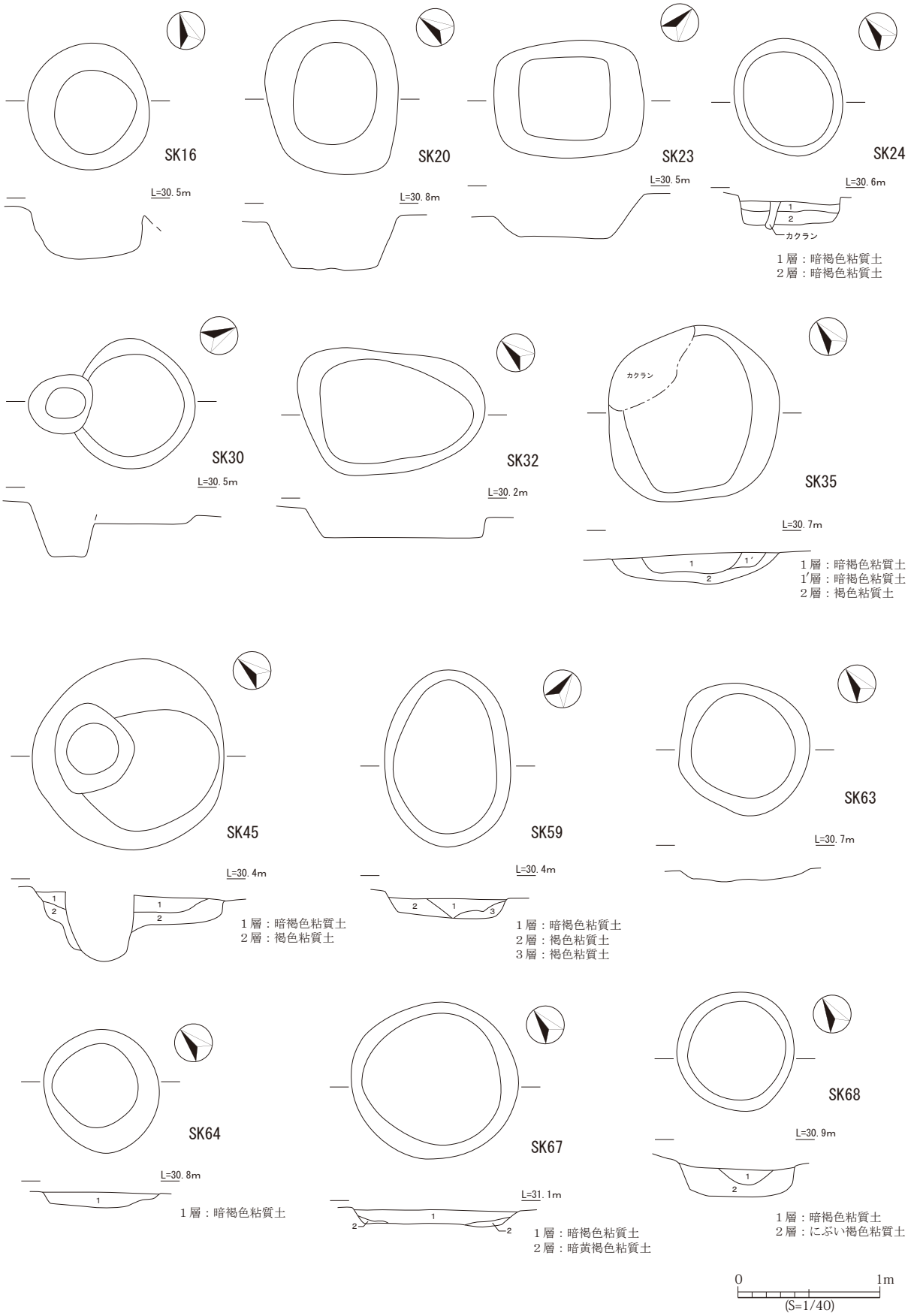
第 10 図　B区遺構実測図２



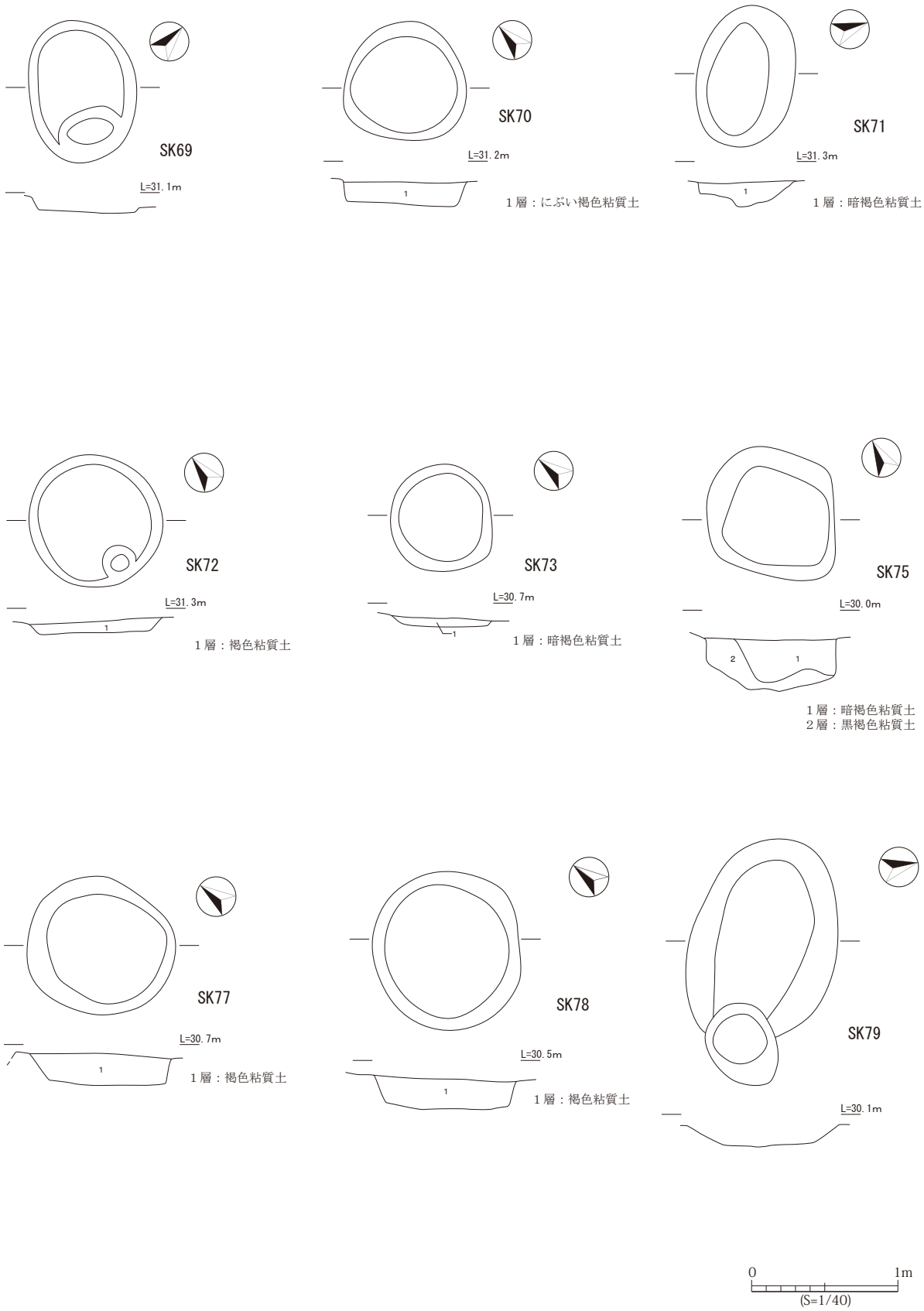
第 11 図　B区遺構実測図３



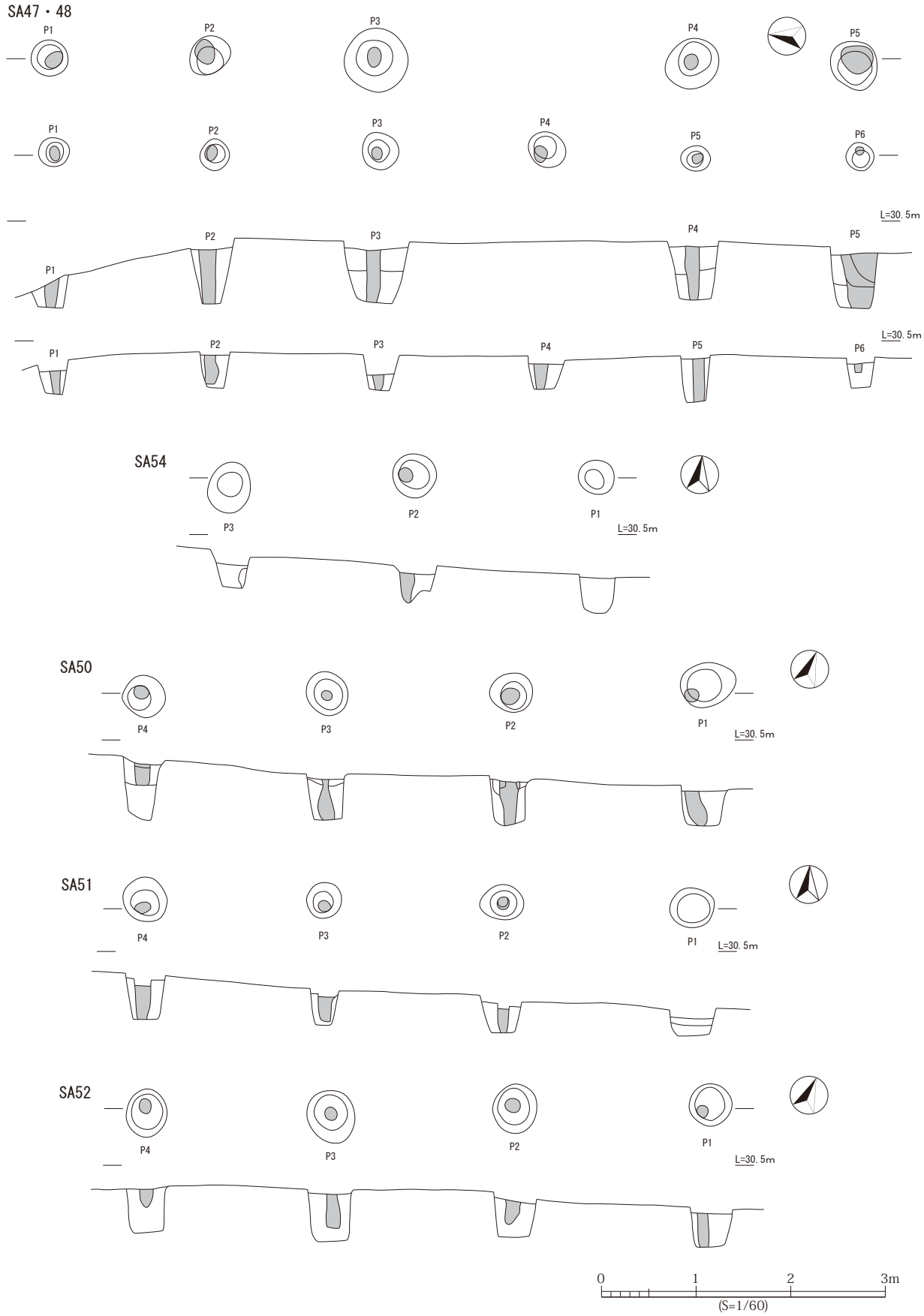
第 12 図　B区遺構実測図４



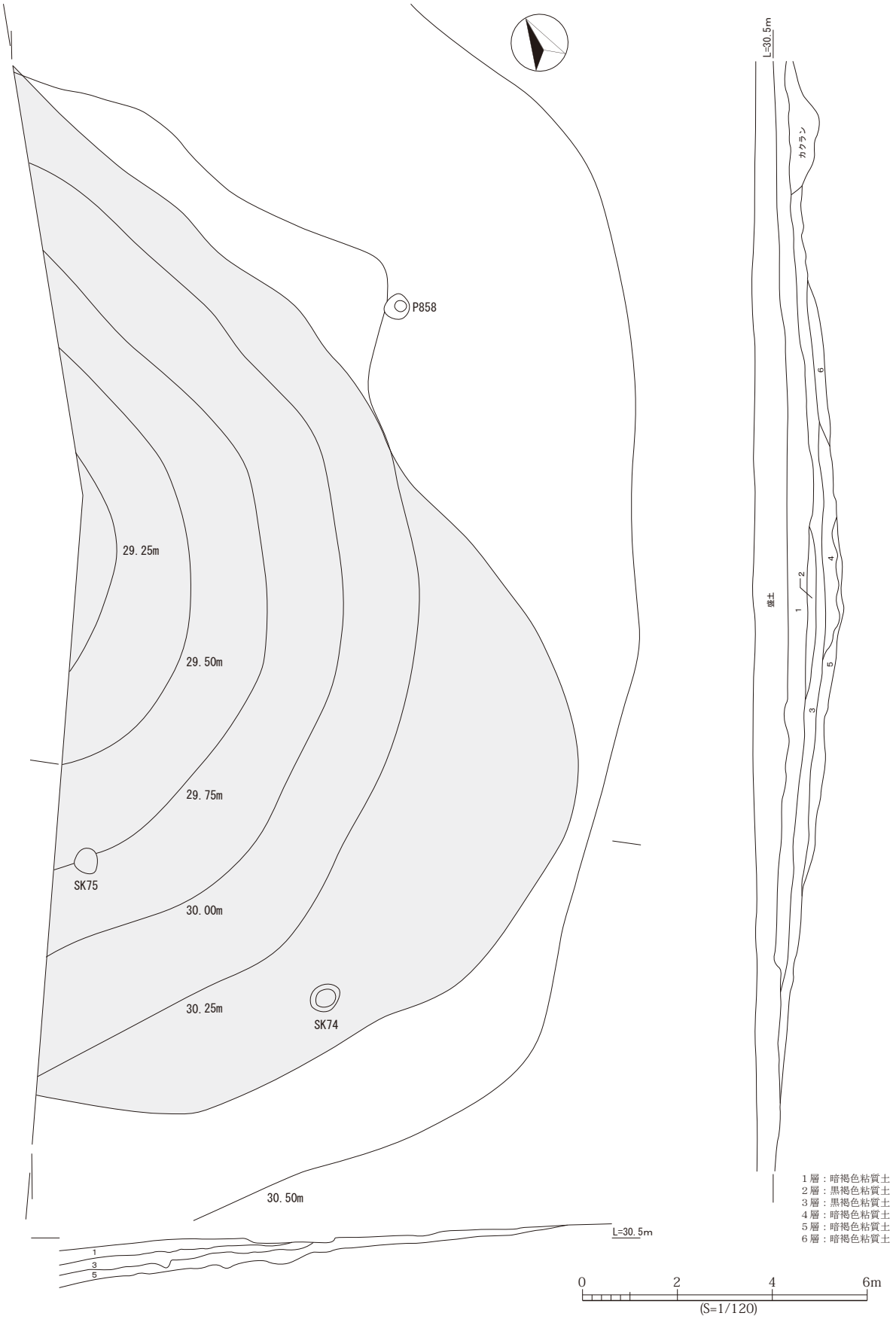
第 13 図　Ｂ区遺構実測図５



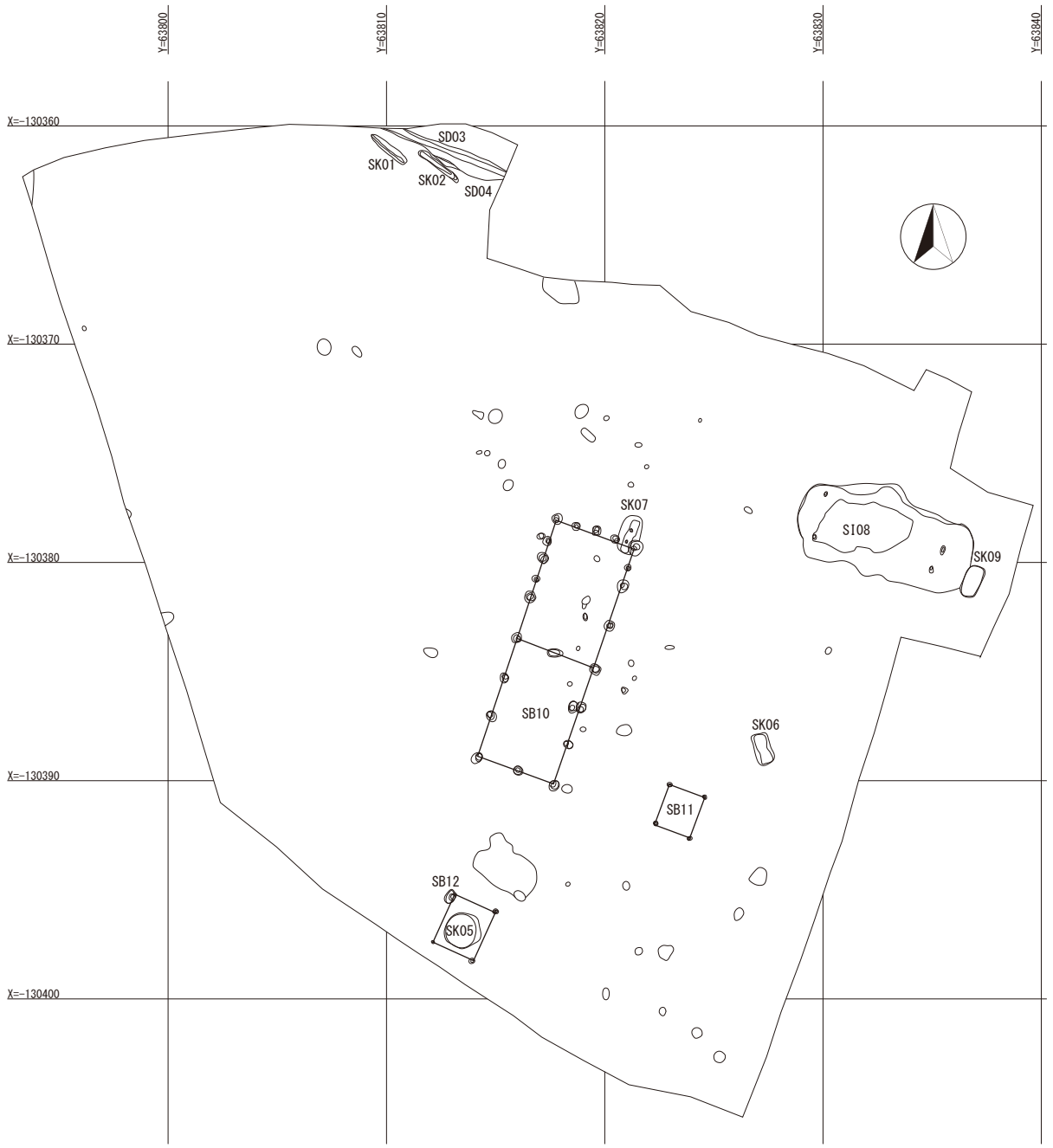
第 14 図　B区遺構実測図６



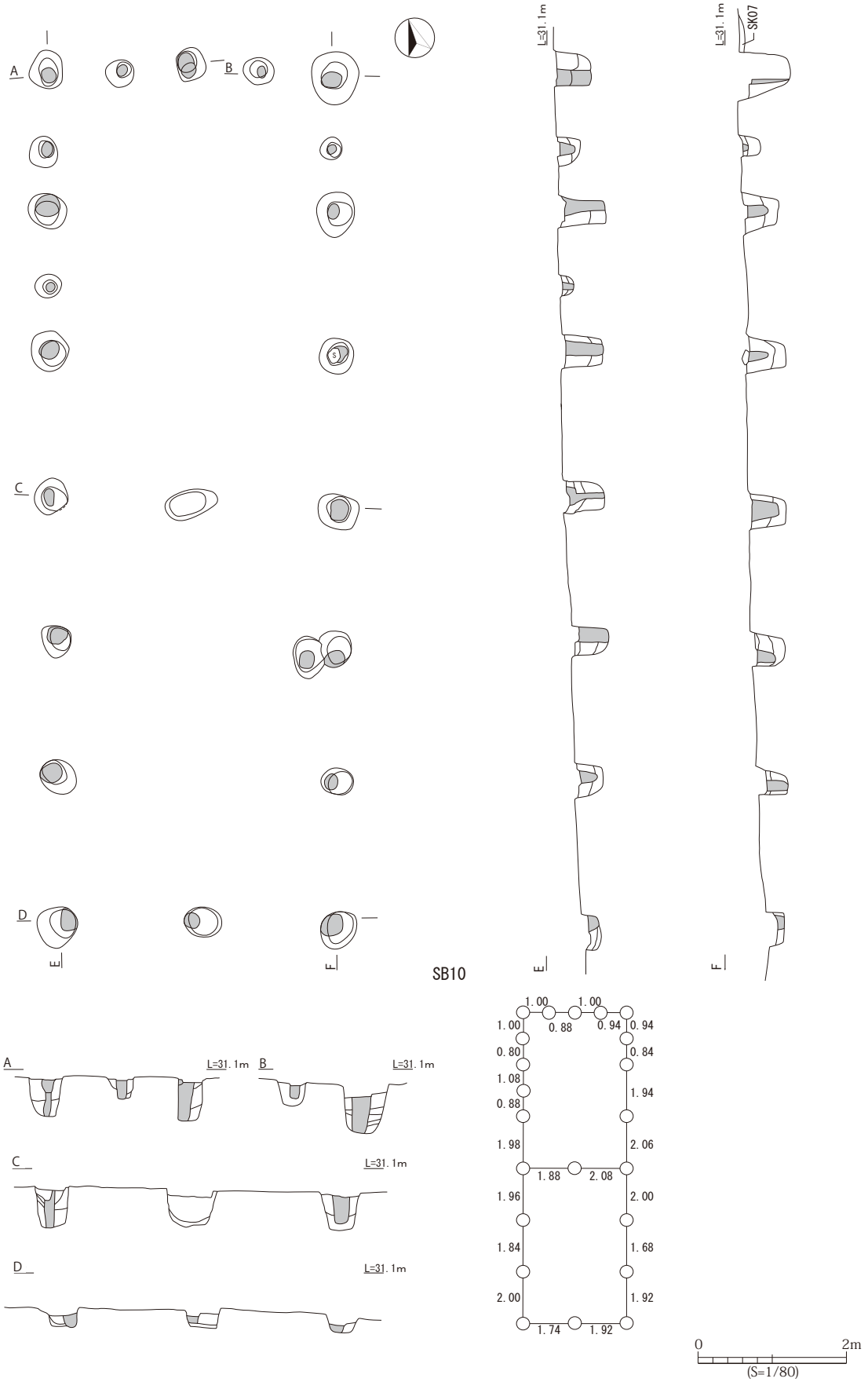
第 15 図　B区遺構実測図 7



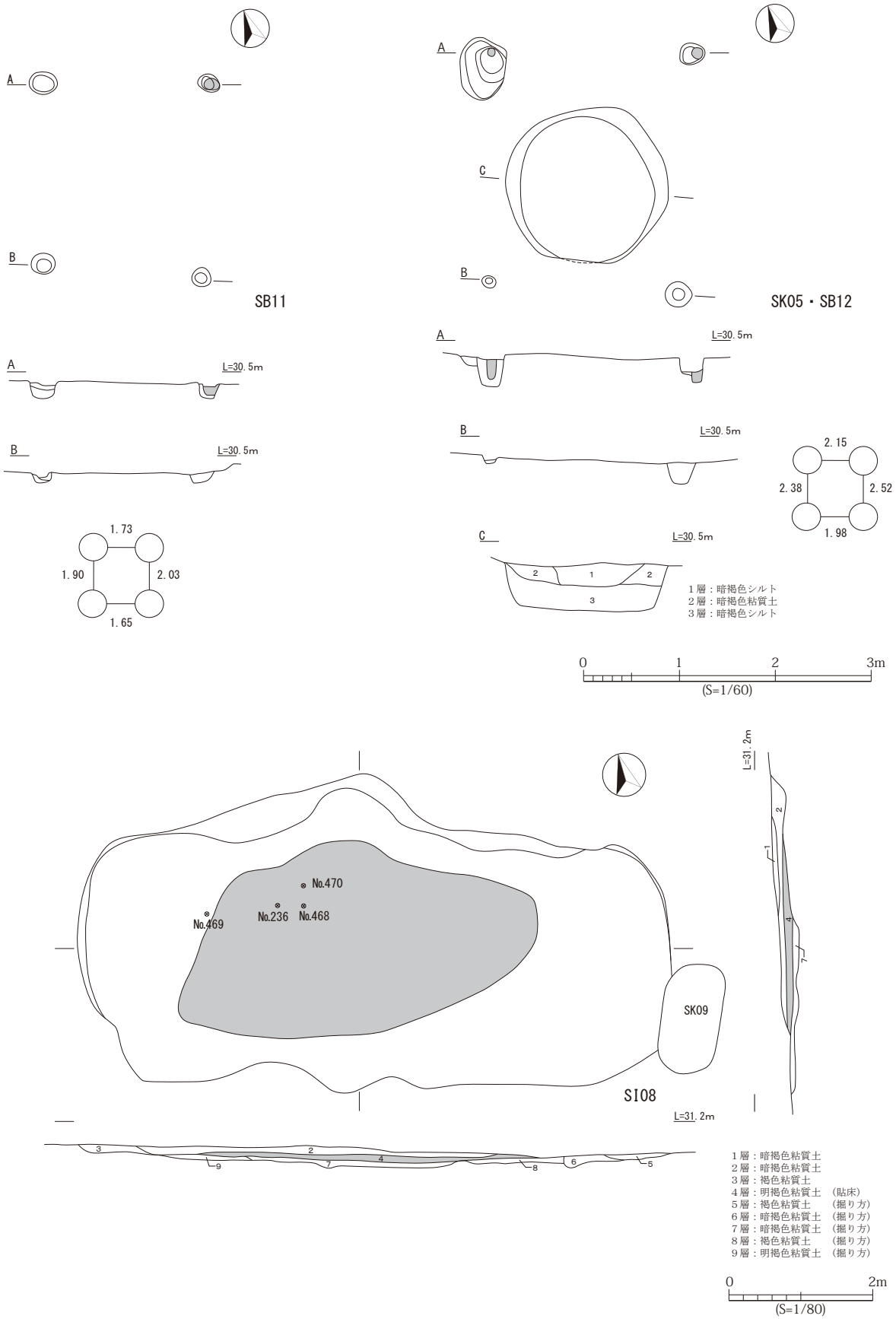
第 16 図　B区遺構実測図８



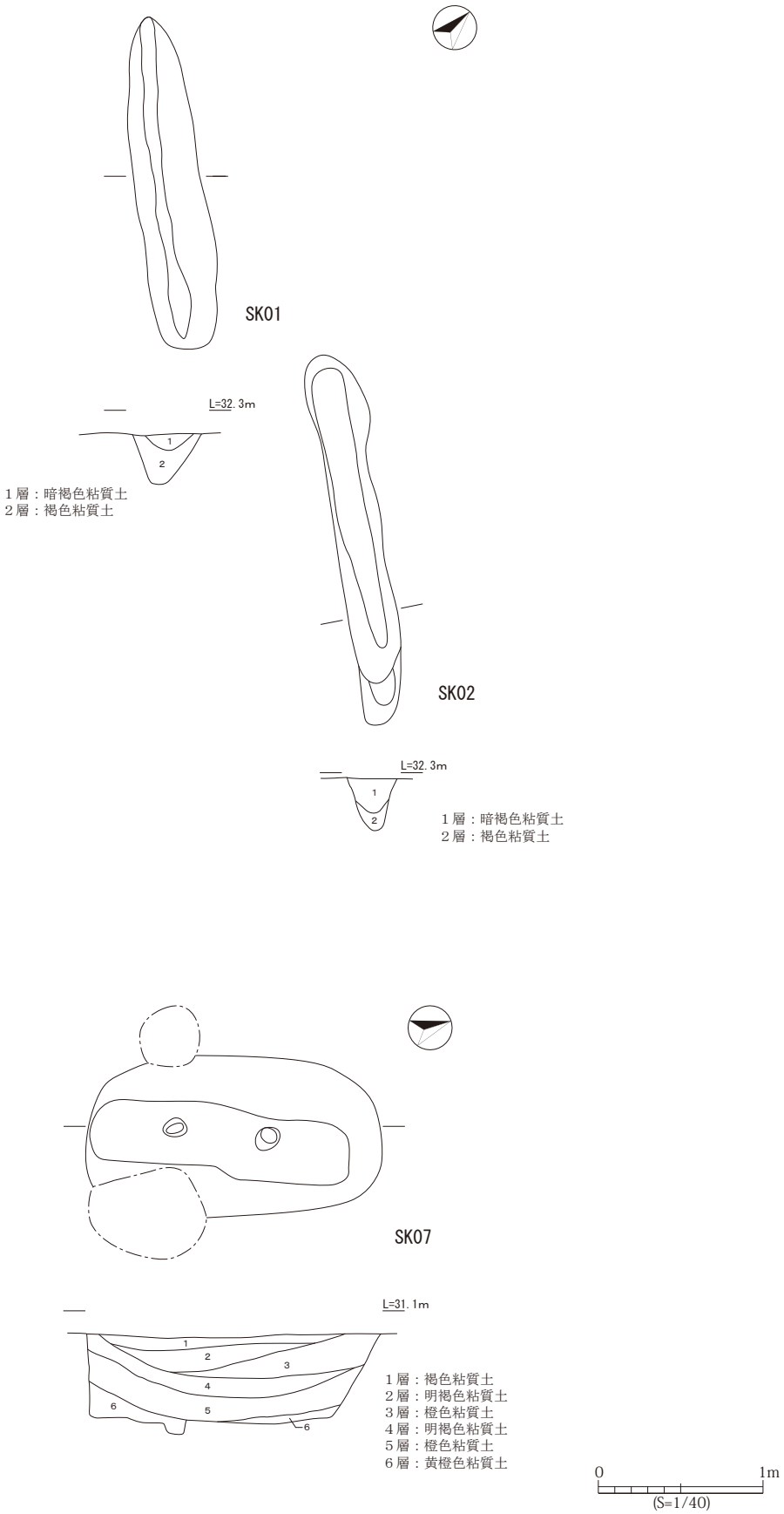
第 17 図　D区詳細遺構配置図(1/300)



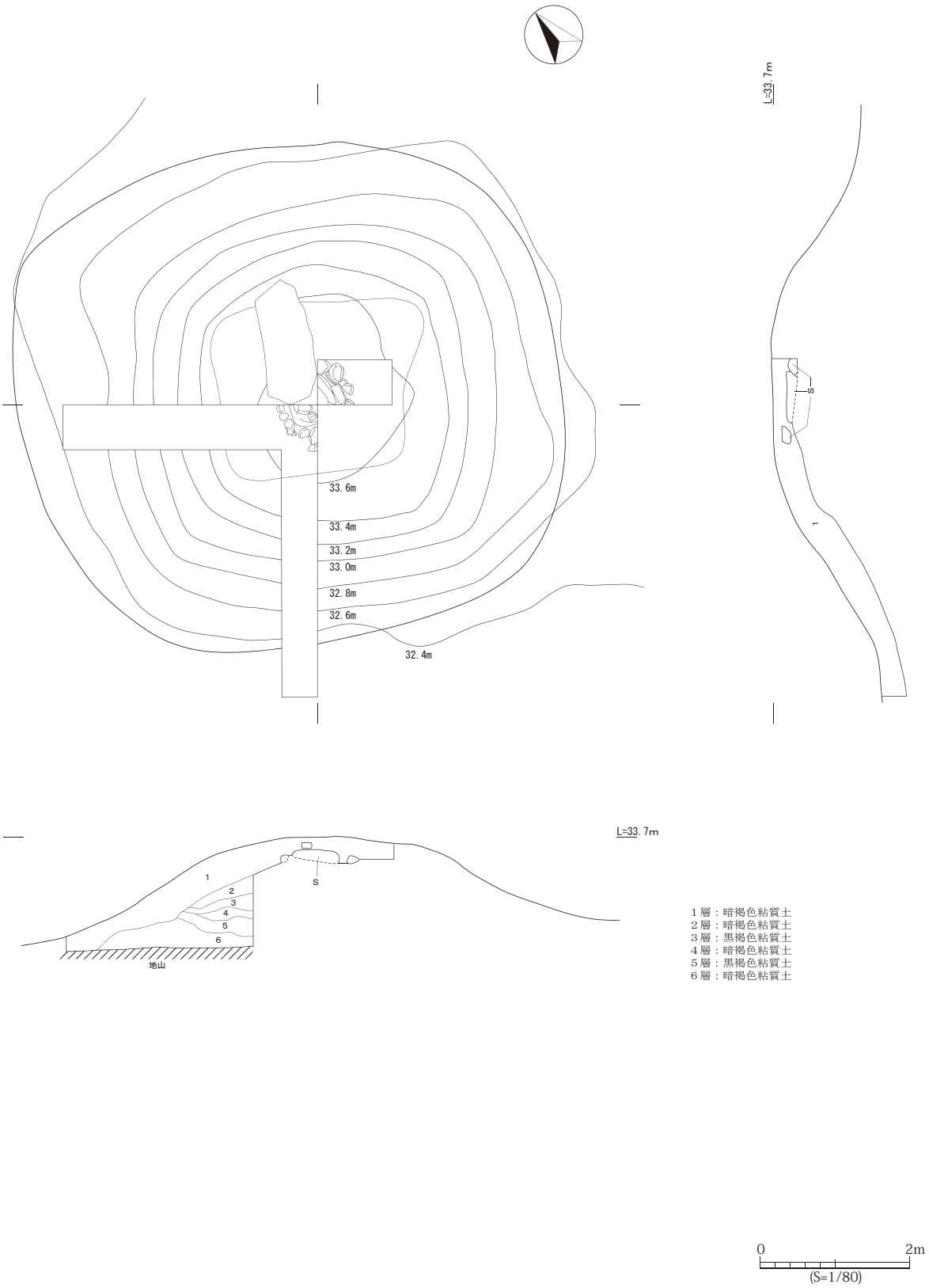
第 18 図　D区遺構実測図 1



第 19 図　D区遺構実測図２



第 20 図　D区遺構実測図３


L=33.7m
33.6m
33.4m
33.2m
33.0m
32.8m
32.6m
32.4m
S
1
L=33.7m
1
2
3
4
5
6
S
地山
1層：暗褐色粘質土
2層：暗褐色粘質土
3層：黒褐色粘質土
4層：暗褐色粘質土
5層：黒褐色粘質土
6層：暗褐色粘質土
0
2m
(S=1/80)

第 21 図　経塚実測図

第１表　遺構観察表

遺構名	地　区	時　代	種　別	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	形　状	遺　物	備　考
SI40	Ｂ区	古代？	竪穴建物跡					縄文１点	１辺 6.1 mの方形か？
SI81	Ｂ区	縄文？	竪穴建物跡？				円形？		ピットの配列から、径４m程度の竪穴か？
SB41	Ｂ区	縄文	掘立柱建物					有	１×４間
SB43	Ｂ区	不明	掘立柱建物						１×１間
SK14	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.4	1.2	0.3	円形	有	
SK16	Ｂ区	近世？	土坑	0.8	0.8	0.3	円形		
SK17	Ｂ区	近世？	土坑	1.3	0.7	0.2	長円形		
SK18	Ｂ区	近世	土坑	1.5	0.9	0.4	長円形	陶磁器	
SK20	Ｂ区	近世	土坑	1.1	0.9	0.4	長円形	陶磁器	
SK21	Ｂ区	縄文	土坑	1.3	1.2	0.1	亜円	黒曜石	
SK22	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	0.9	0.7	0.2	亜円		
SK23	Ｂ区	近世	土坑	1.1	0.8	0.3	長方形	瓦（桟瓦）	
SK24	Ｂ区	縄文	土坑	0.9	0.8	0.2	亜円	有	
SK25	Ｂ区	不明	土坑	1.3	0.7	0.2	長円形		
SK26	Ｂ区	縄文？	土坑	―	0.8	0.5	―	有	柱穴？
SK27	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.7	1.4	1.2	亜円	有	
SK28	Ｂ区	近世？	土坑	0.9	0.9	0.3	長円形		
SK29	Ｂ区	縄文？	土坑	1.4	1.2	0.1	不整円形	有	
SK30	Ｂ区	不明	土坑	0.9	0.9	0.1	円形		
SK31	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.4	1.3	0.7	円形	縄文少量	
SK32	Ｂ区	縄文	土坑	1.3	0.9	0.2	楕円	有	
SK33	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	2.0	1.3	0.4	楕円	有	
SK34	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.2	0.9	0.6	不整円形	有	
SK35	Ｂ区	縄文	土坑	1.2	1.2	0.2	亜円	縄文少量	
SK36	Ｂ区	不明	土坑	2.2	1.7	0.3	卵形		
SK37	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.7	1.5	0.4	不整円形	有	
SK38	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.2	0.8	0.5	卵形（上場）	有	
SK39	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.6	1.4	0.8	亜円	有	
SK43	Ｂ区	不明	掘立柱建物					有	１×１間
SK45	Ｂ区	縄文	土坑	1.3	1.3	0.4	円形	縄文１点	
SK46	Ｂ区	不明	土坑	1.2	0.7	0.2	楕円		
SK49	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.7	1.5	0.4	亜円	有	
SK56	Ｂ区	縄文	落し穴	1.6	0.9	0.9	楕円	-	
SK59	Ｂ区	縄文	土坑	1.3	0.9	0.2	楕円	縄文１点	
SK62	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.4	1.3	1.2	亜円	有	底面は 2.0 × 1.7 m
SK63	Ｂ区	不明	土坑	0.9	0.9	0.1	亜円		
SK64	Ｂ区	不明	土坑	0.9	0.8	0.1	亜円		
SK65	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	0.9	0.9	0.4	円形	有	
SK67	Ｂ区	不明	土坑	1.2	1.1	0.1	亜円		
SK68	Ｂ区	縄文	土坑	0.8	0.8	0.2	円形	有	
SK69	Ｂ区	縄文	土坑	1.0	0.7	0.1	楕円	有	
SK70	Ｂ区	不明	土坑	0.8	0.8	0.2	亜円		
SK71	Ｂ区	不明	土坑	1.0	0.7	0.2	楕円		
SK72	Ｂ区	不明	土坑	0.9	0.9	0.1	円形		
SK73	Ｂ区	縄文	土坑	0.8	0.7	0.1	亜円	有	
SK74	Ｂ区	縄文	土坑	0.7	0.6	0.4	亜円	有	
SK75	Ｂ区	縄文	土坑	0.9	0.9	0.3	略方形	有	
SK76	Ｂ区	縄文	貯蔵穴	1.2	1.0	0.3	亜円	有	
SK77	Ｂ区	縄文？	土坑	1.0	0.9	0.2	亜円		
SK78	Ｂ区	縄文	土坑	1.1	1.0	0.2	亜円		
SK79	Ｂ区	縄文	土坑	1.5	1.0	0.1	楕円	有	
SK80	Ｂ区	縄文	土坑	1.6	(1.3)	0.1	長円形	有	
SE60	Ｂ区	近世	井戸	1.9	1.9	0.8	円形	有	溜め井戸か？
SD15	Ｂ区	近世	溝	10.4	1.0	0.1			
SD53	Ｂ区	不明	溝	8.6	0.6	0.1		土器は混入？	
SA47	Ｂ区	近世	柵列					有	南北 8.6 m
SA48	Ｂ区	近世	柵列					縄文	南北 8.6 m
SA50	Ｂ区	近世	柵列						東西 6.0 m
SA51	Ｂ区	近世	柵列					縄文	東西 5.8 m
SA52	Ｂ区	近世	柵列					縄文	東西 6.0 m
SA54	Ｂ区	近世	柵列					渡来銭１点	東西 3.9 m
SX13	Ｂ区	縄文	包含層	(19.0)	(17.0)	(1.9)		古代の土器有	
SX42	Ｂ区	縄文	集石	1.2	1.0	0.1	長円形	有	
SX55	Ｂ区	縄文	竪穴状遺構	2.7	1.9	0.3	長方形	有	上層に集石あり。早期末
SX63	Ｂ区	縄文？	土坑？	1.0	1.0	0.1	亜円		
SX64	Ｂ区	古代？	土坑？	0.9	0.8	0.1	亜円	有	
SX66	Ｂ区	縄文	埋設土器	0.4	0.3	0.3	亜円	土器１点	
SK01	Ｄ区	縄文	Ｔピット	2.0	0.3	0.3	長楕円		
SK02	Ｄ区	縄文	Ｔピット	2.3	0.3	0.3	長楕円		
SD03	Ｄ区	近世？	溝	(5.5)	1.0	0.2		縄文１点	
SK05	Ｄ区	近世？	井戸？	1.7	1.6	0.5	亜円		溜め井戸か？
SK07	Ｄ区	縄文	落し穴	1.8	1.0	0.5	隅丸長方		深さ 0.1 mのピット２個あり
SI08	Ｄ区	近世	竪穴状遺構	8.2	4.4	0.3	長方形		
SB10	Ｄ区	近世	掘立柱建物跡						２×６間
SB11	Ｄ区	近世	掘立柱建物跡						１×１間
SB12	Ｄ区	近世	掘立柱建物跡						１×１間　SK ５に伴うものか？
経塚	Ｂ区	近世		7.3	6.5		長方形	古銭	高さ 1.45 m

２．遺物

（１）縄文土器（1 ～ 233、写真図版 12 ～ 21）

嚮館跡から出土した縄文土器（約 151 kg）のうち、233 点を図化し報告する。出土した縄文土器の大多数は SX13 包含層からの出土である。本報告では、土器の特徴を基に 11 分類し、遺構と SX13 包含層に分け、それらの特徴について述べる。なお、個別土器の特徴については第２表を併せて参照してもらいたい。

１類　土器の器面両面に地文を持つ一群
２類　土器胎土に繊維を含む土器の一群
３類　隆帯による区画と、区画する隆帯に沿う刺突を有する一群
４類　隆帯による区画や文様を意匠する一群
５類　隆帯と沈線、または沈線で区画や文様を意匠する一群
６類　平行する数条の沈線で文様を意匠する一群
７類　幅の狭い沈線で縦または横に区画し、沈線間に磨消縄文・充填文を施す一群
８類　幅広の無文帯と胴部に地文を持つ一群
９類　平行する数条の沈線とそれを区画する沈線を持つ一群
10類　胴部に刺突文を多用する一群
11類　地文のみの一群

遺構・遺構保存地区（１～ 24、写真図版 12・13）

遺構より出土した縄文土器のうち、24 点を図化し報告する。遺構から出土した土器はこのほかにもある（約 28 kg）が、小破片あるいは摩耗が著しいため、図化し報告することが困難であった。

１～６は SX55 小竪穴・集石出土の土器である。１は胴部破片で、器面の表裏ともに地文を施文する。２～６は土器胎土に繊維を含む土器である。口縁部に刻みを持つ。２は補修孔と考えられる穿孔がある。

７～９は SK14 土坑出土の土器である。７は幅の狭い沈線で区画し、磨消縄文を施す。８は頸部に無文帯を持つ。９は粗製土器の底部で、木葉痕や網代の圧痕は確認できない。

10 は SK24 土坑出土の土器である。地文端部に縄を押圧する。

11・12 は SK37 土坑出土の土器である。地文と沈線文を施す。

13 ～ 16 は SK38 土坑出土の土器である。13・14 は沈線文を施す。15 は磨消縄文である。16 は地文のみである。

17 ～ 19 は SK69 土坑出土の土器である。17 は沈線を施す。18・19 は羽状縄文である。

20・21 は SK78 土坑出土の土器である。平行する数条の沈線文とそれを区画する沈線文を施す。遺構から出土した９類の土器は SK78 土坑からのもののみである。

23 は SX66 土坑から出土した土器である。網目状の撚糸文が施文される。埋設土器と考えられる。

24 は遺構保存地区で出土した土器である。沈線による区画や文様が描かれる。口縁部と胴部に接点はないが、土器の特徴が共通するため、同一個体と考える。

SX13 包含層上層（25 ～ 128、写真図版 14 ～ 17）

上層から出土した土器（約 69 kg）のうち、104 点を図化し報告する。出土した土器の量は上層が最も多いが、ほとんどの土器が破片資料であり、器形を復元できたものは少ない。

25 ～ 28 は土器の器面両面に地文を持つ土器（１類）である。口縁部には、刻みを持つもの（25 ～ 27）がある。また、25 に穿孔があり、補修孔とみられる。

29 ～ 34 は土器胎土に繊維を含む土器（２類）である。口縁部には刻みを持つもの（29・30）がある。また、口縁部直下や頸部近くに縄の押圧を持つもの（29・31）もみられる。

35・36 は隆帯による区画と、区画する隆帯に沿う刺突を有する土器（３類）である。刺突は隆帯の上面から刺突される。３類の土器は上層で確認されたもののみである。

37 ～ 45 は隆帯による区画や文様を意匠する土器（４類）である。４類に分類した土器には区画する隆帯に２個１対の刻みを施すもの（39・40）や、隆帯へ連続する刺突を施すもの（37・44）が特徴的にみられる。また、隆帯の結節点に円形の刺突を施すもの（37･39･40）もある。隆帯には、隆帯に沿う沈線を持つもの（37・38・41）もみられる。器形を復元できたものは少ないが、胴部中程に最大径を持ち、屈曲し口縁部に向かい外反するもの（44）と口縁直下の隆帯部分に最大径があるもの（45）がある。

46・47 は沈線で区画や模様を意匠する土器（５類）である。

48 ～ 80 は平行する数条の沈線で文様を意匠する土器（６類）である。沈線文様は口縁部や胴部上半に半円（49・50・52・53・63）や円（56 ～ 58）、渦巻模様（51・80）などを描くものが多くみられる。また胴部には半円や円、渦巻模様を起点に縦位方向の平行する数条の沈線を描くものが多くある。口縁部は平口縁と緩やかな波状口縁の両者がみられるほか、48 のような４単位の突起を持つものもある。

81 ～ 87 は沈線で縦または横に区画し、沈線間に磨消縄文を施す土器（７類）である。沈線による区画は直線的なもの（81 ～ 84・87）のほか、楕円による区画（85・86）もみられる。区画沈線の転換点と転換点の間に刺突がなされるもの（81・82・84・87）がある。７類には深鉢や鉢のほかに蓋や壺がみられる。

88 ～ 99 は幅広の無文帯と胴部に地文を持つ土器（８類）である。８類の土器は口縁部下に無文帯を持ち、縄文や撚糸文などの地文を持つほか、無文帯や口縁部直下に縄の押圧や沈線による区画がなされるもの（88・89・91・94）がみられる。92 は地文部分がないが、無文部分の下に地文部があることを想定し、８類として分類した。

100 は平行する数条の沈線とそれを区画する沈線を持つ土器（９類）である。

101 は胴部に刺突を多用する土器（10 類）である。破片資料であり、全体を把握することができないが、円形の刺突を胴部全面に施すものとみられる。

102 ～ 118 は地文のみの土器（11 類）である。多くは単節または無節の縄文による施文であるが、絡条体（116）や合撚の縄（104）など多様な原体が使用されている。また、地文を施した土器の器面に別の縄の圧痕を施すもの（102）もみられる。11 類には深鉢や鉢のほかに、橋状の把手を持つ蓋（117・118）がある。

119 ～ 128 は上記分類に含まれない土器である。119 は地紋のみの小形壺である。また、頸部は

磨きにより調整される。120・121 はミニチュア土器である。120 は底部に木葉痕を残す。122 は小形の深鉢である。地文と沈線を施文する。123 ～ 128 は深鉢の底部である。123･126･127 は木葉痕、124・125・128 は網代圧痕を残す。

SX13 包含層中層（129 ～ 212、写真図版 18 ～ 21）

SX13 包含層中層から出土した土器（約 51 kg）のうち、84 点を図化し報告する。SX13 包含層中層から出土した土器は上層出土土器に比べやや出土量が少ないが、接合により器形や文様を確認できる個体はより多い。

129 は土器の器面両面に地文を持つ土器（１類）である。口縁部に刻みを持つ。中層出土土器で１類に分類できた土器は、この１点のみであった。

130 ～ 140 は土器の胎土に繊維を含む土器（２類）である。単節縄文の地文を主体とするほか、縄の押圧（132）や羽状縄文（136 ～ 138）もみられる。

141 ～ 151 は隆帯による区画や文様を意匠する土器（４類）である。３類に分類した土器には特徴的な隆帯に伴う２個１対の刻み（144 ～ 146）や隆帯に沿う沈線（141 ～ 143･149･150）のほか、橋状の把手（141）や鍔状の突起を持つもの（143・144）がある。

152 ～ 158 は隆帯や沈線、または沈線で区画や文様を意匠する土器（５類）である。153 や 154 は隆帯と沈線で区画を施す。また、152 は沈線による区画とともに、屈曲する部分に隆帯を貼付け２個１対の刻みを施す。155 ～ 158 は沈線による区画をするほか、155 のように鍔状の突起を持つものもある。

159 ～ 170 は平行する数条の沈線で文様を意匠する土器（６類）である。文様は口縁部直下や胴部上半に半円（159 ～ 161）や渦巻模様（162・165・166）を施すほか、胴部には縦位方向の沈線文を施す。

171 ～ 178 は幅の狭い沈線で縦または横に区画し、沈線間に磨消縄文･充填文を施す土器（７類）である。174 のように沈線間にある区画線転換点に刺突を施すものがある。口縁部は波状口縁が多くみられ（171 ～ 175・177）、器形は胴部上半から頸部に向けすぼまり、頸部から口縁部に向かい外反するもの（172・177）がみられる。胴部沈線文より下は地紋のみ（177・178）である。

179 ～ 184 は幅広の無文帯と胴部に地文を持つ土器（８類）である。地文には縄文や撚糸文がみられる。また、地文と無文帯の境界や口縁部直下に縄の押圧をするもの（180 ～ 182）がみられる。口縁部は平口縁と波状口縁の両者がある。

185 ～ 203 は地文のみを持つ土器（11 類）である。地文の主体は単節縄文であるが、そのほかに撚糸文などがみられる。器形は全体が分かるものは少ないが、底部から口縁部に向かい緩やかに立ち上がり、口縁部直下でやや内反する。

204 ～ 212 は上記分類以外の土器である。204 は壺の頸部とみられる破片資料で、内面に２条の沈線文を持つ。205 はミニチュア土器である。文様はみられない。206 ～ 212 は深鉢の底部である。206 ～ 208 は木葉痕､209 ～ 211 は網代圧痕を残す。212 は不明瞭であるが､何らかの圧痕を撫でて、調整する。

SX13 包含層下層（213 ～ 233、写真図版 21）

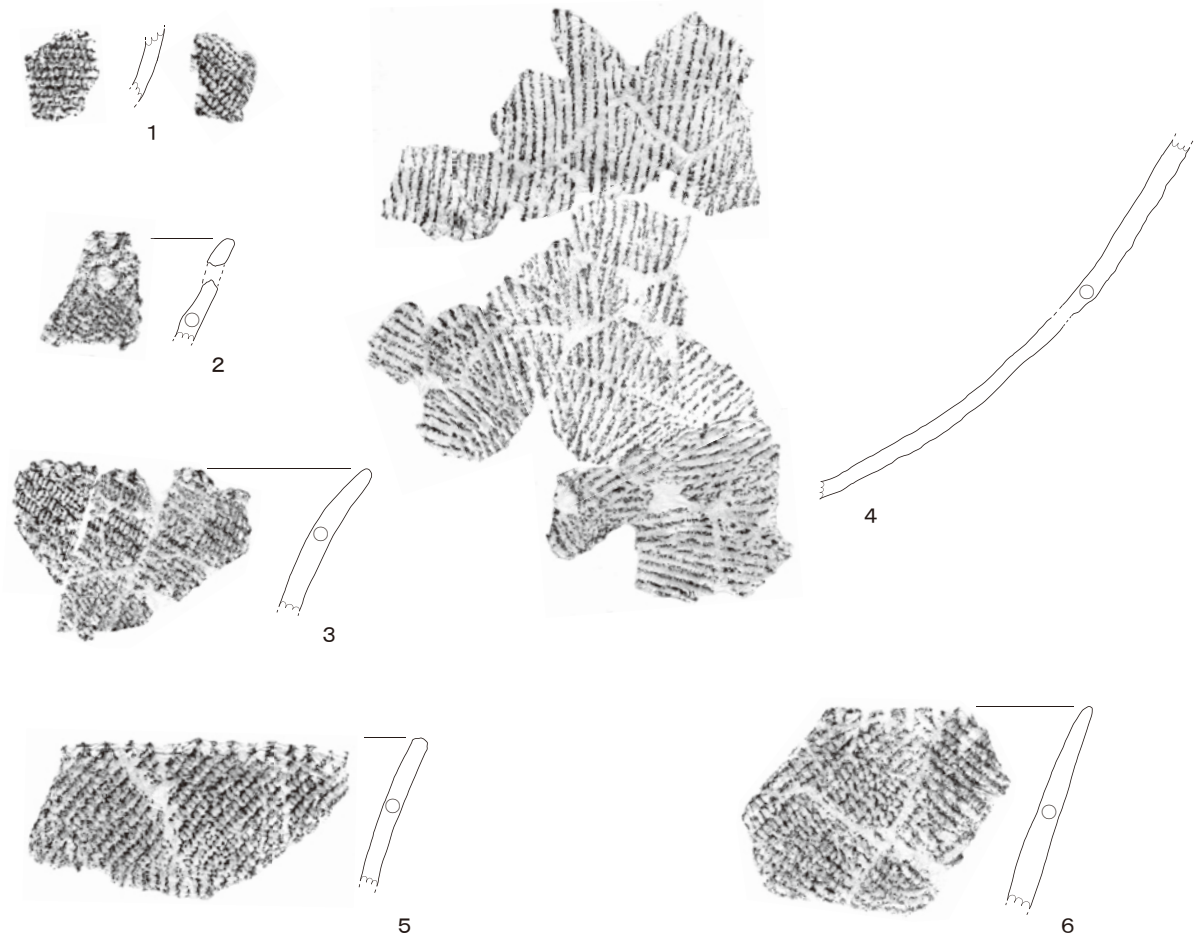
213 ～ 223 は胎土に繊維を含む土器（２類）である。文様は縄文のほか、羽状縄文（217・220・221）がある。また縄の押圧を施すもの（216）がみられる。口縁部には刻みを施すもの（213）がある。

224 ～ 226 は、隆帯で区画や文様を意匠する土器（４類）である。224・225 は口縁部または口縁近くの破片資料で、地文と横位の隆帯を施す。226 は胴部～底部にかけての破片で、地文は見られず、縦位方向の隆帯による区画をする。

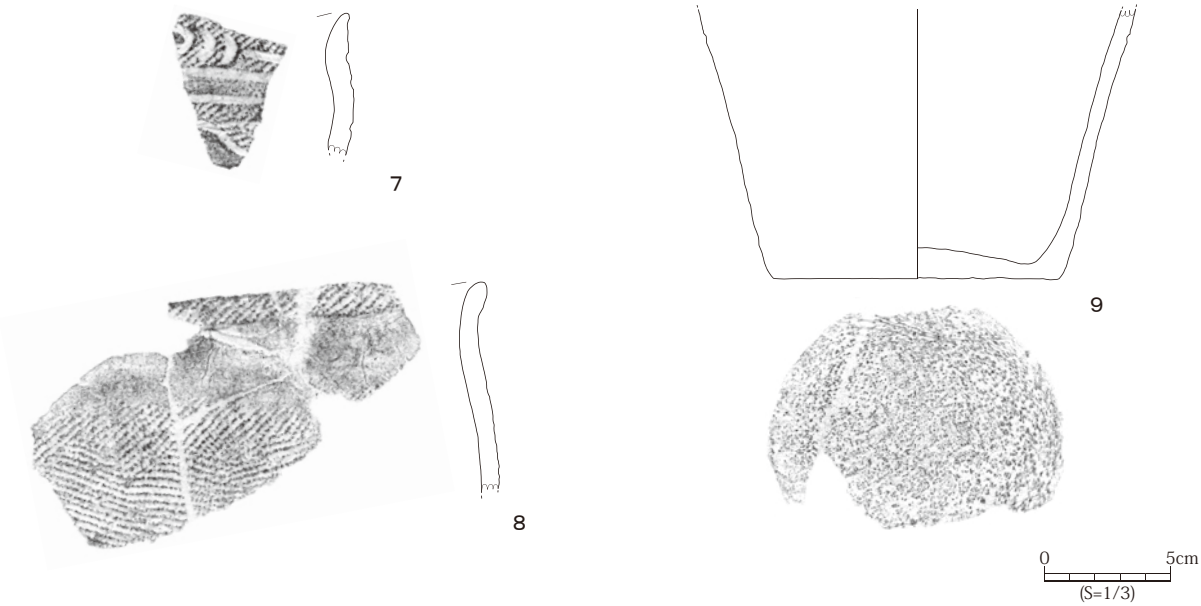
227 ～ 230 は地文のみの土器（11 類）である。単節や無節の縄がみられる。

231 ～ 233 は上記分類以外の土器である。231 は口縁部破片で、口縁直下に刺突上の刻みを持つ。また、沈線による鋸歯状の文様が描かれる。232・233 は底部破片である。232 は網代圧痕を残す。233 は木葉痕を残す。

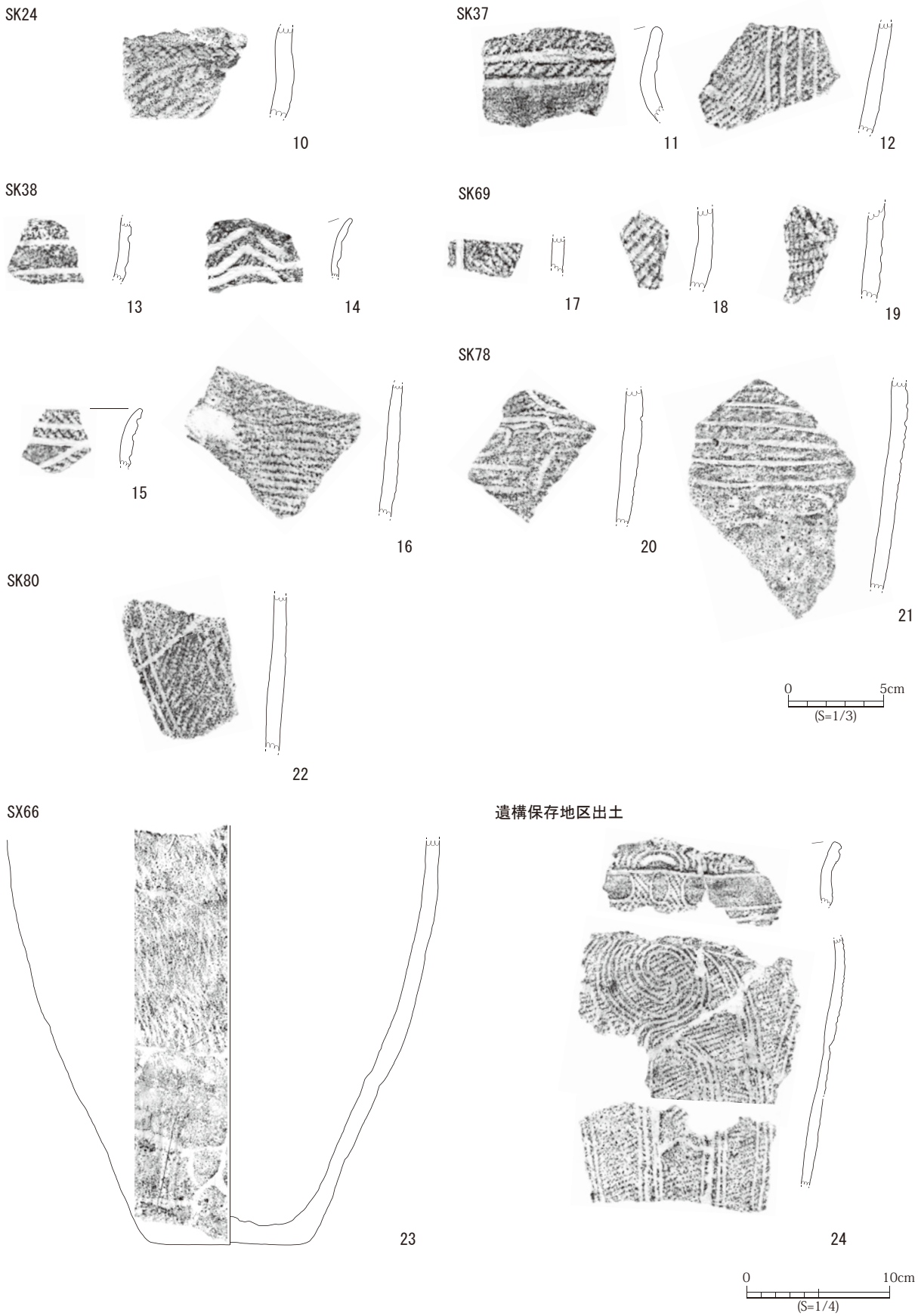
SX55



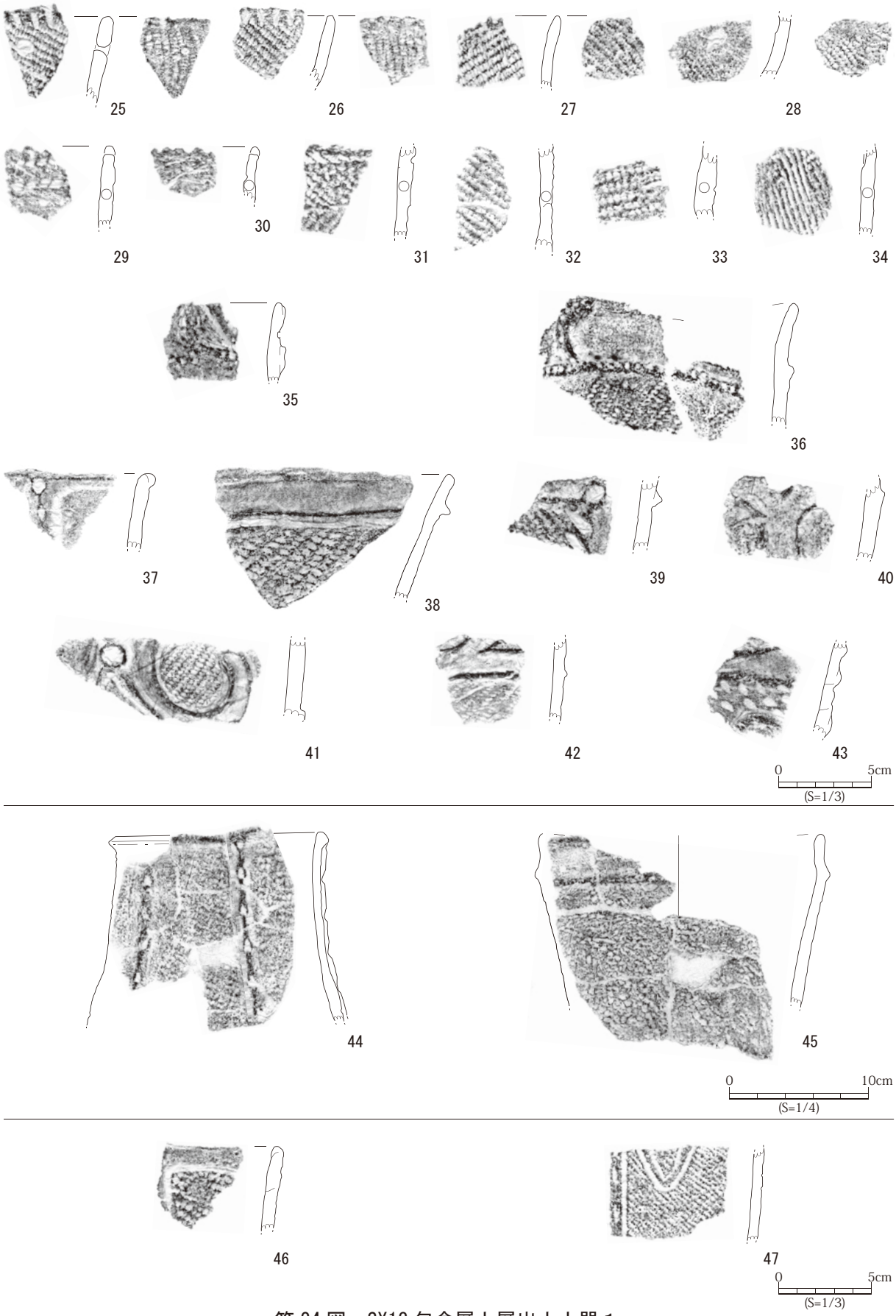
SK14



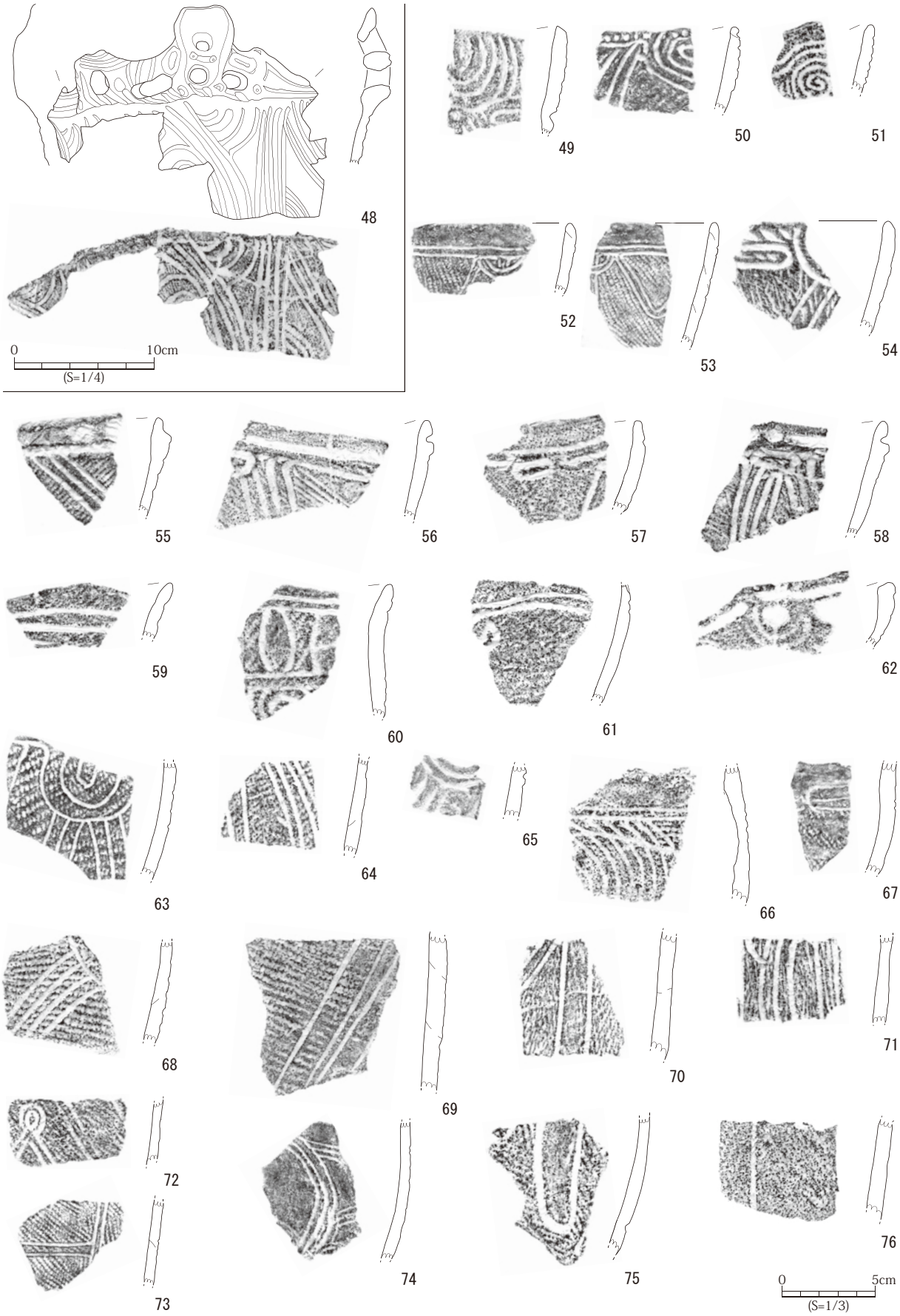
第 22 図　遺構出土土器 1



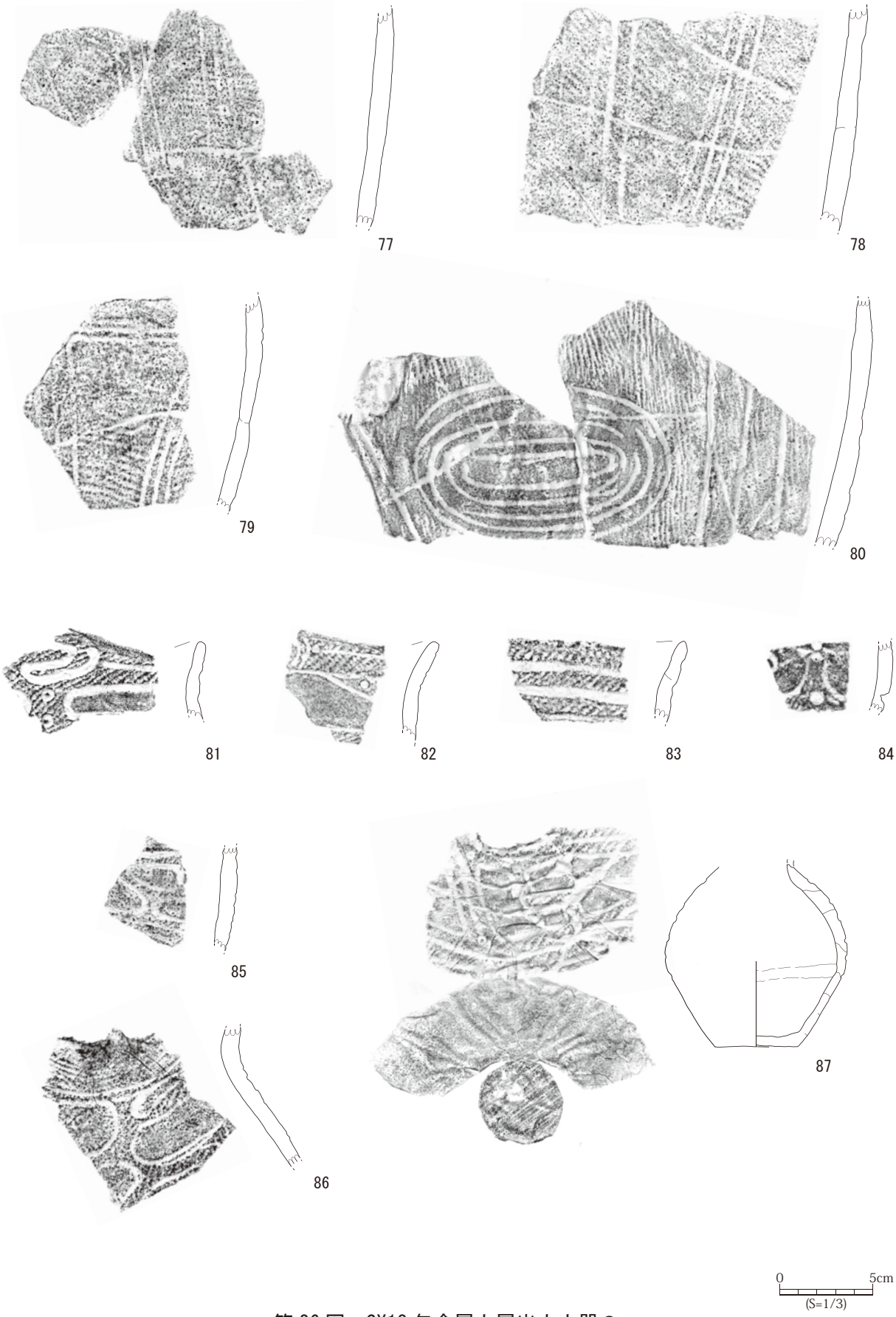
第 23 図　遺構出土土器２・遺構保存地出土土器



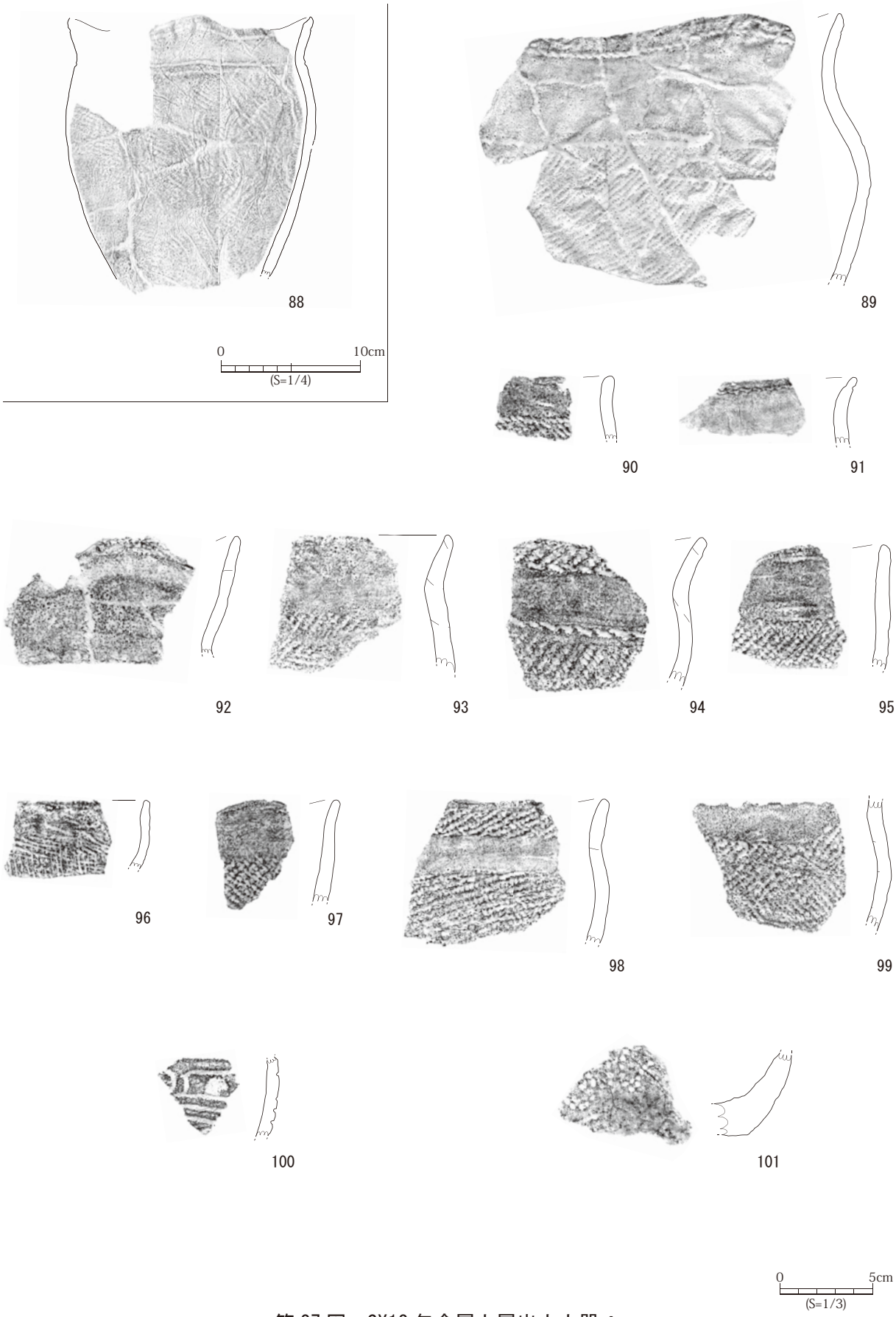
第 24 図　SX13 包含層上層出土土器 1



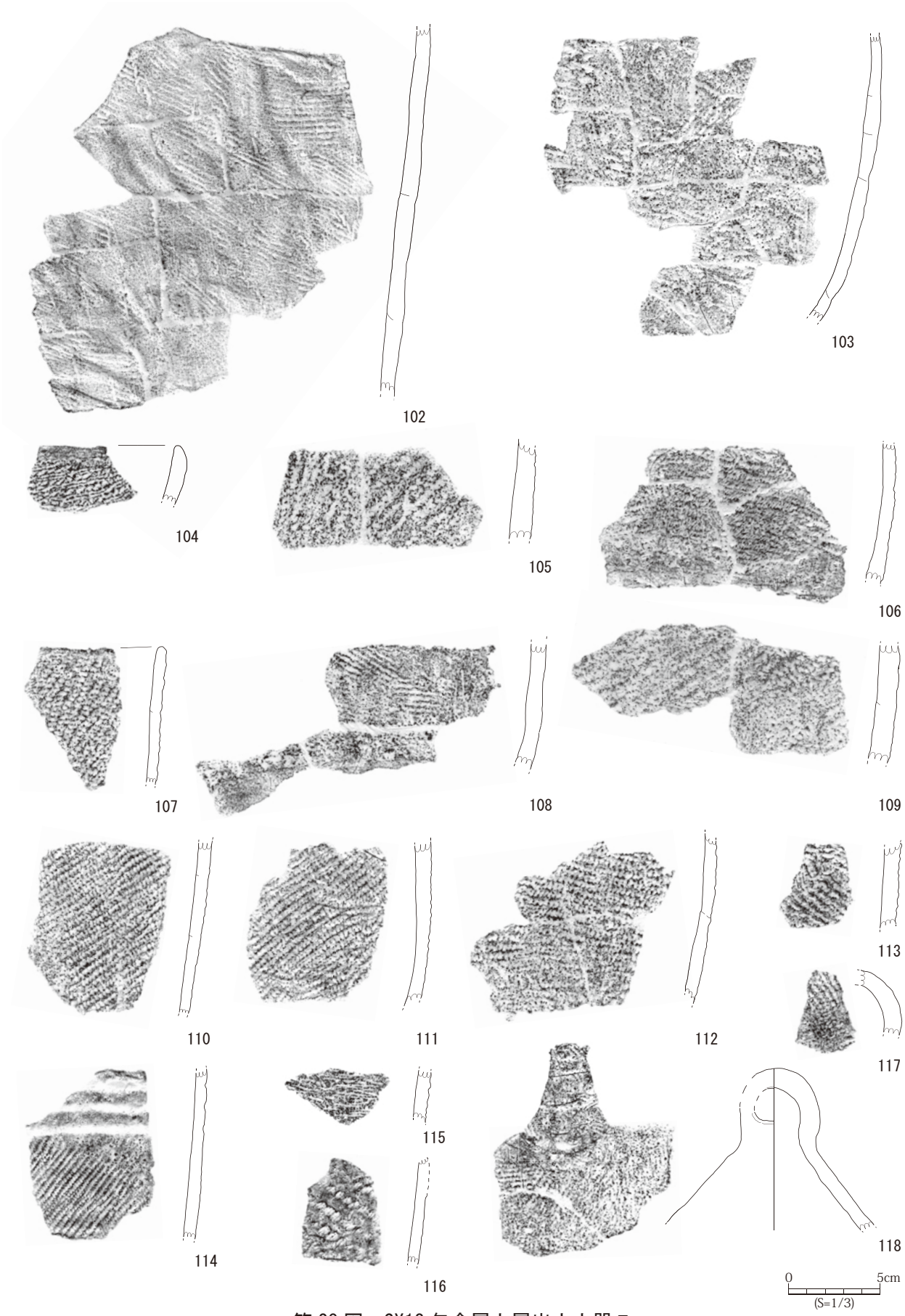
第 25 図　SX13 包含層上層出土土器２



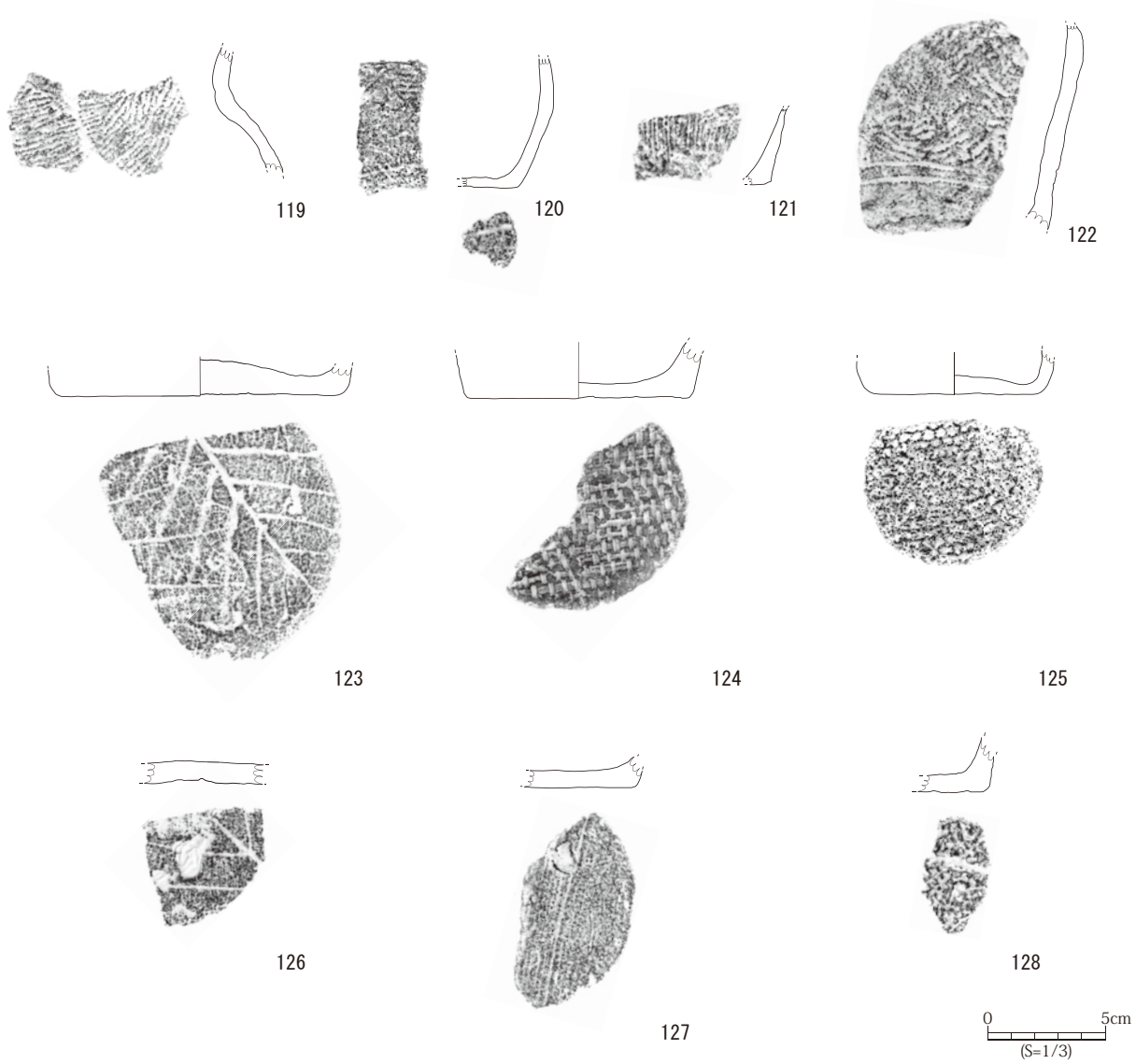
第 26 図　SX13 包含層上層出土土器３



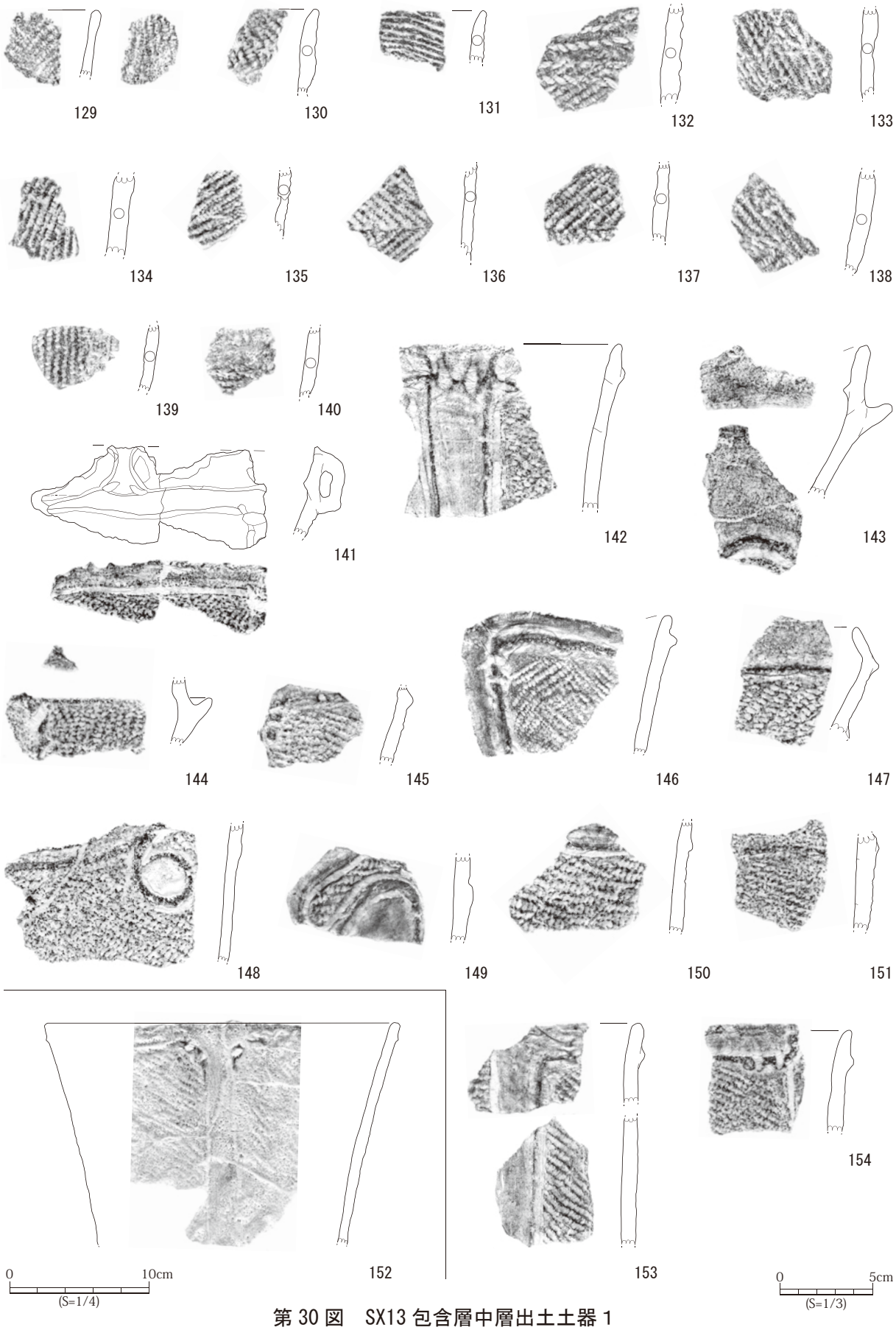
第 27 図　SX13 包含層上層出土土器 4



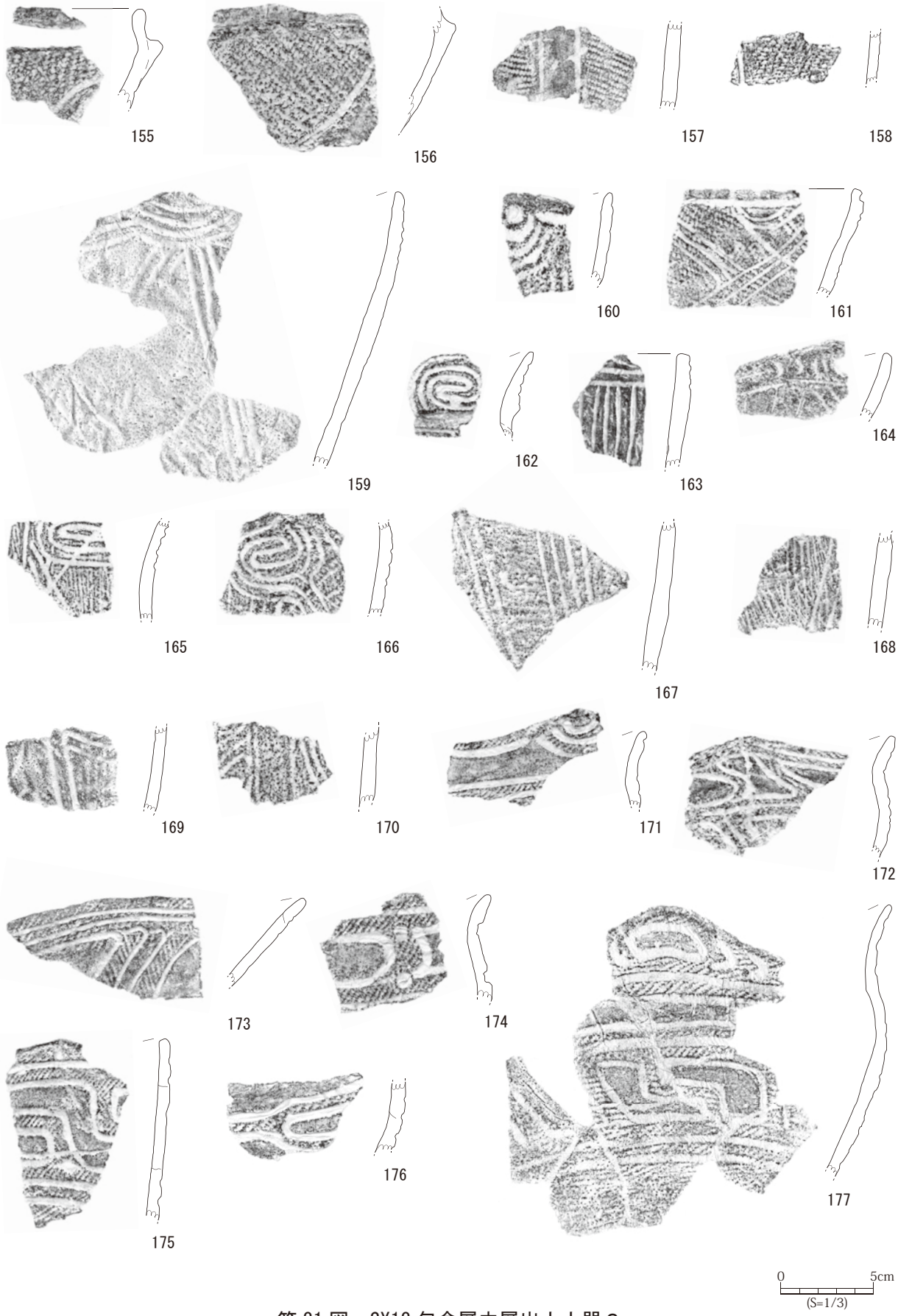
第 28 図　SX13 包含層上層出土土器５



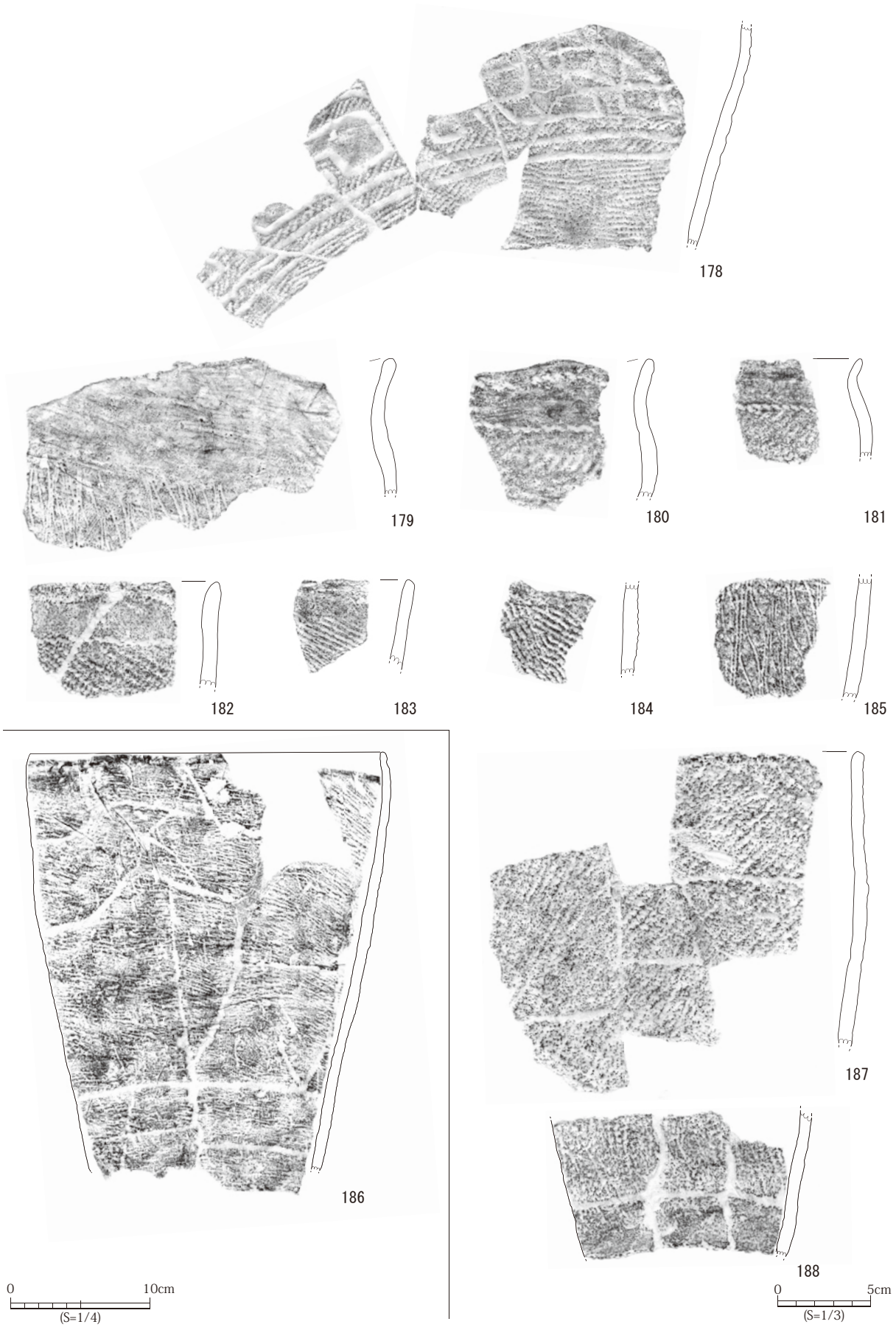
第 29 図　SX13 包含層上層出土土器６



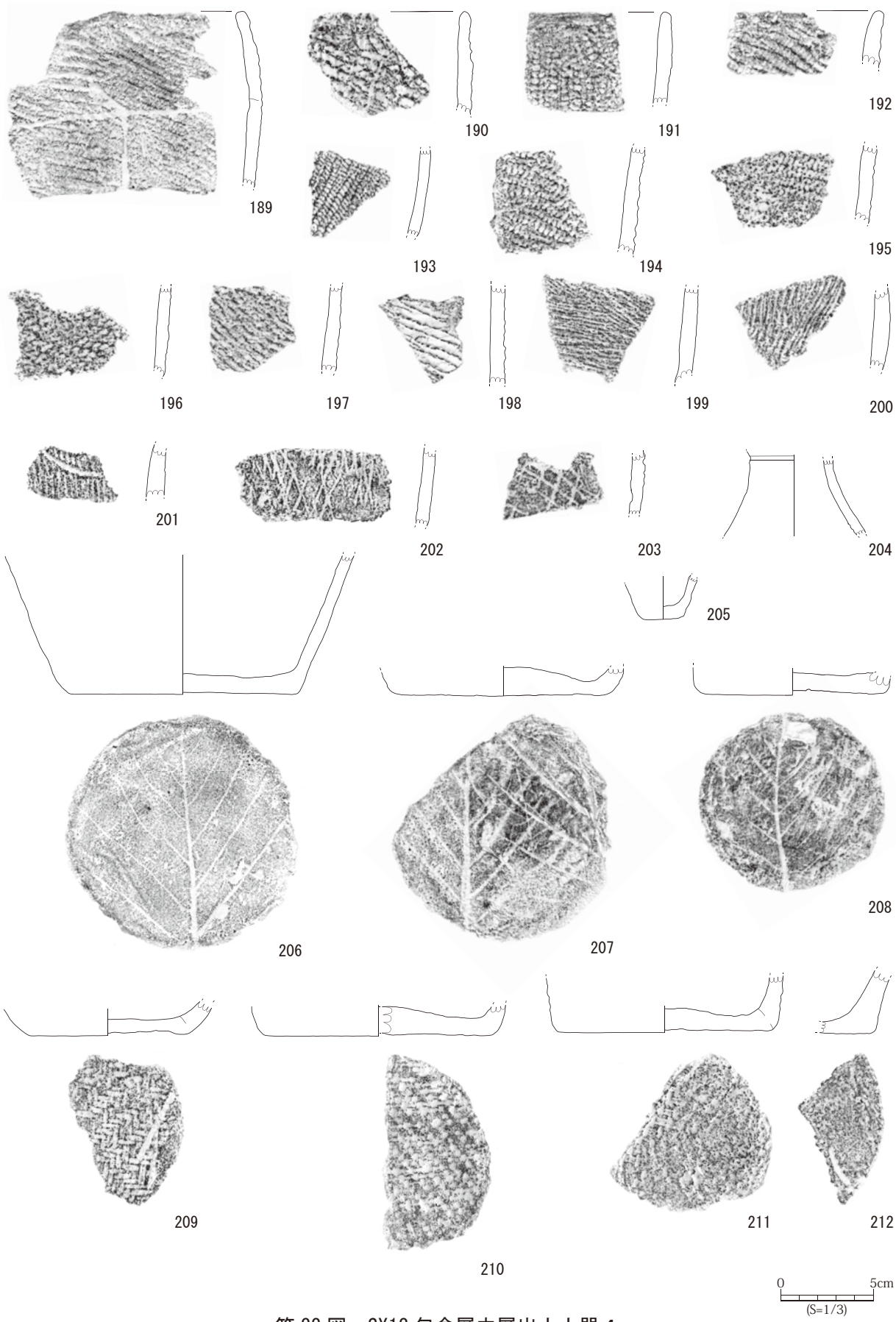
第 30 図　SX13 包含層中層出土土器 1



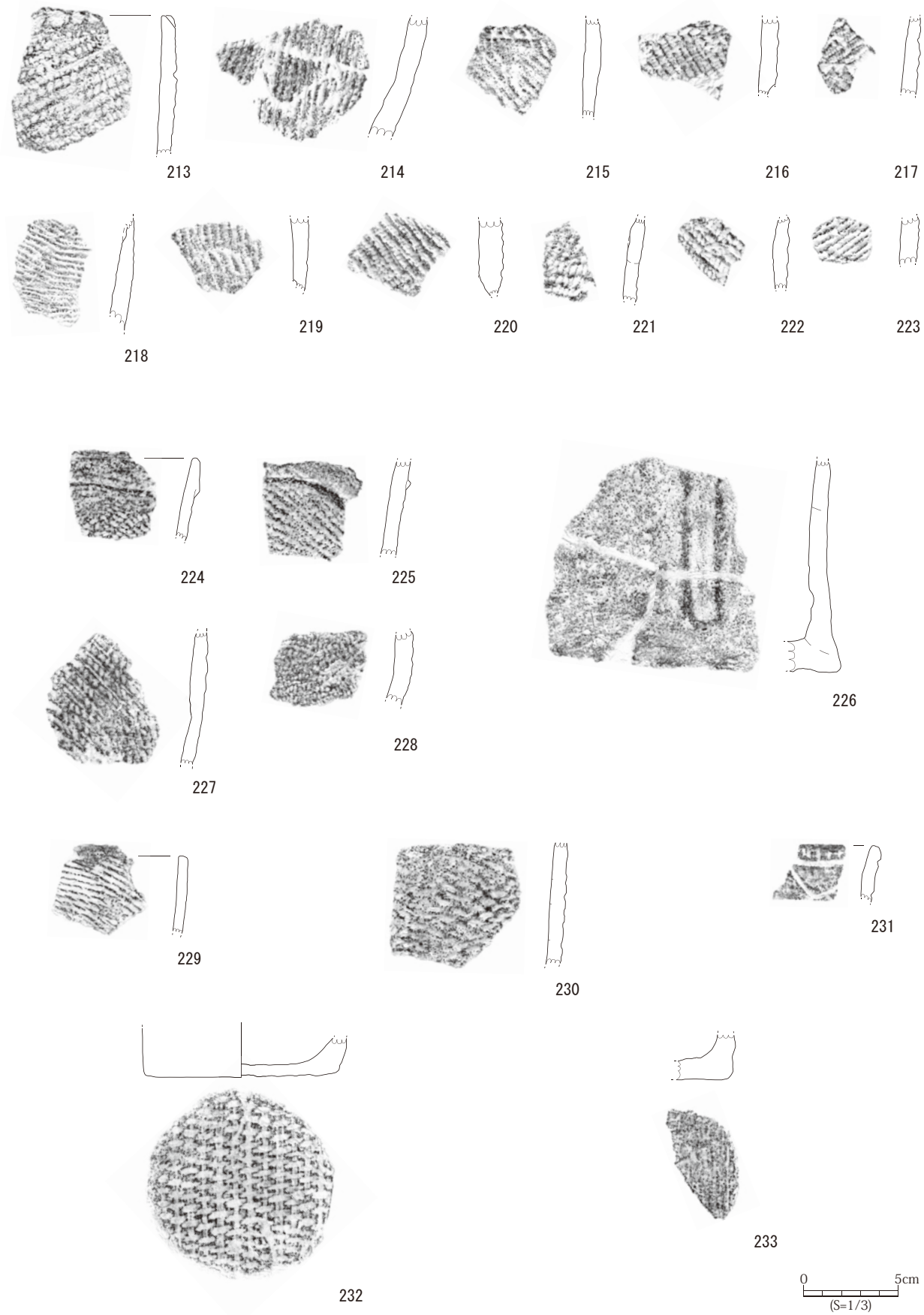
第 31 図　SX13 包含層中層出土土器２



第 32 図　SX13 包含層中層出土土器３



第 33 図　SX13 包含層中層出土土器 4



第 34 図　SX13 包含層下層出土土器

第２表　土器観察表

No	挿　図	分　類	器　種	時　期	出土位置	特　徴	備　考
1	第 22 図	1	深鉢	早期末	SX55	縄文（表：LR、裏：LR）	
2	第 22 図	2	深鉢	早期末	SX55	口縁部刻み、縄文（LR）、繊維土器、穿孔	
3	第 22 図	2	深鉢	早期末	SX55	口縁部刻み、羽状縄文（RL）、繊維土器	
4	第 22 図	2	深鉢	早期末	SX55	縄文（LR）、繊維土器	
5	第 22 図	2	深鉢	早期末	SX55	口縁部刻み、縄文（LR）、繊維土器	№１と同一か？
6	第 22 図	2	深鉢	早期末	SX55	口縁部刻み、羽状縄文（LR）、繊維土器	
7	第 22 図	7	深鉢	後期前半	SK14	縄文（LR）、沈線文	
8	第 22 図	8	深鉢	後期前半	SK14	縄文（LR）、羽状縄文（LR）	
9	第 22 図	－	深鉢	後期前半	SK14		
10	第 23 図	8	深鉢	後期前半	SK24	縄の押圧（RL）、縄文（RL）	
11	第 23 図	6	深鉢	後期前半	SK37	縄文（LR ？）→沈線文	
12	第 23 図	6	深鉢	後期前半	SK37	縄文（LR ？）→沈線文	
13	第 23 図	7	深鉢	後期前半	SK38	沈線文	
14	第 23 図	7	深鉢	後期前半	SK38	縄文？→沈線文	
15	第 23 図	7	深鉢	後期前半	SK38	縄文（RL ？）→沈線文	
16	第 23 図	11	深鉢	後期前半	SK38	縄文（LR ？）	
17	第 23 図	5	深鉢	後期前半	SK69	縄文（LR）、沈線	
18	第 23 図	11	深鉢	早期末？	SK69	羽状縄文？	
19	第 23 図	11	深鉢	早期末？	SK69	羽状縄文（LR）	
20	第 23 図	9	深鉢	後期前半	SK78	縄文？沈線文	
21	第 23 図	9	深鉢	後期前半	SK78	沈線文	
22	第 23 図	6	深鉢	後期前半	SK80	縄文（LR）？→沈線文	
23	第 23 図	11	深鉢	後期前半	SX66	撚糸文（LR）	埋設土器
24	第 23 図	6	深鉢	後期前半	保存地区	縄文（RL）→沈線文	
25	第 24 図	1	深鉢	早期末	SX13 上層	縄文（表：LR、裏：LR）、口縁部刻み、穿孔	
26	第 24 図	1	深鉢	早期末	SX13 上層	縄文（表：RL?、裏 RL?）、口縁部刻み	
27	第 24 図	1	深鉢	早期末	SX13 上層	縄文（表：RL?、裏 RL?）、口縁部刻み	
28	第 24 図	1	深鉢	早期末	SX13 上層	縄文（表：縄文?、裏：RL?）	
29	第 24 図	2	深鉢	早期末	SX13 上層	縄の押圧（RL）、口縁部刻み、繊維土器	
30	第 24 図	2	深鉢	早期末	SX13 上層	口縁部刻み、繊維土器	
31	第 24 図	2	深鉢	早期末	SX13 上層	羽状縄文（LR/RL）、縄の押圧（LR）、繊維土器	
32	第 24 図	2	深鉢	早期末	SX13 上層	縄文（LR）、繊維土器	
33	第 24 図	2	深鉢	早期末	SX13 上層	縄文（LR）、繊維土器	
34	第 24 図	2	深鉢	早期末	SX13 上層	縄文（LR）、繊維土器	
35	第 24 図	3	深鉢	後期前半	SX13 上層	貼付隆帯文、隆帯に沿った刺突	
36	第 24 図	3	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）→貼付隆帯→隆帯に沿う刺突	
37	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？、隆帯文→沈線、刺突	
38	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）、貼付隆帯	
39	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）→貼付隆帯→２個１対刻み、ボタン状貼付文	
40	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	貼付隆帯→２個１対刻み、刺突	
41	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→貼付隆帯→沈線→ボタン状貼付文	
42	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）→貼付隆帯	
43	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	貼付隆帯、刺突	
44	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	貼付隆帯、隆帯に沿う沈線→縄文（LR）、刺突文	
45	第 24 図	4	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）、貼付隆帯	
46	第 24 図	5	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線	
47	第 24 図	5	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？貼付隆帯、沈線文、押点文	
48	第 25 図	5	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？沈線文、刺突	
49	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	突起、貼付隆帯、刺突、刻み、撚糸文→沈線文	
50	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線文、刺突	
51	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？沈線文、刺突	
52	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
53	第 25 図	6	鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）、沈線文	
54	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）→沈線文	
55	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線文、刺突	
56	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（R1）→沈線文→刺突	
57	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
58	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文、刺突文	
59	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線文	
60	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
61	第 25 図	6	鉢？	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線文	
62	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文、穿孔	
63	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線文	
64	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線文	
65	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
66	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
67	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）→沈線文→ナデ	
68	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線文	
69	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線→ナデ	
70	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線→ナデ	
71	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	撚糸文？沈線文	
72	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？、沈線文	
73	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）→沈線文	
74	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
75	第 25 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）？→沈線文、ナデ	
76	第 25 図	６？	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線文	
77	第 26 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線文	

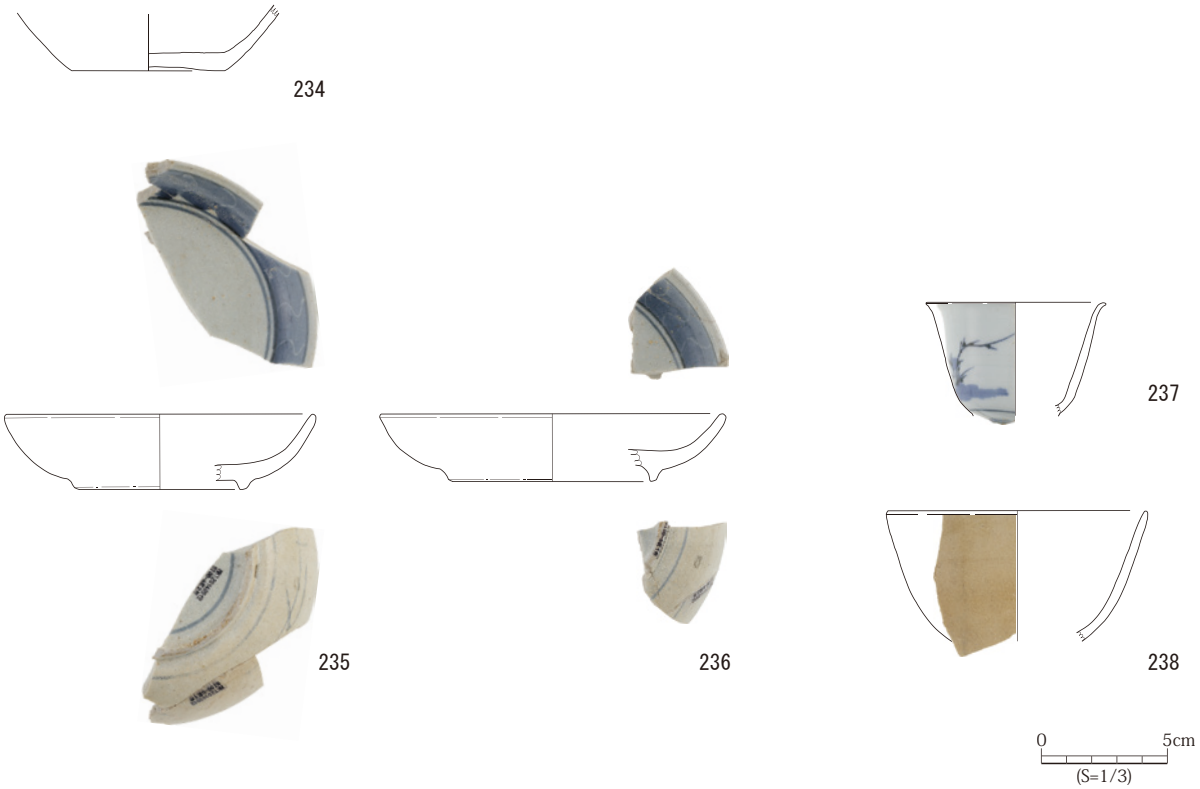
No	挿　図	分　類	器　種	時　期	出土位置	特　徴	備　考
78	第 26 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？、平行沈線文	
79	第 26 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？、平行沈線文	
80	第 26 図	6	深鉢	後期前半	SX13 上層	撚糸文（R1）、沈線文	
81	第 26 図	7	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線文、刺突	
82	第 26 図	7	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線文→刺突	
83	第 26 図	7	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線文	
84	第 26 図	7	深鉢？	後期前半	SX13 上層	縄文？→沈線、刺突	
85	第 26 図	7	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
86	第 26 図	7	蓋	後期前半	SX13 上層	縄文、沈線文	
87	第 26 図	7	壺	後期前半	SX13 上層		
88	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（Lr）、沈線文	
89	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）、縄の押圧（LR）	
90	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
91	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
92	第 27 図	8 ？	深鉢	後期前半	SX13 上層		
93	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？	
94	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→縄の押圧（LR）	
95	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）（閉端部）	
96	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	撚糸文→ナデ	
97	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
98	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
99	第 27 図	8	深鉢	後期前半	SX13 上層	ナデ→羽状縄文（LR 閉端部有 /RL）、口縁部打ち欠き？	
100	第 27 図	9	深鉢	後期前半	SX13 上層	沈線文	
101	第 27 図	10	深鉢	後期前半	SX13 上層	刺突	
102	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（Lr）→縄の押圧（Lr 結節）	
103	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？	
104	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層		
105	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（RL）	
106	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
107	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
108	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（Lr）	
109	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
110	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
111	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
112	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
113	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（Lr）	
114	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）→沈線	
115	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文（L1）	
116	第 28 図	11	深鉢	後期前半	SX13 上層	絡条体？	
117	第 28 図	11	蓋	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
118	第 28 図	11	蓋	後期前半	SX13 上層	縄文？	
119	第 29 図	－	壺	後期前半	SX13 上層	縄文（LR）	
120	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文？木葉痕	
121	第 29 図	－	ミニチュア	後期前半	SX13 上層	沈線文	
122	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	縄文 RL、平行沈線	小型土器
123	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	木葉痕（複数枚）	
124	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	網代圧痕	
125	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	網代圧痕	
126	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	木葉痕	
127	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	木葉痕	
128	第 29 図	－	深鉢	後期前半	SX13 上層	網代圧痕？	
129	第 30 図	1	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（表：LR、裏：LR）	
130	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（LR）、繊維土器	
131	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（R1）、繊維土器	
132	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄の押圧（LR）、縄文 LR、繊維土器	
133	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（LR）、繊維土器	
134	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（LR）、繊維土器	
135	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（LR）、繊維土器	
136	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	羽状縄文（LR/RL）、繊維土器	
137	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	羽状縄文（LR/RL）、繊維土器	
138	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	羽状縄文（LR/RL）、繊維土器	
139	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（LR）、繊維土器	
140	第 30 図	2	深鉢	早期末	SX13 中層	縄文（LR）、繊維土器	
141	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）、隆帯、隆帯に沿う沈線、２個１対の刻み、突起、刺突	
142	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）→隆帯文→２個１対の刻目文、隆帯に沿う沈線文	
143	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	隆帯文→隆帯文に沿う沈線文、内面隆帯	
144	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→貼付隆帯→２個１対の刻み	
145	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）→貼付隆帯→２個１対の刻み	
146	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	羽状縄文（LR/RL）、貼付隆帯→２個１対の刻み	
147	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	貼付隆帯→縄文（LR）	
148	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）、貼付隆帯	
149	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	貼付隆帯→縄文（LR）→隆帯に沿う沈線→ナデ	
150	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（L｛R3｝）、貼付隆帯	
151	第 30 図	4	深鉢	後期前半	SX13 中層	貼付隆帯→縄文（Lr）	
152	第 30 図	5	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）、沈線→貼付隆帯→２個１対の刻み	
153	第 30 図	5	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→貼付隆帯→沈線文	
154	第 30 図	5	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）、貼付隆帯→２個１対の刻み→沈線文	
155	第 31 図	5	深鉢	後期前半	SX13 中層	口縁下貼付隆帯→縄文（LR）、隆帯文→沈線文	

No	挿　図	分　類	器　種	時　期	出土位置	特　徴	備　考
156	第 31 図	5	鉢	後期前葉	SX13 中層	縄文（LR）？、貼付隆帯文、沈線文	
157	第 31 図	5	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→沈線文→ナデ	
158	第 31 図	5	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）、沈線文	
159	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文？、沈線文	
160	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	沈線文、穿孔	
161	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）→平行沈線文、一部縄文をナデ消す	
162	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	貼付隆帯→沈線文、刺突文	
163	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文？→沈線→ナデ	
164	第 31 図	6	鉢？	後期前半	SX13 中層	沈線文	
165	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文？、沈線文	
166	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→沈線文	
167	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文？→沈線文	
168	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文？→沈線文	
169	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→沈線文	
170	第 31 図	6	深鉢	後期前半	SX13 中層	沈線文	
171	第 31 図	7	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文？、沈線文	
172	第 31 図	7	深鉢	後期前半	SX13 中層	沈線文	
173	第 31 図	7	浅鉢？	後期前半	SX13 中層	縄文（Lr）→沈線文→ナデ	
174	第 31 図	7	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→沈線文→刺突	
175	第 31 図	7	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→沈線文	
176	第 31 図	7	深鉢？	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）、沈線文→ナデ	
177	第 31 図	7	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→沈線文	
178	第 32 図	7	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）→沈線文	
179	第 32 図	8	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文（Lr）	
180	第 32 図	8	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄の押圧（LR）、縄文（LR）	
181	第 32 図	8	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄の押圧（Lr）、縄文（Lr）	
182	第 32 図	8	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄の押圧（LR）、縄文（LR）	
183	第 32 図	8	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（Lr）	
184	第 32 図	8	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（Lr）	
185	第 32 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文（LR）	
186	第 32 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文（LR）	
187	第 32 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）	
188	第 32 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）	
189	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）	
190	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（Lr）	
191	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）	
192	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（RL）	
193	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）	
194	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）	№143 と同一か？
195	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）	
196	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（LR）	
197	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（Lr）	
198	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	縄文（Lr）	
199	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文（Rl）？	
200	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文（Rl）	
201	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文？、沈線文	
202	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文（LR）	
203	第 33 図	11	深鉢	後期前半	SX13 中層	撚糸文（LR）	№202 と同一か？
204	第 33 図	－	壺？	後期前半	SX13 中層	沈線、ナデ、内面に２条沈線	
205	第 33 図	－	ミニチュア	後期前半	SX13 中層		
206	第 33 図	－	底部	後期前半	SX13 中層	木葉痕	
207	第 33 図	－	深鉢	後期前半	SX13 中層	木葉痕（複数）	
208	第 33 図	－	深鉢	後期前半	SX13 中層	木葉痕、一部網代圧痕有り	
209	第 33 図	－	深鉢	後期前半	SX13 中層	網代圧痕	
210	第 33 図	－	深鉢	後期前半	SX13 中層	網代圧痕	
211	第 33 図	－	深鉢	後期前半	SX13 中層	木葉痕、網代圧痕	
212	第 33 図	－	深鉢	後期前半	SX13 中層	底部ナデ調整か？	
213	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	口縁部刻み、縄文（LR）、繊維土器	
214	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	縄文（RL）、繊維土器	
215	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	縄文？、繊維土器	
216	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	縄文（LR）、縄の押圧（LR）、繊維土器	
217	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	羽状縄文（RL）、繊維土器	
218	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	縄文（RL）、繊維土器	
219	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	縄文（LR）、繊維土器	
220	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	羽状縄文？、繊維土器	
221	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	羽状縄文（LR）、繊維土器	
222	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	縄文（LR）、繊維土器	
223	第 34 図	2	深鉢	早期末	SX13 下層	縄文（LR）?、繊維土器	
224	第 34 図	4	深鉢	後期前半	SX13 下層	縄文（RL）→貼付隆帯	
225	第 34 図	4	深鉢	後期前半	SX13 下層	縄文（LR）→貼付隆帯	
226	第 34 図	4	深鉢	後期前半	SX13 下層	貼付隆帯	
227	第 34 図	11	深鉢	後期前半	SX13 下層	縄文（LR）	
228	第 34 図	11	深鉢	後期前半	SX13 下層	縄文（LR）？	
229	第 34 図	11	深鉢	後期前半	SX13 下層	縄文（Lr）	
230	第 34 図	11	深鉢	後期前半	SX13 下層	縄文（LR）	
231	第 34 図	－	深鉢	後期前半	SX13 下層	沈線文、刻み	
232	第 34 図	－	深鉢	後期前半	SX13 下層	網代圧痕	
233	第 34 図	－	深鉢	後期前半	SX13 下層	木葉痕？	

（２）土師器（234、写真図版 21）・陶磁器（235 ～ 238）

土師器は、SX13 の上層から実測可能な坏が１点出土し、これ以外にも坏片がわずかに出土している。摩耗が顕著のため、明確な時期は不明だが、平安時代の所産であろう。SI40 との関連性が考えられる。

陶磁器はＤ区を中心に出土したが、遺構としては SI08 のみである。235 と 236 は同じ文様であることから同一個体の可能性が高いが、個々に実測すると法量や色調がやや異なる。出土した陶磁器は肥前系が主体であるが、東北産の銅緑釉瓶と思われる破片も出土している。



第 35 図　土師器・磁器

第３表　土師器観察表

No.	挿　図	出土地点	器　種	底径 (cm)	特　徴	備　考
234	第 21 図	SX13 上層	坏	6.0	全体的に摩耗のため、調整は不明瞭。ロクロ調整で、体部外面下端と底部はヘラケズリか？	外面漆仕上げか？ 底部に乾燥時？のＶ字状の圧痕有

第４表　陶磁器観察表

No.	挿 図	出土地点	器 種	材 質	法量 (cm)			成 形	絵 付	釉 薬	外面特徴	内面特徴	製作地	製作年代	備 考
					口径	器高	高台径								
235	第 35 図	SI08 1・2 層	皿	磁器	(12.2)	3.0	(6.8)	轆轤、削り高台	染付	透明釉	外側面に折れ松葉文	内面外周には、墨弾き技法による捻花文	肥前	18 世紀前半	
236	第 35 図	SI08 1・2 層	皿	磁器	(13.8)	2.7	(8.3)	轆轤、削り高台	染付	透明釉	外側面に折れ松葉文	内面外周には、墨弾き技法による捻花文	肥前	18 世紀前半	
237	第 35 図	SI08 1 層	小坏	磁器	(7.2)	(4.5)	—	轆轤、削り高台	染付	透明釉	竹文または草木文	—	肥前	17 世紀末～18 世紀初？	
238	第 35 図	SI08 1 層	碗	陶器	(10.4)	(5.2)	—	轆轤、削り高台		灰釉	—	—	肥前		呉器手碗か

（３）土製品（239 ～ 272、写真図版 22）

１）土製円板（239 ～ 271、写真図版 22）

今回、土製円板は 140 点が出土し、33 点を図化した。摩耗が顕著なもの、また打ち欠き（敲打・剥離）だけのもので、摩耗により判断が難しいものは抽出していないことから、全体ではもう少し数は増えるものと思われる。

丹野雅人の分類（2008『総覧縄文土器』）を参照に、平面形態で扇型が顕著に見られたため、Ｈとし加えて分類を行い、第５表に提示している。

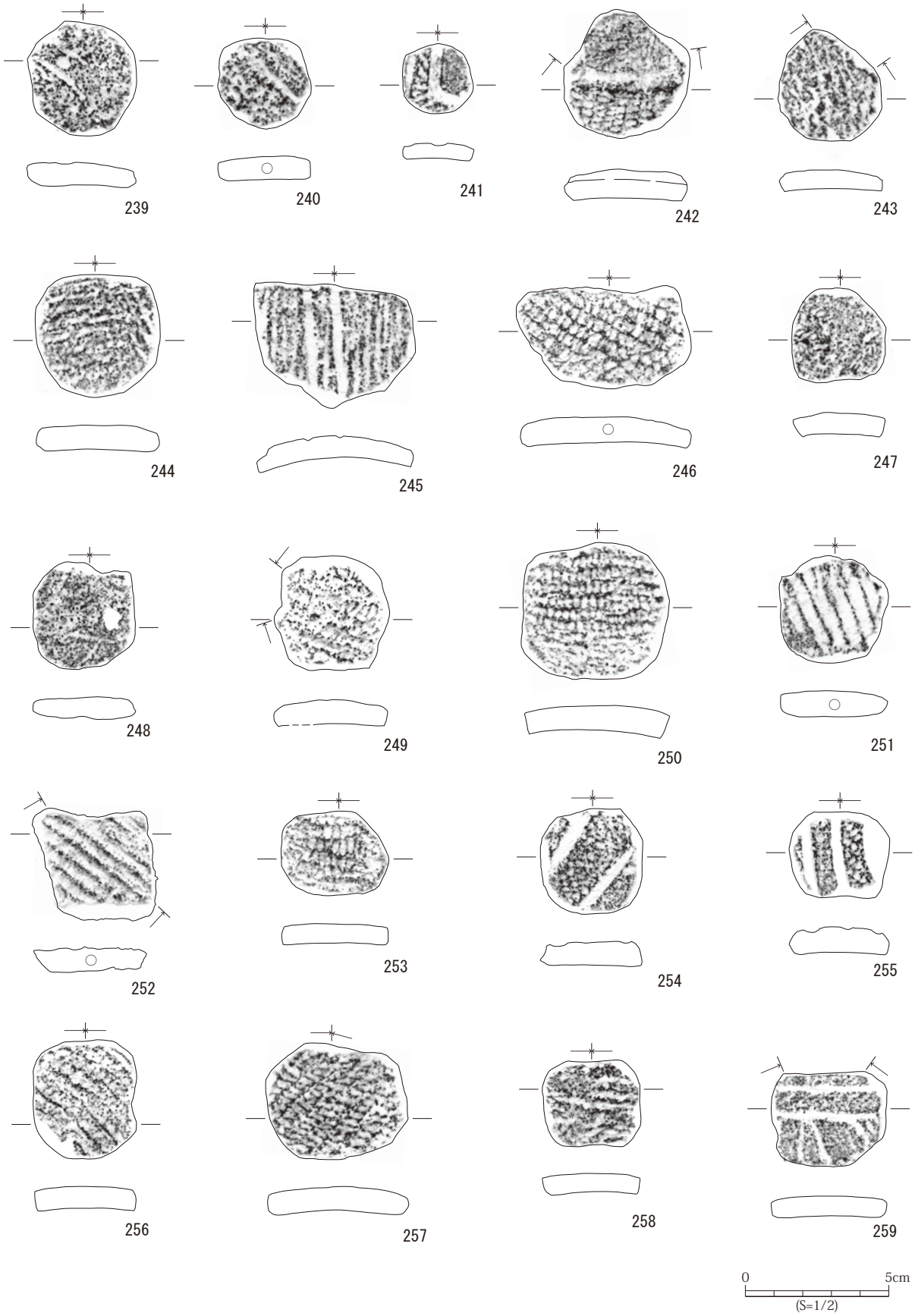
・平面形態　Ａ円形　Ｂ楕円形　Ｃ木葉形　Ｄ半円・半楕円形　Ｅ正方形　Ｆ長方形　Ｇ多角形
　　Ｈ扇型（1/4 円）　Ｉ不定形・不明
・研磨状態　１敲打・剥離のみ　２部分研磨　３全面研磨（分割単位・稜残存）４全面研磨
・研磨度（側縁部）Ⅰ若干　剥離痕残存　Ⅱ表面平滑（稜残存）　Ⅲ表面平滑
・遺存度　　Ａ完形　Ｂ残存 1/2 以上　Ｃ残存 1/2 以下
・部位　　口縁部　胴部　底部

以下、気がついたことを箇条書きに記しておく。

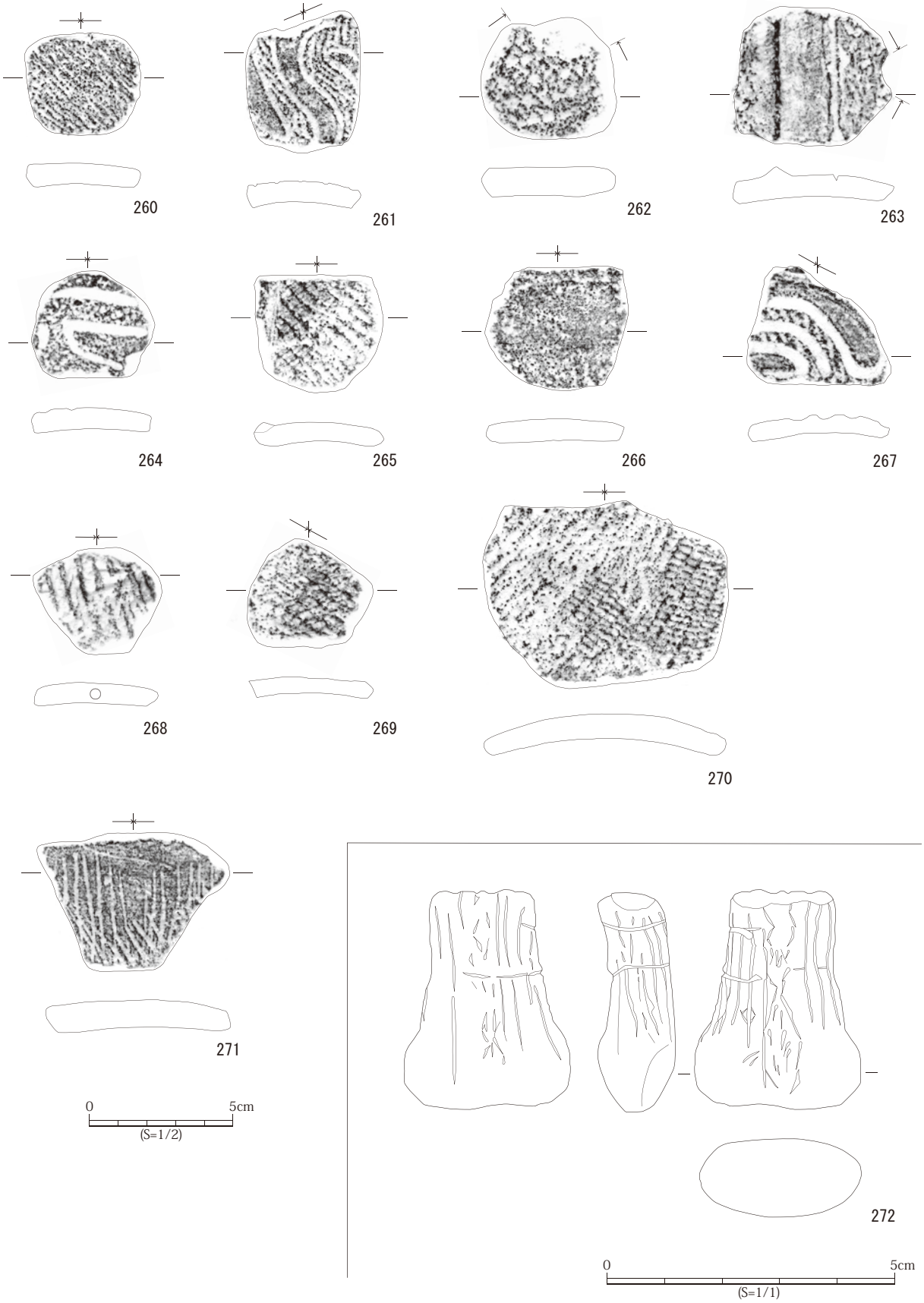
・平面形態は、Ｄ類が多く、Ｈ類・Ｆ類と続く。このことから、円形が重視されているのではなく、本遺跡では一辺が直線的であることが、主流となっている。その一方で、半円形や扇形のように、弧を描いた辺もあることから、研磨が制作の結果なのか、使用の結果であるのか、検討を要する。
・側辺の研磨は、稜が無くなるほど研磨しているものは少ない。
・幅３㎝～６㎝のものが大半を占め、最小は 2.4 ㎝、最大が 8.5㎝である。重量は５～ 20g が主体を占め、最小は 3.9 ｇ、最大が 60g である。
・出土地点は、大半が SX13 で、胴部が主体である。
・時期はすべて縄文時代で、繊維土器（縄文時代早期末）が７点ある。他は明確な時期を示し難いが、本遺跡の遺物の多くが出土した SX13 で縄文時代後期が大半を占めることから、その時期の所産であろう。
・縄文時代早期の７点と他のもので分類差が顕著ではないことから、平面形態等の差異は時代差とは言い難い。

２）土偶（272、写真図版 22）

今回、土偶は１点が出土し、図化し報告する。土偶は上半を欠損するもので、顔の有無や腕の表現等は不明であるが、下半に足などの表現がないことから四肢等の表現が希薄なものと考える。文様は細い工具により押し引きで正面と背面中央に２条の鋸歯状の文様を描き、側面には縦位または横位方向に沈線文を描く。また、鋸歯状の文様の間に同様の工具による押し引きで、刺突を充填している。


239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
0
5cm
(S=1/2)

第 36 図　土製円板 1



第 37 図　土製円板２・土偶

第５表　土製品一覧表

土製円板一覧表

No.	挿図	出土地点	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	部位	平面形態	研磨状態	研磨度	遺存度	時　期	備　考
239	第36図	SX13 中層	3.9	3.7	0.8	13.6	胴部	A	3	Ⅰ	A	縄文	縄文（Lr）、圧痕？
240	第36図	SX13 上層	3.2	3.1	0.8	8.1	胴部	A	3	Ⅱ	A	縄文早期？	縄文（RL）の押圧、繊維土器
241	第36図	SX13	2.4	2.3	0.5	3.9	胴部	A	3	Ⅱ	A	縄文	縄文、沈線
242	第36図	SX13 中層	(4.4)	4.3	0.9	14.1	胴部	(A)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	隆帯貼付後、縄文（RL）
243	第36図	SX13 中層	(3.8)	3.5	0.7	11.9	胴部	B	(3)	Ⅰ	B	縄文	縄文（Lr）
244	第36図	SX13 中層	4.2	4.2	0.8	19.8	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	羽状縄文（Lr）
245	第36図	SX13 上層	5.5	4.3	0.8	25.0	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	沈線、撚糸（RL）
246	第36図	SX13 中層	6.1	3.6	1.0	23.0	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文早期？	羽状縄文（RL）、繊維土器
247	第36図	SX13 中層	3.3	3.2	0.7	10.2	胴部	E	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）の絡条体
248	第36図	SX13 上層	3.7	3.5	0.8	11.5	底部	E	3	Ⅰ	A	縄文	木葉痕、欠損後研磨か？
249	第36図	SX13 上層	4.0	3.9	0.8	16.7	胴部	E	2	Ⅰ	A	縄文	縄文（Lr）
250	第36図	SX13 中層	4.9	4.6	1.0	30.0	胴部	E	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）
251	第36図	SX13 下層	3.8	3.7	0.8	12.2	胴部	E	3	Ⅰ	A	縄文早期？	縄文（RL）、繊維土器
252	第36図	SX13TR	4.3	3.8	0.7	13.8	胴部	E	3	Ⅱ	A	縄文早期？	縄文（RL）、繊維土器
253	第36図	SX13 上層	3.9	2.9	0.7	9.5	胴部	F	3	Ⅰ	A	縄文	縄文（RL）
254	第36図	SX13 中層	3.8	3.8	0.8	13.7	胴部	F	3	Ⅰ	A	縄文	縄文（Lr）、沈線
255	第36図	SX13 中層	3.4	2.9	0.9	11.6	胴部	F	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）
256	第36図	SX13 上層	4.1	3.5	0.7	15.8	胴部	F	4	Ⅲ	A	縄文	縄文（Lr）
257	第36図	SX13 中層	4.7	4.0	0.8	19.1	胴部	F	3	Ⅰ	A	縄文	縄文（RL）
258	第36図	SX13 上層	3.2	2.9	0.8	10.7	胴部	F	3	Ⅱ	A	縄文	撚糸（Lr）？
259	第36図	SX13 中層	3.9	3.2	0.7	11.5	口縁	F	2	Ⅰ	A	縄文	縄文？、沈線
260	第37図	SX13 中層	4.0	3.6	0.7	14.5	胴部	F	4	Ⅲ	A	縄文	縄文（Lr）
261	第37図	SK80	5.0	4.0	0.8	18.0	胴部	F	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）、平行沈線
262	第37図	SX13 一括	4.7	(4.2)	1.0	22.2	底部	(F)	(2)	Ⅰ	B	縄文	網代痕
263	第37図	SX13 中層	(5.4)	4.8	0.9	30.2	胴部	(F)	(3)	Ⅱ	B	縄文	縄文（RL）、隆帯、沈線
264	第37図	SX13 中層	4.3	3.7	0.7	13.2	胴部	G	4	Ⅲ	A	縄文	縄文（Lr）、沈線、口縁部付近
265	第37図	SX13 中層	4.4	4.0	0.7	14.8	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）、隆帯貼付
266	第37図	SX13 中層	5.0	4.2	0.8	19.3	口縁	H	4	Ⅲ	A	縄文	縄文？
267	第37図	SK39	5.1	4.2	0.6	13.3	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）、沈線
268	第37図	SX13 下層	4.5	3.8	0.7	12.1	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文早期？	縄文（RL）、繊維土器
269	第37図	SX13 中層	4.0	3.7	0.8	15.6	胴部	I	3	Ⅰ	A	縄文	縄文（Lr）、欠損後研磨？
270	第37図	SX13 中層	8.5	6.4	0.8	60.0	胴部	I	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（RL）、輪積み
271	第37図	SX13 中層	6.7	4.8	0.9	29.6	胴部	I	3	Ⅱ	A	縄文	撚糸（RL）
		SX13 上層	4.0	3.8	0.7	11.5	胴部	A	3	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.5	3.4	0.9	13.3	胴部	A	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX55 上層	4.4	4.3	1.2	24.4	胴部	A	2	Ⅰ	A	縄文早期？	縄文、繊維土器
		SX13	3.8	3.6	0.6	9.8	胴部	A	3	Ⅱ	A	縄文	縄文、沈線
		SX13 中層	5.4	5.3	1.1	29.3	底部	A	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	5.2	4.9	1.1	33.3	胴部	A	(4)	Ⅲ	B	縄文	縄文
		SX13 中層	3.7	3.2	0.9	15.1	胴部	A	(3)	Ⅱ	B	縄文	無文
		SX13 下層	3.7	1.9	0.5	4.5	胴部	A	(3)	（Ⅰ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	(3.8)	(3.8)	0.8	11.4	胴部	(A)	(3)	（Ⅱ）	C	縄文	無文
		SX13 上層	5.2	(4.2)	0.6	15.8	胴部	(A)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 上層	4.9	(3.4)	0.6	13.1	胴部	(A)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	4.4	(2.7)	0.7	9.7	胴部	(A)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	5.3	(2.0)	0.8	8.6	胴部	(A)	(3)	（Ⅰ）	C	縄文	沈線
		SX13 上層	2.7	(2.1)	0.9	6.3	胴部	(A)	(3)	（Ⅰ）	B	縄文	縄文
		SX13 中層	(4.6)	(2.0)	0.8	10.0	底部？	(A･D)	(3)	（Ⅱ）	C	縄文	無文
		SX13 中層	(5.3)	2.8	0.7	14.2	胴部	(A･D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13	5.6	3.8	0.8	18.2	胴部	(A･D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	(4.7)	(4.1)	0.7	12.8	胴部	(A･D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（R1）、沈線
		SX13 上層	4.6	(3.8)	0.6	7.9	胴部	(A･D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	撚糸
		SX13 上層	4.6	3.8	0.6	12.3	胴部	B	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.5	3.4	0.6	9.4	胴部	B	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	5.1	4.1	0.8	19.3	胴部	B	3	Ⅱ	A	縄文早期？	無文、繊維土器
		SX13 上層	3.9	3.4	0.7	12.1	胴部	B	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 上層	3.0	2.7	0.9	9.0	胴部	B	2	Ⅰ	A	縄文	縄文
		SX13 上層	5.2	4.3	1.1	26.7	胴部	B	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 上層	4.1	3.1	1.2	17.9	胴部	B	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.9	(2.9)	0.7	9.1	胴部	B	(3)	Ⅱ	B	縄文	縄文（R1）
		SX13 一括	4.5	3.9	0.7	14.4	胴部	B	3	Ⅱ	A	縄文	縄文？
		SX13 中層	(2.8)	2.8	0.5	5.3	胴部	(B)	(3)	（Ⅰ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	5.6	4.0	0.9	23.5	胴部	(B)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（Lr）？
		SX13 中層	4.1	3.6	0.7	12.5	胴部	D	3	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 上層	4.6	3.7	0.8	19.3	胴部	D	2	Ⅰ	A	縄文	縄文（Lr）
		SX13 中層	5.1	(3.2)	0.8	14.7	胴部	D	2	Ⅰ	A	縄文	沈線
		SX13 中層	(5.8)	3.0	0.8	17.6	胴部	D	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	沈線
		SX13 上層	5.1	4.3	0.7	17.8	胴部	D	2	Ⅰ	A	縄文	縄文（RL）？
		SX13 中層	4.6	3.3	0.8	15.9	胴部	D	3	Ⅰ	A	縄文	沈線
		SX13 中層	8.2	3.1	0.8	27.2	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 上層	5.3	2.8	0.7	10.8	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	縄文
		SX13	4.6	4.1	0.6	13.3	口縁	D	2	Ⅱ	A	縄文	縄文
		SX13 中層	6.2	(2.8)	0.7	15.6	口縁	D	(2)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 上層	5.1	3.1	0.8	16.6	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）

No.	挿図	出土地点	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	部位	平面形態	研磨状態	研磨度	遺存度	時　期	備　考
		SX13 上層	3.2	2.6	0.6	6.0	胴部	D	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	6.5	4.3	1.0	28.4	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13	4.7	3.3	0.8	14.7	胴部	D	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	5.0	4.0	0.9	17.5	胴部	D	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（Lr）
		SX13	4.3	2.9	0.6	10.5	胴部	D	(3)	Ⅱ	B	縄文	縄文？　沈線？
		SX13 中層	5.0	3.6	0.6	12.2	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.1	2.5	0.6	7.0	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	縄文
		SX13	6.3	(3.0)	0.6	13.3	胴部	D	3	（Ⅱ）	A	縄文	縄文（R1）？
		SX13 中層	5.3	3.4	0.9	15.2	胴部	D	2	Ⅰ	A	縄文	縄文（RL）
		SX13	4.1	(2.2)	0.8	7.8	胴部	D	(3)	Ⅱ	B	縄文	無文
		SX13 上層	(4.7)	2.9	0.7	11.5	胴部	D	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 上層	3.0	2.6	0.6	5.3	胴部	D	4	Ⅲ	A	縄文	撚糸？
		SX13 上層	(3.7)	(3.3)	0.7	9.4	胴部	D	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（R1）
		SX13 上層	4.2	2.5	0.8	9.5	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 上層	3.6	2.6	0.8	7.5	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 上層	3.6	2.5	0.5	4.4	胴部	D	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 上層	4.7	4.1	1.0	20.9	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	隆帯
		SX13 中層	4.5	3.2	0.7	10.9	胴部	D	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	(3.3)	3.3	0.9	11.8	胴部	(D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	(4.9)	(3.0)	0.8	13.4	胴部	(D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（Lr）？
		SX13 上層	3.1	2.3	0.8	6.7	胴部	(D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	撚糸？
		SX13 上層	(3.6)	(3.0)	0.6	7.3	胴部	(D)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（RL）
		SX13 中層	4.8	4.6	0.6	18.1	胴部	E	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.3	3.2	0.7	9.6	胴部	E	3	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 上層	3.2	3.2	1.2	15.3	胴部	E	3	Ⅰ	A	縄文	縄文（Lr）
		SX13 中層	4.0	(3.7)	0.9	13.5	胴部	(E･F)	(4)	（Ⅲ）	B	縄文	条線
		SX13 中層	4.3	3.9	0.6	15.2	胴部	F	4	Ⅲ	A	縄文	縄文（Lr）
		SX13	4.1	3.7	0.9	16.8	胴部	F	3	Ⅰ	A	縄文	縄文
		SX13	3.0	2.6	0.8	7.3	胴部	F	4	Ⅲ	A	縄文	無文
		SX13 上層	3.8	3.1	0.8	8.7	胴部	F	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.0	3.6	0.8	15.0	胴部	F	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.7	3.4	0.9	16.3	胴部	F	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（R1）
		SX13 中層	5.1	2.9	0.8	15.2	胴部	F	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.2	2.7	1.1	10.8	胴部	F	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13	4.3	4.0	0.8	15.9	胴部	G	3	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 上層	4.5	4.5	0.6	16.4	胴部	G	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.2	3.2	0.7	7.3	胴部	G	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.1	3.8	0.9	16.7	胴部	G	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 上層	3.9	3.8	1.0	15.3	胴部	G	3	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	3.7	3.1	0.8	9.6	胴部	G	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.0	3.2	0.8	11.1	胴部	G	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.4	3.1	0.6	7.5	胴部	G	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	4.4	3.7	0.9	16.4	胴部	H	3	Ⅰ	A	縄文	沈線
		SX13 上層	6.0	5.2	1.0	40.9	胴部	H	3	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13	4.2	3.6	0.7	12.1	口縁？	H	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.7	4.0	0.7	18.7	胴部	H	(2)	Ⅰ	A	縄文	縄文（Lr）
		SX13 上層	4.0	3.1	0.8	13.2	胴部	H	2	Ⅰ	A	縄文	無文、欠損後研磨か？
		SX13 中層	5.6	4.0	0.8	23.9	胴部	H	4	Ⅲ	A	縄文	無節？
		SX13 中層	5.2	3.5	0.7	11.8	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	縄文？
		SX13 中層	4.9	3.7	0.8	17.9	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.3	4.2	0.7	17.8	胴部	H	2	Ⅰ	A	縄文	縄文
		SX13 上層	4.0	3.6	0.7	14.2	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	(5.8)	4.2	0.7	22.1	胴部	H	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（Lr）？
		SX13 中層	4.7	3.1	0.6	9.1	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 中層	4.6	3.7	0.8	14.7	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（RL）？
		SX13 中層	4.8	3.1	0.8	12.4	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	無文
		SX13 下層	3.7	3.5	0.7	9.7	胴部	H	(3)	Ⅱ	B	縄文	無文
		SX13 上層	3.9	3.8	0.6	12.4	胴部	H	3	Ⅱ	A	縄文	条線
		SX13 中層	(5.5)	4.6	0.6	16.9	胴部	(H)	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	縄文（Lr）
		SX13 上層	4.5	4.4	0.7	18.9	胴部	I	(3)	Ⅱ	A	縄文	縄文（Lr）
		SX13 中層	5.9	(4.1)	0.7	16.8	胴部	I	(2)	Ⅰ	B	縄文	縄文
		SX13 上層	4.6	(3.3)	1.3	20.1	胴部	I	2	Ⅰ	A	縄文	無文
		SX13 上層	(4.5)	3.3	0.6	9.5	胴部	I	(3)	（Ⅱ）	B	縄文	無文
		SX13 中層	3.9	2.9	0.7	11.7	胴部	I	3	Ⅱ	A	縄文	条線？
		SX13 中層	4.8	3.5	0.7	14.1	胴部	I	3	Ⅱ	A	縄文	縄文（RL）
		SX13 中層	5.8	5.7	0.9	35.6	胴部	I	3	Ⅱ	A	縄文	縄文

土偶一覧表

No	挿図	出土地点	法　量				残存度	備　考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
272	第37図	SX13	(3.8)	2.9	1.8	14.8	上半欠	細い工具による押し引きで施文

（４）石器（273 ～ 361、写真図版 23 ～ 27）

石器は石鏃、石錐、石匙、石箆、楔形石器、抉り入り石器、不定形石器、石製円板、打製石斧、磨製石斧、礫器（磨石、敲石、凹石、砥石、石皿）、石製品（石棒、石刀、棒状石製品、コの字状石製品、撥形石製品）など 199 点が出土し、このうち 89 点を図示した。また、このほかに剥片、磨石の可能性のある円礫、軽石も出土している。石器の多くは SX13 包含層からの出土である。以下では、第６表で示した各器種および分類について示した後、各器種の特徴について述べる。SX13 包含層出土石器について、記載が煩雑になることを避けるため層位別の報告はせず、器種別での報告とする。個別遺物の出土層位等については第６表を参照してもらいたい。

石鏃

尖頭部の作出があり、全体として薄手で、後述する尖頭器よりも小形のもの。基部の形態により、以下に分類した。また、このほかに製作過程と考えられるものを未製品とした。

a　基部に抉りを入れ、逆刺を作出したもの（凹基式）

b　基部が直線的に調整したもの（平基式）

c　基部が突出したもの（凸基式）

尖頭器

尖頭部の作出があり、石鏃より大形のもの。本遺跡で出土した石鏃の大部分が長さ 3.5 ㎝未満であることから、これよりも大形のものを便宜上、尖頭器として分類した。

石錐

尖頭部の作出があり、尖頭部が厚手で、ドリルとしての機能を想定できるもの。錐部に対しつまみ部の作出の有無により以下に分類した。

a　つまみ部が作出されていないもの

b　つまみ部の作出が明瞭なもの

石匙

剥片に剥離を施すことによって、つまみ部を作出するもの。つまみ部に対する刃部形態により以下に分類した。

a　つまみ部に対し刃部が縦に長いもの（縦型）

b　つまみ部に対し刃部が横に長いもの（横型）

石箆

剥片に加工を加え、剥片の長軸に直行する刃部を作出するもの。

楔形石器

向かい合う一対の辺または二対の辺に階段状の剥離面が観察されるもの。または、欠損があるが、それが想定できるもの。

抉り入り石器

剥片の一辺に抉りを入れ、刃部を作出したもの。

不定形石器

上記の分類に当てはまらない打製石器。素材剥片に対する加工により以下に分類する。

a　素材剥片の片面に加工を施すもの

b　素材剥片の両面に加工を施すもの

c　素材剥片にスポット的に剥離を施すもの

d　礫面を残す大形剥片または円礫に剥離を施し、刃部を作出するもの

石製円板

扁平な礫を打ち欠きまたは敲打や研磨により、平面形を円形または多角形に仕上げたもの。

打製石斧

端部に刃部を作出するもの。分類は石箆と共通する部分があるが、全体として粗雑な剥離により成形するもの。

磨製石斧

端部に刃部を作出し、全面を研磨や敲打により成形するもの。

礫器

磨石　礫の片面または両面に磨面を有するもの。平面形で以下に分類する

a　研磨が著しく、他の面との間に稜を持つもの

b　平面長楕円で、一面または複数面に磨面を有するもの

c　球状の礫で磨面を有するもの

d　平面不定形で磨面を有するもの

敲石　敲打痕を有するもの

凹石　敲打による凹みのあるもの。敲石に対し大形で、手に持って使用することが想定しにくいもの

砥石　溝状の磨面を有するもの

石皿　平面またはやや凹んだ、広い磨面を有するもの。磨石に対し大形で、手に持って使用することが想定しにくいもの

石製品

石棒・石刀

敲打や研磨により棒状に成形したもの。断面円形のものを石棒、刃部を作出したものを石刀とする

棒状石製品

剥離や敲打、研磨により断面方形の棒状の石器に成形したもの

コの字形石製品

敲打や研磨により、平面コの字形に成形したもの

撥形石製品

敲打や研磨により、平面撥形に成形したもの

その他

上記分類のいずれにも該当しないもの

１）遺構出土石器

石鏃（273 ～ 277、写真図版 23）

遺構から石鏃が７点出土し、このうち５点を図示した。273・274 は凹基式の石鏃で、275 は凸基式の石鏃である。276・277 は石鏃の未製品とみられる。石材は珪質凝灰岩とメノウが利用されている。273・275 は SI08 竪穴建物跡、274・277 は SB41 掘建柱建物跡、276 は SK38 土坑（貯蔵穴）より出土した。

石錐（278・279、写真図版 23）

遺構から石錐が２点出土し、図示した。278 はつまみ部と錐部の作り分けがない頁岩製の石錐で、錐部先端が欠損している。SI08 竪穴建物跡出土である。279 は P661 小穴出土の石錐で、黒曜石製の尖頭器を転用したものと考えられる。

石匙（280、写真図版 23）

遺構からは石匙１点が出土し、図示した。280 は SK20 土坑から出土した縦型の石匙で、上半が欠損している。左側辺に両面から調整を施して刃部を作る。石材は珪質凝灰岩である。SK20 は近世の土坑であり、縄文時代の遺物が覆土に混入したものとみられる。

石箆（281、写真図版 23）

遺構からは石箆１点が出土し、図示した。281 は SK74 土坑（貯蔵穴）から出土した凝灰質砂岩製の石箆である。腹面側に全方向から剥離を施し調整する一方で、背面側には大きく礫面を残す。

楔形石器（282・283、写真図版 23）

遺構からは楔形石器３点が出土し、このうち２点を図示した。282 は SK62 土坑から出土した珪質凝灰岩製の楔形石器である。上下に微細な剥離面を持つほか、左右にも微細な剥離面を有し、二対の辺で利用されたものと考えられる。283 は珪質凝灰岩製の楔形石器で、一部残存する。

不定形石器（284、写真図版 23）

遺構からは二次加工のある剥片が１点出土し、図示した。284 は SK34 土坑（貯蔵穴）から出土した珪質凝灰岩製の不定形石器である。背面と腹面の一部に連続的またはスポット的に微細な剥離を施す。

打製石斧（285・286、写真図版 23）

遺構からは打製石斧が２点出土し、図示した。285 は SX55 小竪穴・集石土坑から出土したシルト岩製の石斧である。腹面側に大きく礫面を残す特徴は、包含層出土の打製石斧と共通する。286 は経塚の墳丘から出土した砂岩製の打製石斧である。石質のためか、磨滅が強くみられる。刃部と基部を中心に素材である礫の縁辺に剥離を施し、成形・調整されている。経塚からの出土ではあるが、時期は経塚とは異なり、縄文時代の遺物であろう。

磨石（287 ～ 289、写真図版 23）

磨石は遺構から３点出土し、図示した。287 は P693 小穴から出土した球形の磨石で、全面を研磨する。石材は凝灰質砂岩である。288 は P708 小穴から出土した磨石で平面形が長楕円を呈する。磨石として両面を利用している。石材は泥岩である。289 は SK65 土坑出土の磨石で平面形が円形である。288 と同様に両面を磨石として利用している。石材は凝灰質砂岩である。

石棒（290、写真図版 23）

石棒は遺構から１点出土している。P823 小穴出土の凝灰質砂岩製の石棒で、小穴の時期は不明であるが縄文時代のものと考える。

石製円板（291・292、写真図版 23）

石製円板は遺構から４点が出土し、このうち２点を図示した。291 は P720 小穴から出土した珪質砂岩製の石製円板である。全体的に風化が進み、調整は不明瞭である。292 は P818 小穴から出土した凝灰岩製の石製円板である。縁辺に剥離や研磨を施し、円形に仕上げている。

２）SX13 包含層出土石器

石鏃（293 ～ 306、写真図版 24）

石鏃は 17 点が出土し、このうち 14 点を図示した。形態は凹基式、平基式、凸基式がみられる。凹基式には抉りを深く入れるもの（293 ～ 298）と抉りが浅く、緩やかな弧を描くもの（299・300）がある。また石鏃の身幅が狭いもの（297・298）がある。294・299 には接着用と考えられる黒色の付着物（アスファルトか？）がみられる。凸基式には幅広のもの（303・304）と幅の狭いもの（305）の両者がみられる。石鏃の石材は珪質凝灰岩を主体に、メノウや黒曜石である。

尖頭器（307、写真図版 24）

尖頭器は２点が出土し、このうち１点を図示した。珪質凝灰岩製の尖頭器で、素材剥片の両面に剥離を施し、縁辺を調整する。

石錐（308 ～ 310、写真図版 24）

石錐は５点が出土し、このうち３点を図示した。石錐にはつまみ部分と錐部の作出が不明瞭なものとつまみ部と錐部の作り分けが明瞭なものがある。つまみ部分の作出が不明瞭なものには、厚手のもの（308）と薄手のもの（309）がみられる。

石箆（311・312、写真図版 24）

石箆は２点が出土し､図示した。311 はやや小形の石箆である。剥片の両面に剥離を施し成形する。312 は縦長剥片を素材とした石箆である。剥片の背面縁辺と腹面左側辺に微細な剥離を施し成形する。石材は泥岩、珪質凝灰岩である。

石匙（313 ～ 315、写真図版 24）

石匙は３点が出土し、図示した。石匙には縦型と横型の石匙がみられる。縦型の石匙は素材となる剥片の両面に剥離を施し成形する。横型の石匙（315）は､つまみ部分の作出がやや不明瞭であり、縦型に比べ背面には大きな剥離面を残す特徴がみられる。石材は珪質凝灰岩である。

楔形石器（316 ～ 319、写真図版 24・25）

楔形石器は 12 点が出土し、このうち４点を図化した。楔形石器には、刃部が一対のもの（316・317・319）と二対のもの（318）がみられる。石材は、黒曜石などである。

抉り入り石器（320、写真図版 25）

抉り入り石器は１点出土した。礫面を残す比較的薄手の剥片の縁辺を利用した抉り入り石器である。石材は、珪質凝灰岩である。

不定形石器（321 ～ 330、写真図版 25・26）

不定形石器は 22 点が出土し、このうち 12 点を図示した。321 ～ 323 は素材剥片の一辺または複数の辺に片側から加工を加え、刃部を作出した不定形石器である。324・326 は素材剥片にスポット的に剥離を施した不定形石器である。325・327・328 は剥片の両面に剥離を施した不定形石器である。329・330 は礫面を残すような大型の剥片または円礫の縁辺に粗雑な剥離を加え、刃部を作る不定形石器である。礫面を大きく残す点で打製石斧と共通する特徴を持つ。不定形石器には、珪質凝灰岩を主体に泥岩などがみられる。

石製円板（331 ～ 335、写真図版 26）

石製円板は７点が出土し、このうち５点を図化した。石製円板は扁平な素材を用い、縁辺を打ち欠き、研磨により成形するもの（331・334）と、打ち欠きを主体とし成形するもの（332・333・335）の両者がみられる。石製円板には凝灰質砂岩が主体的である。

打製石斧（336 ～ 342、写真図版 26）

打製石斧には円礫を素材に用い、その片面に加工を加えることで打製石斧とするもの（336 ～ 341）と、素材の全面に加工を加え、打製石斧にするもの（342）がある。本遺跡で主体となるのは、素材の礫面を大きく残すものである。礫面には敲打痕を持つものがみられ、敲石や磨石が打製石斧に転用される場合があったと考えられる。出土した打製石斧の石材は凝灰質砂岩や安山岩、シルト岩、玄武岩など多様である。

磨製石斧（343 ～ 345、写真図版 26）

磨製石斧は５点が出土し、このうち３点を図化し報告する。磨製石斧は素材に剥離と研磨により成形されており、基部が尖らないもの（344）と尖るもの（345）がある。両者には使用に伴うためか、刃部につぶれやステップ状の剥離が顕著にみられる。分類上、磨製石斧に含めたが、ほかの磨製石斧と規格が大きく異なるもの（343）がある。全面を研磨により成形し、中央に縦方向の溝を持つ。刃部に微細な剥離面を有するが機能は不明である。出土した磨製石斧の石材は泥岩や緑色岩、溶結凝灰岩である。

礫器

①磨石・敲石（346 ～ 348、写真図版 27）

磨石・敲石は明確なもので 14 点が出土し、このうち３点を図化し報告する。ただし、本遺跡からはこのほかに大量（総量約 117.4 kg）の扁平な円礫が確認されており、磨石や敲石としての痕跡が不明確なものを含め、さらに多くの礫が利器として利用することを目的に、遺跡に持ち込まれたものと推定される。磨石には 348 のように明確な稜が立つほど磨面を利用したものがみられるほか、346 のように磨石としてだけではなく敲石としても利用されるなど、複数の機能を有していたものが多く存在すると考えられる。石材は凝灰質砂岩が主体である。

②凹石（349 ～ 352、写真図版 27）

凹石は７点が出土し、このうち４点を図化し報告する。凹石は磨石や敲石に比べ、平面形がやや不定形なものが多い一方で、台石としての利用がされた為か、扁平な石が多く利用されている。また、磨石や敲石と同様に、凹石としてだけではなく、351 のように砥石としても利用されるなど、複数の機能を有したものもあったとみられる。凹石の石材は、凝灰質または花崗岩質の砂岩や玄武岩な

どである。

③石皿（353、写真図版 27）

石皿は５点が出土し、このうち１点を図化した。石皿は完形での出土がなく、すべて破片資料であるが、装飾等は確認できなかった。石皿の石材は砂岩である。

④砥石（354、写真図版 27）

砥石は２点が出土し、このうち１点を図化し報告する。砥石は筋状の砥面を持ち、一部欠損しているが、多方向から利用されている。砥石の石材は凝灰岩である。

石製品

①石棒・石刀（356・358、写真図版 27）

石棒・石刀は４点が出土し、このうち２点を図化し報告する。いずれも欠損しており、全形や装飾等の有無は不明である。石棒・石刀の石材はホルンフェルスや泥岩である。

②コの字形石製品（355、写真図版 27）

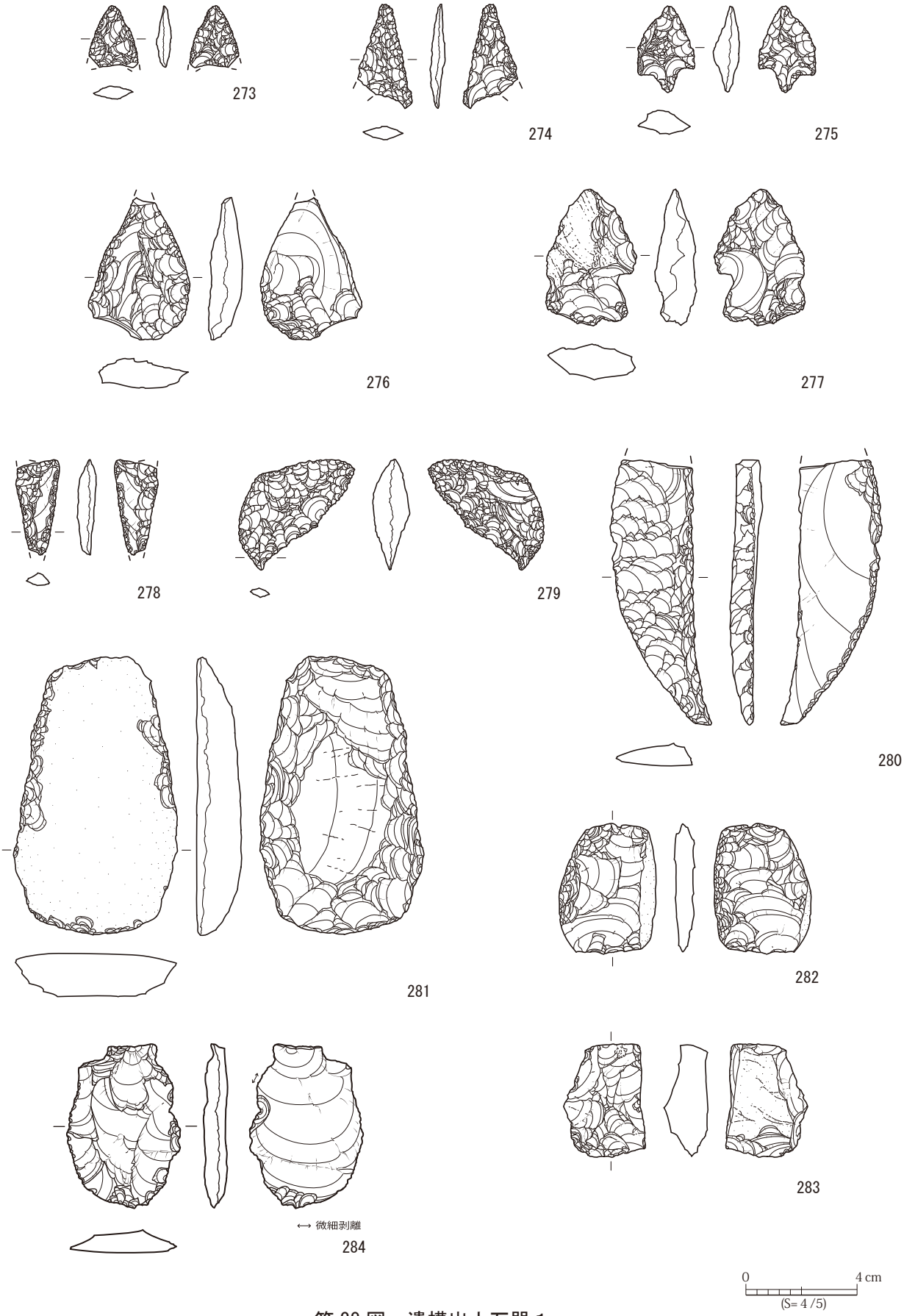
コの字形石製品は２点が出土し、このうち１点を報告する。本遺跡において大小２点が出土し、その機能・用途は不明であり、今後の検討を要する。コの字形石製品の石材は凝灰質砂岩である。

③撥形石製品（357、写真図版 27）

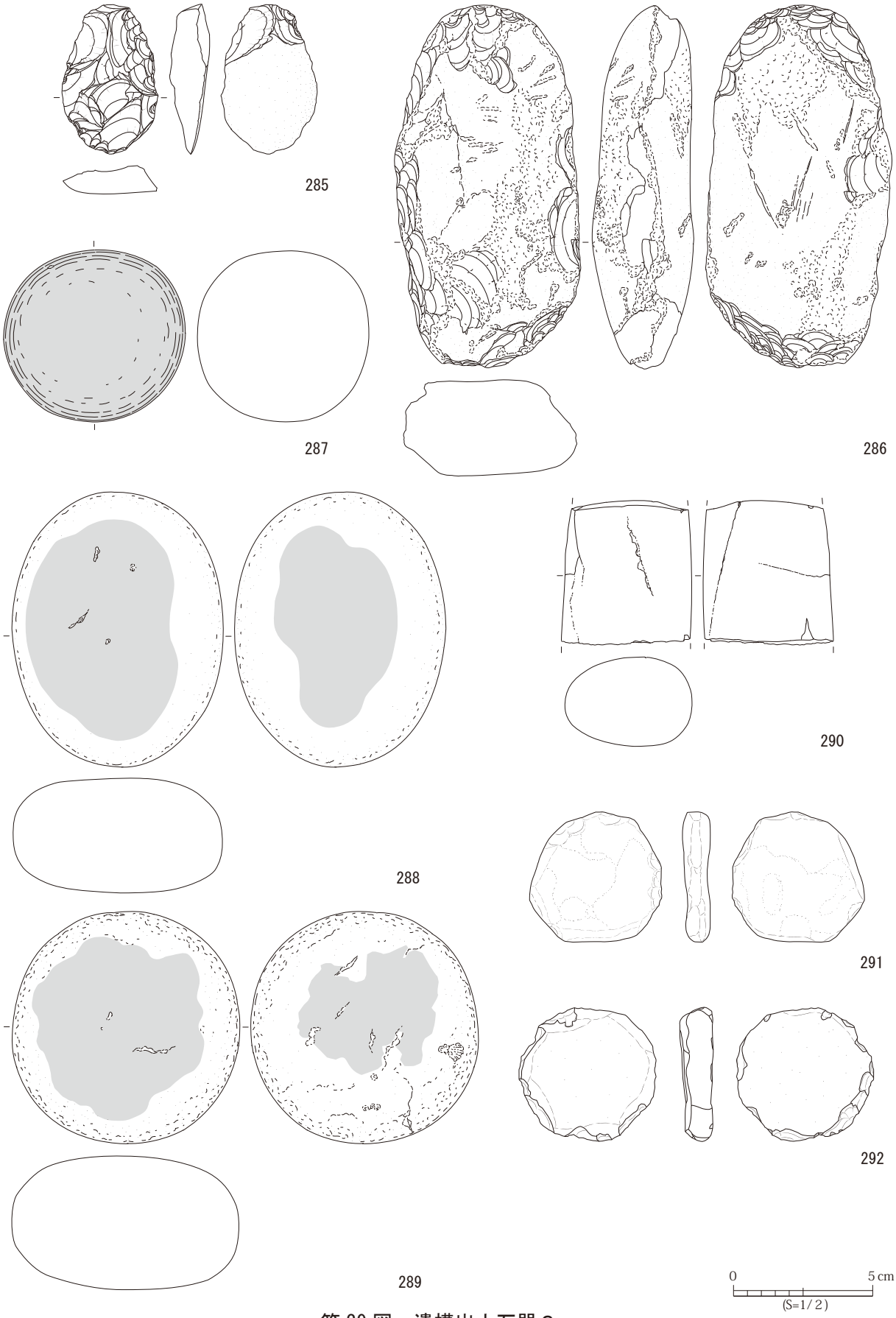
撥形石製品は１点出土し、報告する。石器の表裏および側面を敲打や研磨により成形している。類例や機能・用途はコの字形石製品同様、検討を要する。撥形石製品の石材は凝灰質砂岩である。

④棒状石製品（359 ～ 361、写真図版 27）

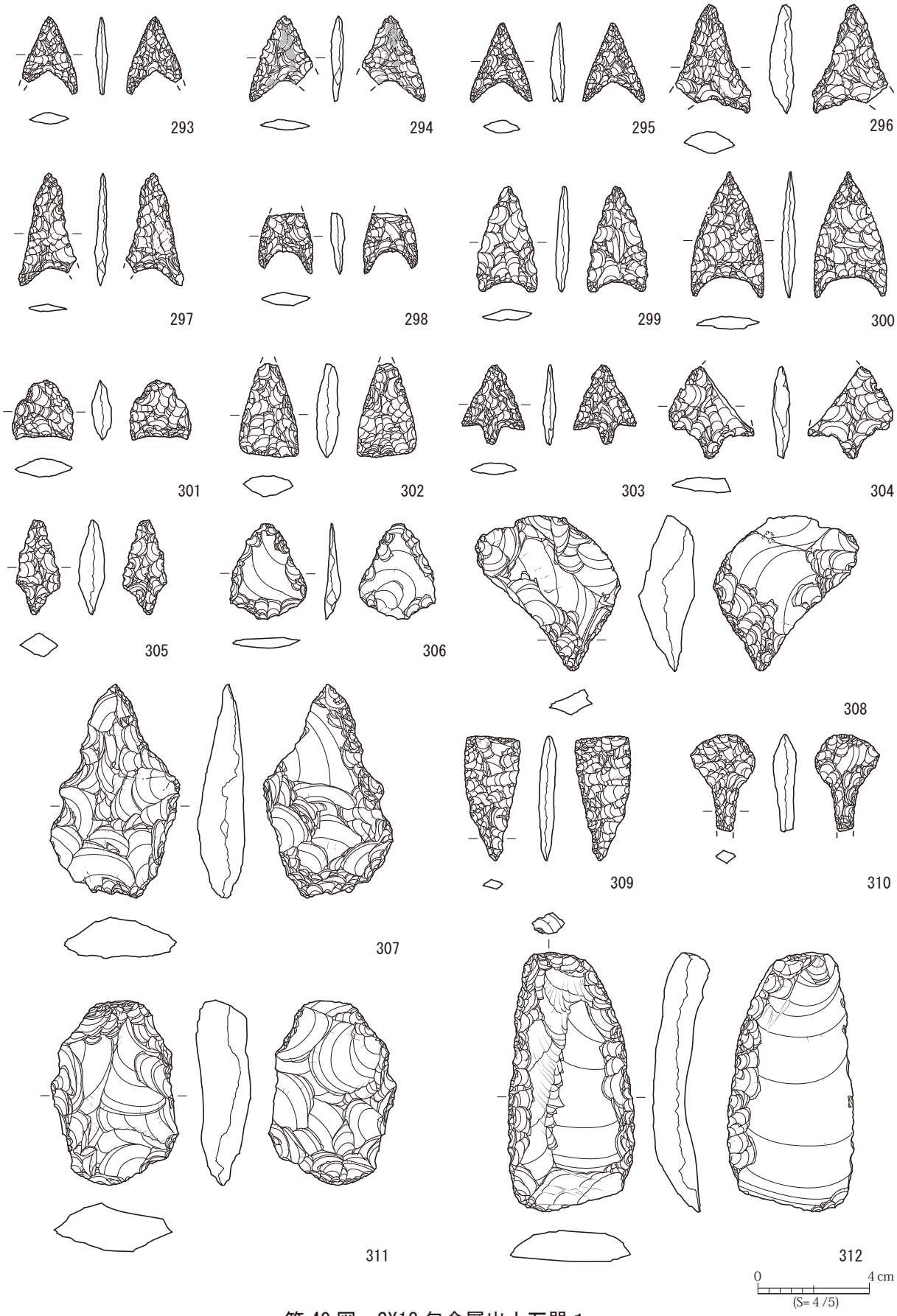
棒状石製品は６点が出土し、このうち３点を報告する。いずれも柱状に割れた素材に対し、剥離や研磨を加えることで断面方形になるよう成形されている。石棒・石刀類と共通するものか不明であり、コの字形石製品や撥形石製品同様、検討を要する。棒状石製品の石材は泥岩を主体とする。



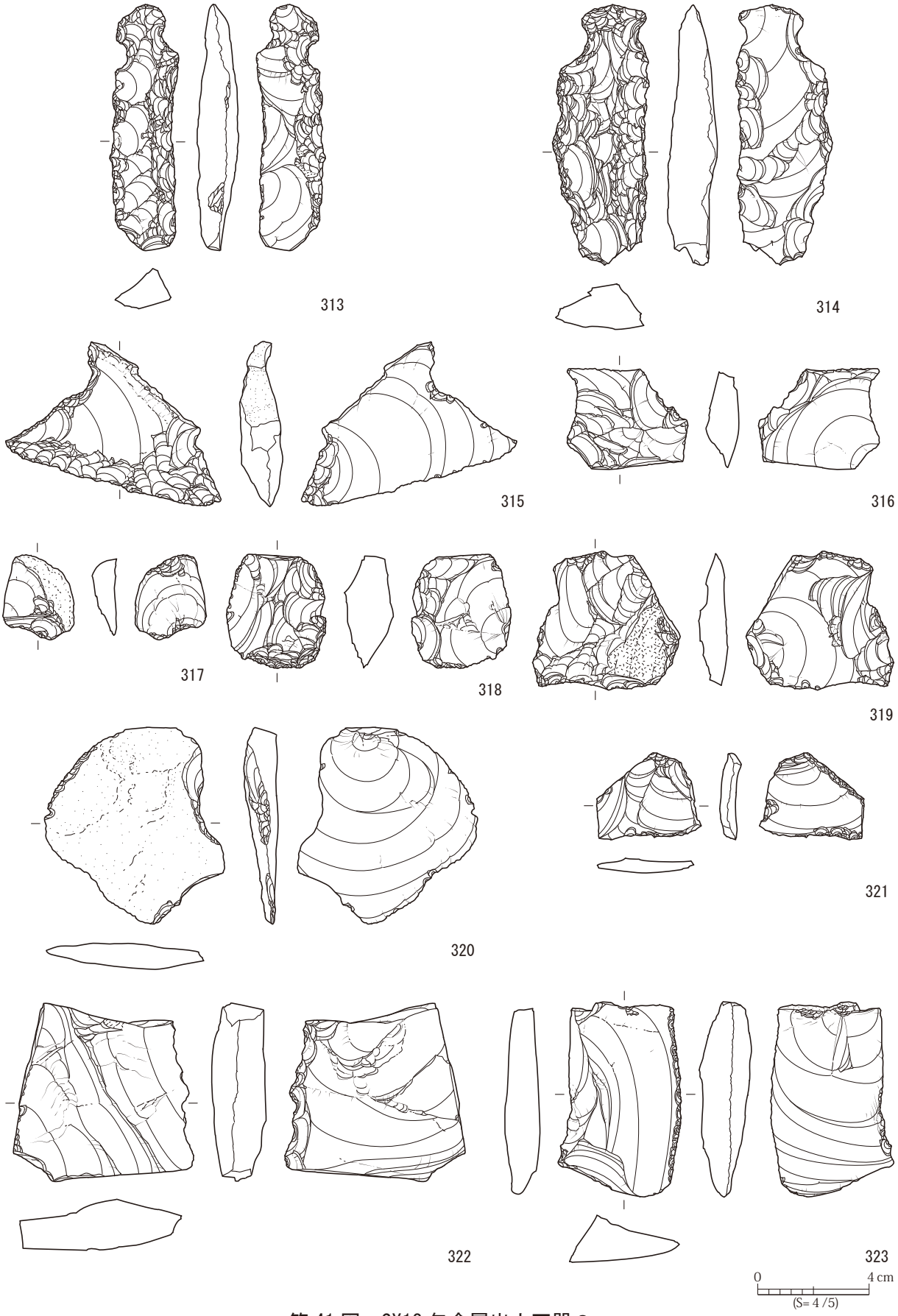
第 38 図　遺構出土石器 1



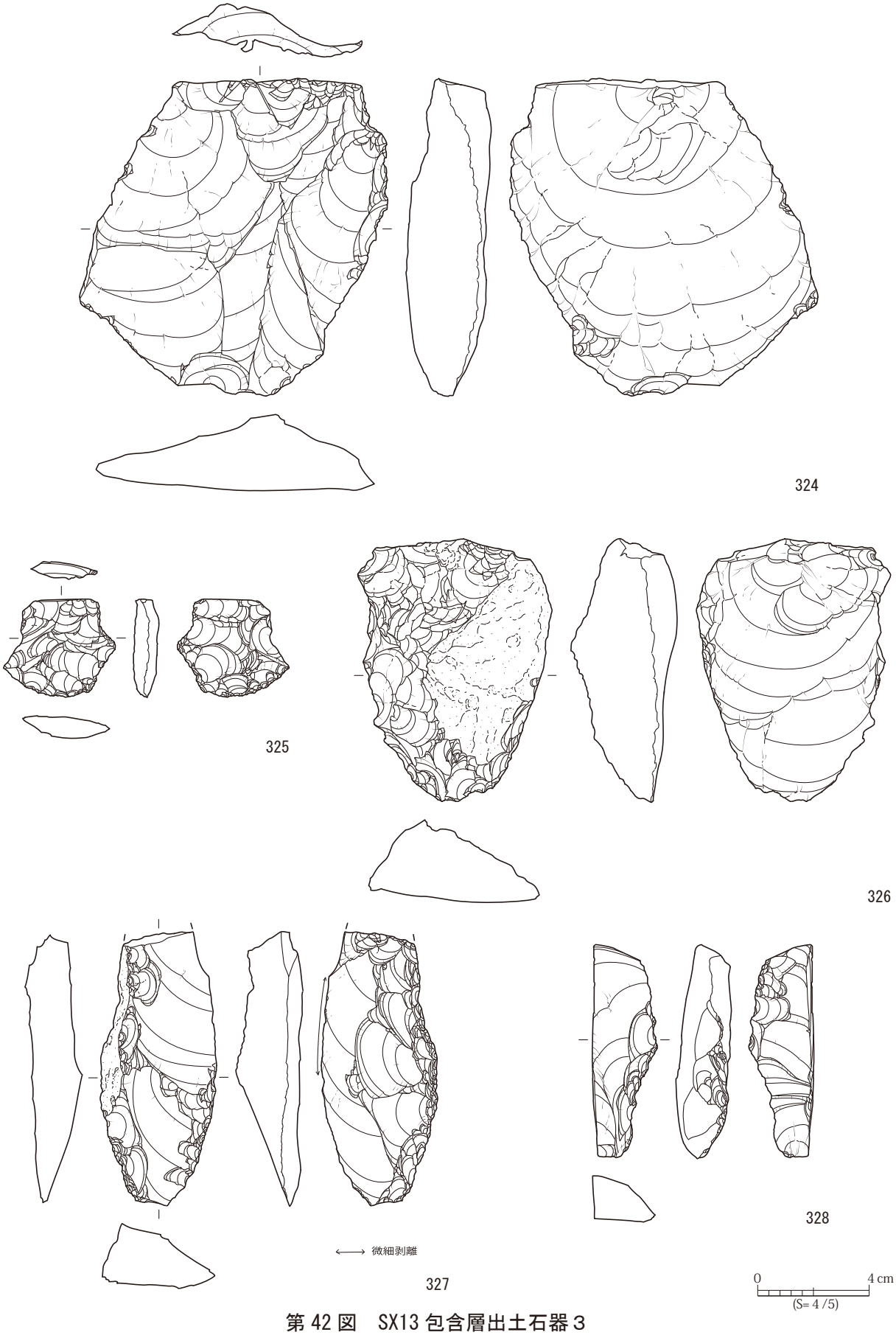
第 39 図　遺構出土石器２



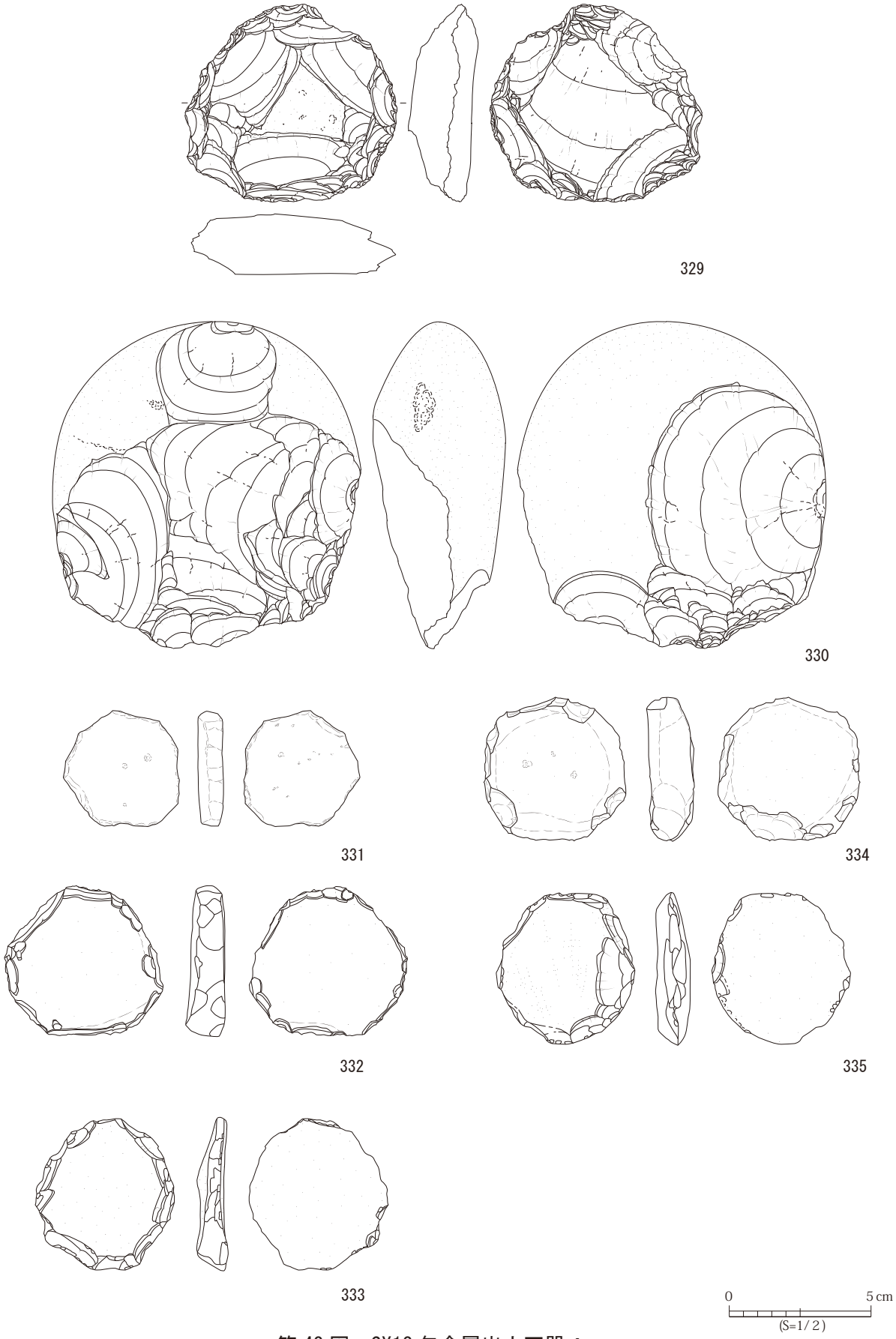
第 40 図　SX13 包含層出土石器 1



第 41 図　SX13 包含層出土石器２

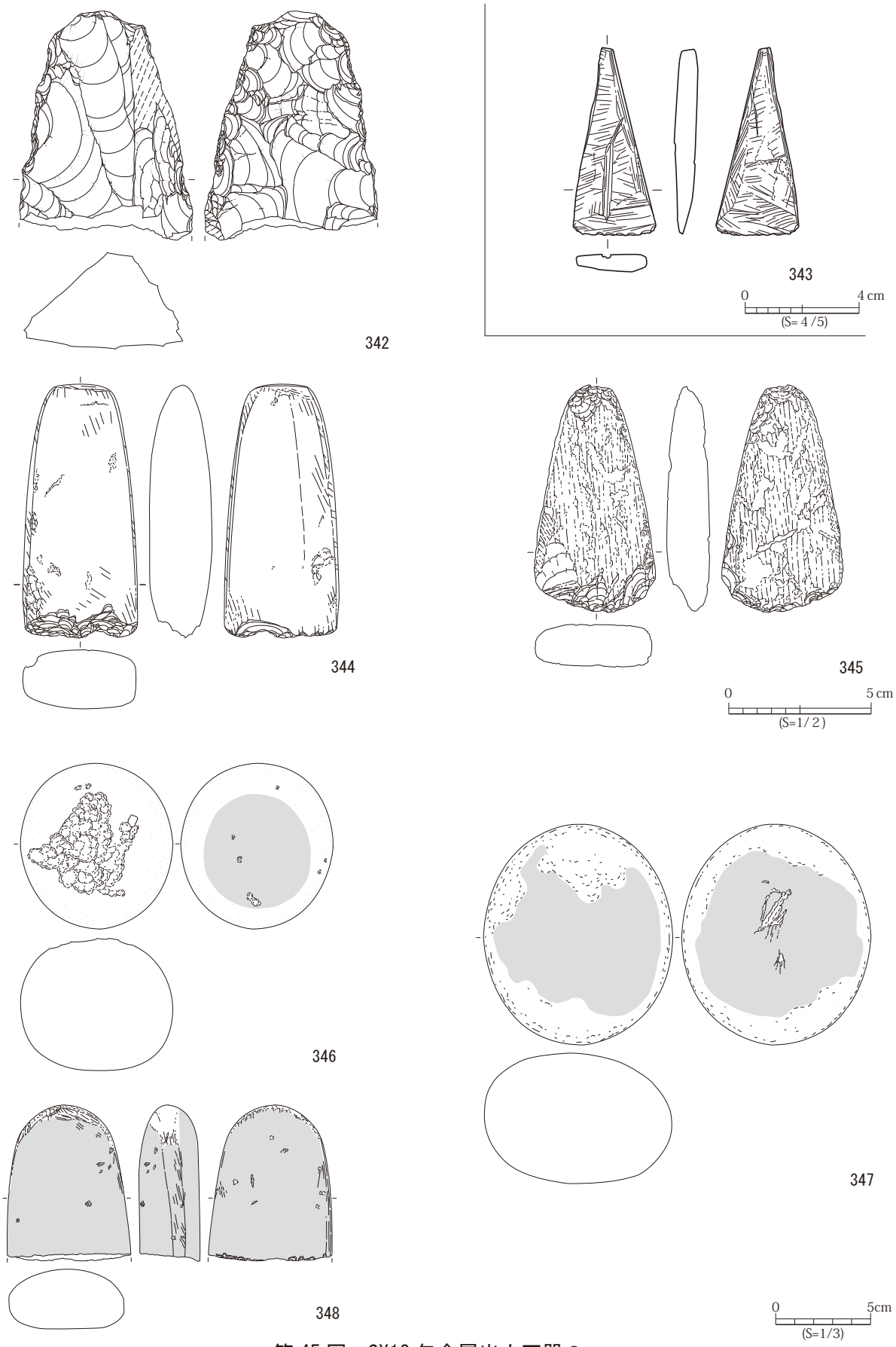


第 42 図　SX13 包含層出土石器３

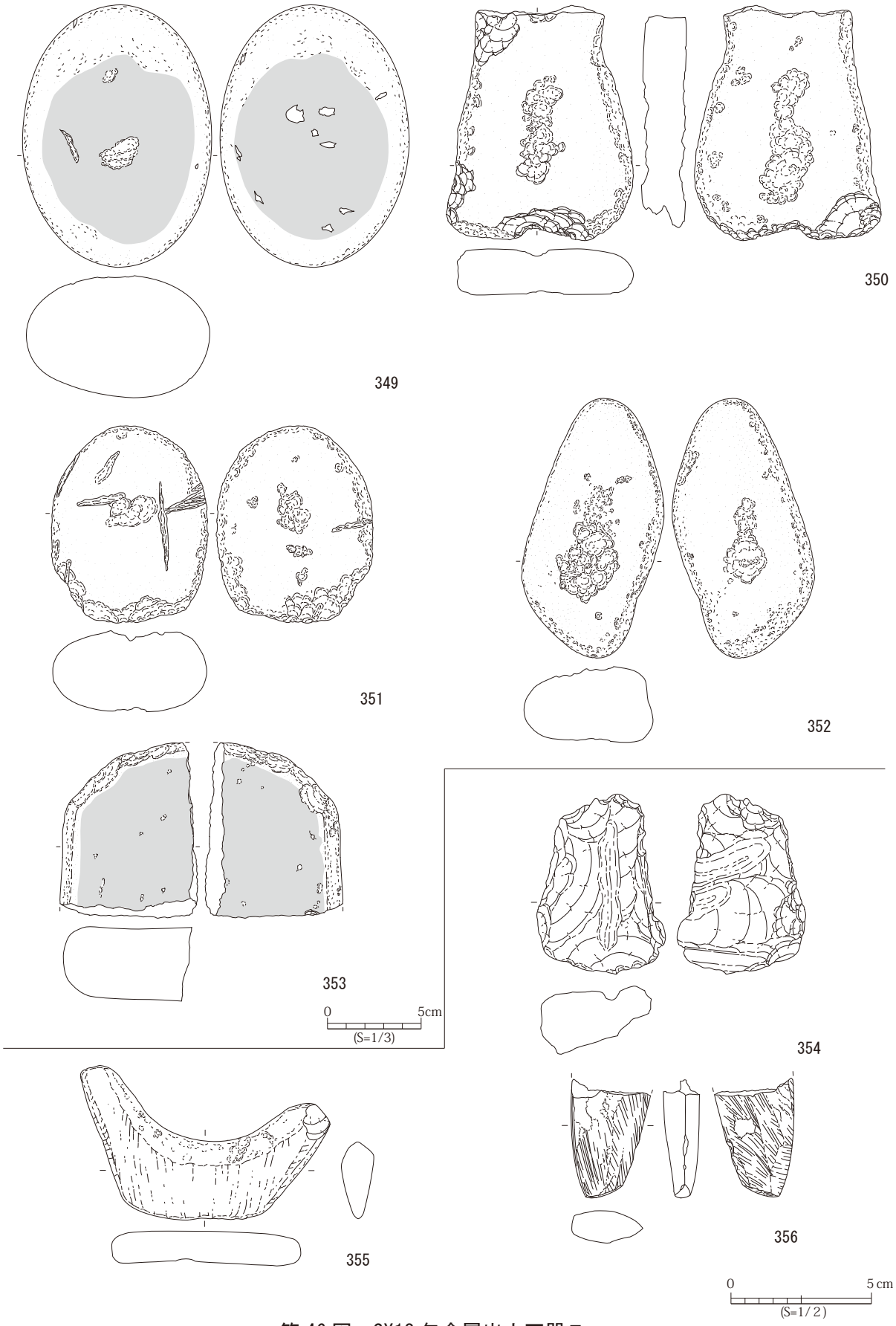


第 43 図　SX13 包含層出土石器 4

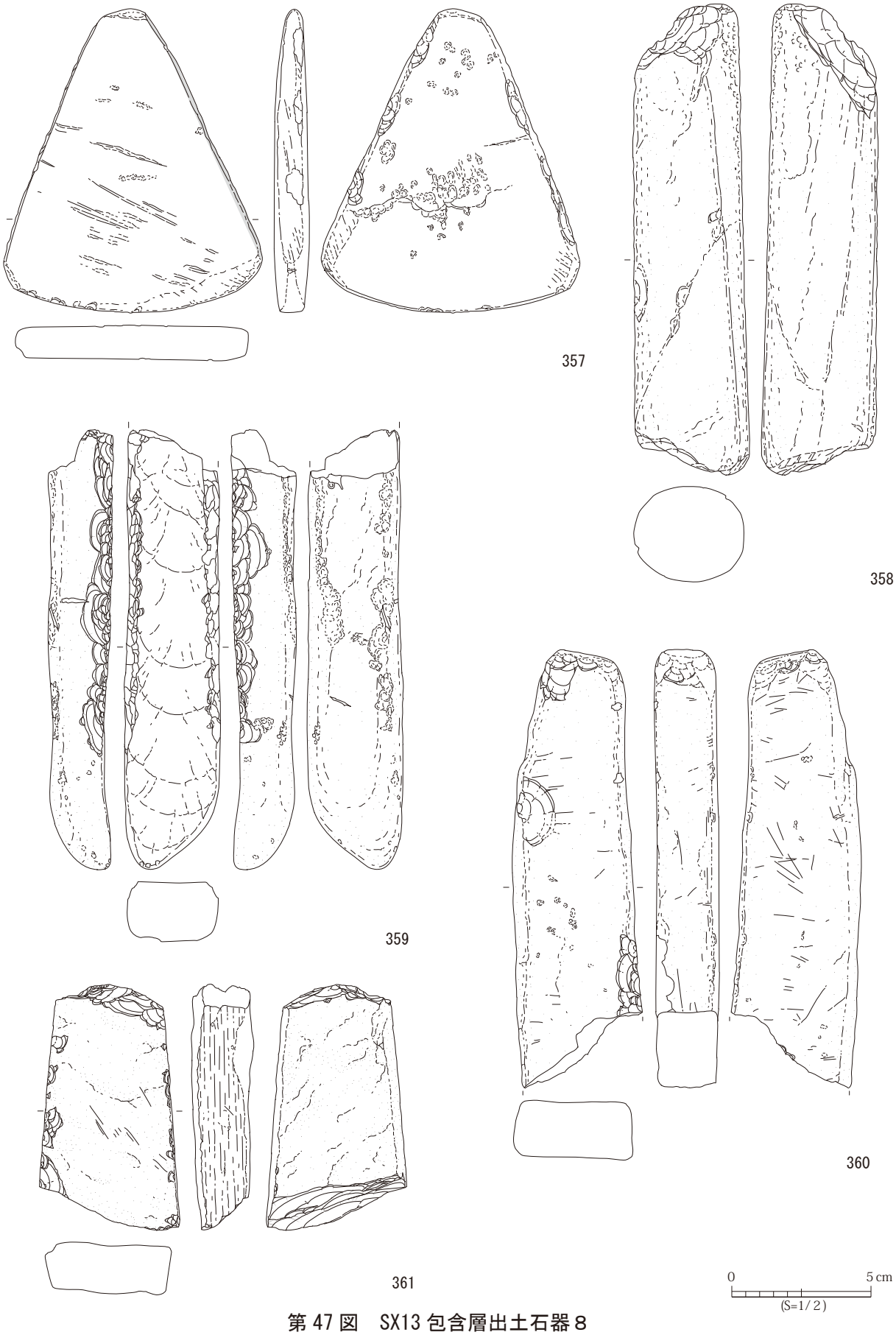
第 44 図　SX13 包含層出土石器５



第 45 図　SX13 包含層出土石器６



第 46 図　SX13 包含層出土石器 7



第 47 図　SX13 包含層出土石器８

第６表　石器一覧表

No.	挿　図	器　種	類型	出土地点	石　材	遺存度	法　量				備　考
							長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
273	第 38 図	石鏃	a	SI08（貼床）	メノウ	両脚欠	(14.0)	(11.1)	3.4	(0.4)	
274	第 38 図	石鏃	a	SB41-P9	珪質凝灰岩	左脚欠	(23.5)	(12.2)	3.5	(0.6)	
275	第 38 図	石鏃	c	SI08（貼床）	珪質凝灰岩	ほぼ完	19.4	12.9	6.1	(1.0)	
276	第 38 図	石鏃	－	SK38	珪質凝灰岩	—	(32.1)	23.1	7.7	(4.7)	未製品
277	第 38 図	石鏃	－	SB41-P11	メノウ	—	30.9	20.6	9.5	4.7	未製品
278	第 38 図	石錐	a	SI08（貼床）	珪質凝灰岩	先端欠	21.6	9.8	4.5	(0.8)	
279	第 38 図	石錐	a	P661	黒曜石	—	(24.9)	26.3	8.3	(3.2)	尖頭器転用
280	第 38 図	石匙	a	SK20	珪質凝灰岩	つまみ部欠	(59.6)	23.0	7.4	(7.6)	
281	第 38 図	石篦	－	SK74	凝灰質砂岩	完	62.6	37.2	10.4	31.2	
282	第 38 図	楔形石器	－	SK62	珪質凝灰岩	ほぼ完	29.3	22.0	5.6	4.6	
283	第 38 図	楔形石器	－	SK39	珪質凝灰岩	一部残	25.6	(18.6)	9.8	(4.7)	
284	第 38 図	不定形石器	b	SK34	珪質凝灰岩	—	29.5	20.5	4.4	2.5	
285	第 39 図	打製石斧	－	SX55	シルト岩	完	54.0	34.7	14.6	25.3	
286	第 39 図	打製石斧	－	経塚	砂岩	完	130.5	67.5	37.0	465.0	
287	第 39 図	磨石	c	P693	凝灰質砂岩	完	65.6	62.3	61.9	360.0	
288	第 39 図	磨石	b	P708	泥岩	完	98.8	76.2	41.6	480.0	
289	第 39 図	磨石	b	SK65	凝灰質砂岩	完	83.8	81.8	49.1	490.0	
290	第 39 図	石棒	－	P823	凝灰質砂岩	一部残	(52.1)	47.3	32.8	(142.3)	
291	第 39 図	石製円板	－	P720	珪質砂岩	完	47.2	46.4	8.9	24.3	
292	第 39 図	石製円板	－	P818	凝灰岩	完	48.3	49.1	11.7	44.7	
293	第 40 図	石鏃	a	SX13	珪質凝灰岩	左脚欠	17.4	12.4	3.0	(0.4)	
294	第 40 図	石鏃	a	SX13	珪質凝灰岩	右脚欠	19.2	14.3	3.0	(0.5)	アスファルト付着？
295	第 40 図	石鏃	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	完	17.8	13.9	3.4	0.5	
296	第 40 図	石鏃	a	SX13 中層	メノウ	両脚端欠	(24.2)	(17.2)	5.9	(1.5)	
297	第 40 図	石鏃	a	SX13	メノウ	右脚欠	(25.2)	(13.1)	2.8	(0.5)	
298	第 40 図	石鏃	a	SX13 上層	珪質凝灰岩	上半欠	(13.8)	12.2	3.4	(0.4)	
299	第 40 図	石鏃	a	SX13 上層	珪質凝灰岩	完	23.8	13.6	3.2	0.8	アスファルト付着？
300	第 40 図	石鏃	a	遺構保存地区	珪質凝灰岩	完	28.3	16.3	3.3	1.1	
301	第 40 図	石鏃	b	SX13	黒曜石	完？	13.5	13.8	4.7	0.7	未製品？
302	第 40 図	石鏃	b	SX13 上層	珪質凝灰岩	先端欠	(21.2)	13.4	5.1	(1.4)	
303	第 40 図	石鏃	c	SX13	珪質凝灰岩	完	18.0	14.1	3.0	0.4	
304	第 40 図	石鏃	c	SX13 上層	珪質凝灰岩	右 1/3 欠	(20.5)	19.1	4.2	(1.0)	
305	第 40 図	石鏃	c	SX13	珪質凝灰岩	完	21.3	10.1	6.0	0.9	
306	第 40 図	石鏃	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	完	21.8	17.4	3.6	0.9	未製品
307	第 40 図	尖頭器	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	—	48.1	29.1	10.8	10.9	未製品？
308	第 40 図	石錐	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	—	34.9	32.8	12.6	8.9	
309	第 40 図	石錐	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	完	28.1	12.6	4.2	1.3	石鏃転用？
310	第 40 図	石錐	b	SX13 上層	珪質凝灰岩	先端欠	(21.9)	14.6	5.5	(1.2)	
311	第 40 図	石篦	－	SX13 上層	泥岩	ほぼ完	41.5	28.4	12.2	13.7	
312	第 40 図	石篦	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	ほぼ完	58.2	28.8	12.8	16.7	
313	第 41 図	石匙	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	先端欠？	(55.5)	15.5	9.5	(7.6)	
314	第 41 図	石匙	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	先端欠	(58.7)	21.9	11.3	(13.1)	
315	第 41 図	石匙	b	SX13	珪質凝灰岩	基部欠	36.9	48.3	10.1	(9.8)	
316	第 41 図	楔形石器	－	SX13 中層	—	—	22.8	27.2	9.9	4.7	
317	第 41 図	楔形石器	－	SX13 上層	黒曜石	ほぼ完	19.2	16.1	6.7	1.7	
318	第 41 図	楔形石器	－	SX13 上層	—	ほぼ完	25.9	22.5	10.5	6.3	
319	第 41 図	楔形石器	－	SX13 中層	—	ほぼ完	31.4	33.3	9.8	8.5	
320	第 41 図	抉り入り石器	－	SX13 上層	珪質凝灰岩	—	44.2	40.5	8.5	10.4	
321	第 41 図	不定形石器	a	SX13 下層	珪質凝灰岩	一部欠	19.6	(23.6)	5.0	(1.8)	
322	第 41 図	不定形石器	a	SX13 下層	泥岩	一部残	(40.2)	40.6	12.3	(20.3)	
323	第 41 図	不定形石器	a	SX13	珪質凝灰岩	ほぼ完？	43.9	27.7	11.8	12.5	
324	第 42 図	不定形石器	c	SX13 中層	珪質凝灰岩	完	71.3	69.3	19.2	80.9	
325	第 42 図	不定形石器	b	SX13 中層	珪質凝灰岩	—	22.1	25.2	5.9	3.1	
326	第 42 図	不定形石器	c	SX13 上層	—	完	59.1	43.7	24.0	54.8	
327	第 42 図	不定形石器	b	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部欠	(61.6)	26.5	15.3	(19.9)	
328	第 42 図	不定形石器	b	SX13 上層	泥岩	一部残？	47.9	(14.8)	12.7	(116.9)	
329	第 43 図	不定形石器	d	SX13 中層	ホルンフェルス	—	69.7	75.1	24.9	139.6	
330	第 43 図	不定形石器	d	SX13	凝灰質砂岩	—	115.5	103.4	47.3	670.0	
331	第 43 図	石製円板	－	SX13 中層	凝灰質砂岩	完	40.4	40.3	8.1	21.1	
332	第 43 図	石製円板	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	53.3	54.5	12.7	63.0	
333	第 43 図	石製円板	－	SX13 中層	凝灰質砂岩	完	52.9	48.4	10.9	31.4	
334	第 43 図	石製円板	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	50.9	49.3	15.7	58.4	
335	第 43 図	石製円板	－	SX13 下層	凝灰質砂岩	完	53.3	47.6	10.5	35.3	
336	第 44 図	打製石斧	－	SX13 中層	珪質砂岩	完	65.0	33.8	10.8	28.1	
337	第 44 図	打製石斧	－	SX13 中層	シルト岩	完	69.5	40.2	12.0	44.5	
338	第 44 図	打製石斧	－	SX13 中層	玄武岩	完	110.7	50.8	27.5	188.2	
339	第 44 図	打製石斧	－	SX13 上層	凝灰岩	完	116.1	58.6	29.3	251.3	
340	第 44 図	打製石斧	－	SX13 上層	安山岩	完	120.8	54.5	31.2	315.0	凹石転用
341	第 44 図	打製石斧	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	143.6	57.6	34.6	231.1	
342	第 45 図	打製石斧	－	SX13 上層	泥岩	基部残	(80.9)	60.9	38.6	(167.4)	
343	第 45 図	磨製石斧	－	SX13 上層	泥岩	ほぼ完	41.4	18.2	5.4	3.4	
344	第 45 図	磨製石斧	－	SX13 中層	緑色岩	刃部一部欠	89.1	40.5	22.9	152.3	

No.	挿　図	器　種	類型	出土地点	石　材	遺存度	法　量				備　考
							長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
345	第 45 図	磨製石斧	－	SX13 上層	溶結凝灰岩	ほぼ完	79.9	42.9	15.0	81.7	
346	第 45 図	敲石	－	SK37	凝灰質砂岩	完	87.8	80.6	71.3	675.0	
347	第 45 図	磨石	b	SX13 中層	凝灰質砂岩	完	117.1	100.5	69.2	1180.0	
348	第 45 図	磨石	a	SX13 上層	砂岩	一部残	(82.5)	65.1	32.4	(282.9)	
349	第 46 図	凹石	－	SX13 中層	花崗岩質砂岩	完	140.6	101.4	66.6	1330.0	磨石→凹石
350	第 46 図	凹石	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	一部欠	(125.6)	100.5	25.6	(385.0)	
351	第 46 図	凹石	－	SX13 上層	玄武岩	完	105.4	84.2	44.1	350.0	
352	第 46 図	凹石	－	SX13 上層	凝灰質砂岩？安山岩？	完	139.2	76.4	42.3	545.0	
353	第 46 図	石皿	－	SX13 中層	砂岩	1/4 残	(93.8)	(73.8)	41.6	(430.0)	
354	第 46 図	砥石	－	SX13 上層	凝灰岩	—	64.2	46.1	30.1	49.4	
355	第 46 図	コの字形石製品	－	SX13	凝灰質砂岩	ほぼ完？	55.1	89.1	15.3	50.9	
356	第 46 図	石刀	－	SX13	泥岩	一部残	(42.3)	28.6	13.1	(14.6)	
357	第 47 図	撥型石製品	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	109.4	93.1	12.9	129.2	
358	第 47 図	石棒	－	B 区表土	ホルンフェルス？	両端欠	(169.8)	42.1	35.1	(410.0)	
359	第 47 図	棒状石製品	－	SX13 中層	粘板岩	一部残？	(158.1)	34.8	23.3	(209.7)	
360	第 47 図	棒状石製品	－	SX13 上層	泥岩	一部残？	(157.8)	47.2	22.8	(305.0)	
361	第 47 図	棒状石製品	－	SX13 中層	泥岩	一部残？	(88.4)	50.8	22.6	(158.9)	
		石鏃	a	SX13 上層	珪質凝灰岩	完	12.4	14.1	2.2	0.2	
		石鏃	a	P857	黒曜石	左脚欠	16.6	(13.5)	4.9	(0.9)	未製品？
		石鏃	a	SX13 排土	珪質凝灰岩	完	20.5	16.0	3.8	0.7	
		石鏃	a ？	SX13 上層	珪質凝灰岩	脚部欠	(20.6)	(17.1)	7.0	(2.0)	未製品
		石鏃	b	SK24 付近	珪質凝灰岩	完	28.1	19.3	6.5	2.8	未製品？
		石鏃	b	SX13 中層	珪質凝灰岩	完	27.1	17.4	5.6	2.3	未製品？
		石鏃	b	B 区表土	珪質凝灰岩	完	22.0	13.5	3.2	0.9	
		石鏃	b ？	SD15	珪質凝灰岩	1/2 欠	18.3	(12.9)	3.0	(0.7)	未製品？
		石鏃	c	SE60 付近	珪質凝灰岩	完	16.7	12.9	3.7	0.5	
		石鏃	c	SX13	珪質凝灰岩	舌先端欠	(17.2)	11.1	2.4	(0.4)	
		石鏃	c	B 区表採	珪質凝灰岩	先端欠	(17.9)	13.0	4.3	(1.0)	
		石鏃	c	B 区表採	メノウ	1/2	26.9	(16.6)	6.5	(2.7)	未製品？
		石鏃	－	D 区	黒曜石	脚部欠	(13.5)	10.1	4.8	0.5	未製品
		石鏃	？	B 区	メノウ	一部残	22.7	(13.3)	5.4	(1.5)	未製品？
		尖頭器	－	SK19 付近	珪質凝灰岩	ほぼ完	34.6	(26.3)	7.2	(7.1)	
		尖頭器	－	SX13 上層	珪質凝灰岩	一部欠損	41.1	(24.7)	7.4	(6.6)	
		石錐	a	B 区	珪質凝灰岩	一部欠	29.6	(21.1)	8.1	4.7	
		楔形石器	－	SX13 上層	珪質凝灰岩	一部欠	(38.0)	(36.8)	10.1	(11.2)	
		楔形石器	－	B 区排土	珪質凝灰岩	—	27.4	28.5	10.8	8.6	
		楔形石器	－	表採	珪質凝灰岩	一部欠	29.8	(35.4)	14.1	(17.7)	
		楔形石器	－	一括	珪質凝灰岩？	一部欠	(26.3)	25.1	5.2	4.0	
		楔形石器	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部欠	(23.9)	(20.0)	13.0	(6.8)	
		楔形石器	－	SX13 上層	メノウ	一部残	(24.5)	(14.4)	6.7	(2.6)	
		楔形石器	－	SX13 上層	—	一部残	(25.3)	(14.6)	8.0	(3.7)	
		楔形石器	－	一括	珪質凝灰岩	一部欠	25.8	(21.4)	10.8	(6.1)	
		楔形石器	－	SX13 中層	—	一部欠	29.3	(23.0)	10.1	(6.6)	
		楔形石器	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部欠？	29.6	(31.2)	13.3	(13.0)	
		楔形石器	－	SX13	珪質凝灰岩	一部欠	(19.5)	12.7	7.5	(2.1)	
		楔形石器	－	B 区カクラン	メノウ	一部欠	26.1	(20.1)	11.6	(6.8)	
		楔形石器	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部欠	(23.4)	31.8	11.4	(6.4)	
		楔形石器	－	SK21	凝灰岩？	一部欠	18.3	(23.1)	4.9	(2.4)	
		不定形石器	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部残	(23.6)	37.4	12.2	(9.9)	
		不定形石器	a	SX13 上層	珪質凝灰岩	ほぼ完	31.0	46.9	12.1	11.9	
		不定形石器	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部欠	30.6	(23.5)	2.5	(1.5)	
		不定形石器	a	SX13	珪質凝灰岩	一部欠	20.4	(15.2)	5.3	(1.7)	
		不定形石器	a	SX13 中層	珪質凝灰岩	ほぼ完	36.0	20.2	9.2	7.2	
		不定形石器	a	SX13	珪質凝灰岩	一部欠	18.6	(15.0)	3.8	(0.7)	
		不定形石器	a	SX13 上層	珪質凝灰岩	ほぼ完	24.4	22.1	6.1	3.1	
		不定形石器	b	B 区表土	珪質凝灰岩	ほぼ完	41.0	32.6	11.8	10.4	
		不定形石器	b	B 区排土	珪質凝灰岩	ほぼ完	29.5	28.1	6.6	6.3	
		不定形石器	b	SX13 上層	珪質凝灰岩	—	(35.2)	(29.0)	9.4	(8.8)	
		不定形石器	b	一括	珪質凝灰岩	一部残	16.0	(25.2)	2.0	(0.7)	
		不定形石器	b	SX13 上層	珪質凝灰岩	一部欠	(42.0)	31.0	11.7	(14.2)	
		石製円板	－	SK27	凝灰質砂岩	1/2 残	20.8	(33.6)	7.5	(15.3)	
		石製円板	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	1/2 残	40.6	(39.1)	6.9	(12.4)	
		石製円板	－	SK76	凝灰質砂岩	1/2 残	38.6	(37.3)	7.4	(12.2)	
		石製円板	－	SX13	凝灰質砂岩	1/2 残	42.5	(41.2)	5.2	(9.9)	
		剝片	－	B 区表採	珪質凝灰岩	一部欠	(18.8)	24.1	7.9	(3.1)	
		剝片	－	B 区表土	珪質凝灰岩	一部欠	(41.4)	(36.6)	10.1	(12.4)	
		剝片	－	SX13 上層	珪質凝灰岩	一部欠	36.1	(21.3)	6.8	(5.8)	
		剝片	－	SX13 上層	珪質凝灰岩	一部欠	(22.4)	23.6	7.0	(4.1)	
		剝片	－	SX13 上層	メノウ	一部欠	41.7	(24.6)	11.1	(7.7)	
		剝片	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	—	47.0	40.0	11.8	19.4	
		剝片	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部欠	22.2	(22.6)	9.1	(3.0)	
		剝片	－	SK21 付近	黒曜石	—	29.1	24.5	10.0	3.8	
		剝片	－	B 区表土	珪質凝灰岩	—	(29.0)	(36.4)	8.0	(8.0)	
		剝片	－	B 区イカク	珪質凝灰岩	—	38.9	(45.4)	8.0	(13.3)	摩滅有り

No.	挿　図	器　種	類型	出土地点	石　材	遺存度	法　量				備　考
							長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
		剥片	－	SX13 中層	珪質凝灰岩	一部欠	53.0	(43.6)	4.7	(8.0)	
		剝片	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	ほぼ完	55.5	41.0	12.8	27.6	
		剥片	－	SK80	凝灰質砂岩	ほぼ完	50.0	91.3	18.4	57.0	
		剥片	－	B 区排土	珪質凝灰岩	ほぼ完	19.5	21.1	6.7	2.3	
		剥片	－	SX13 下層	珪質凝灰岩	一部欠	28.2	(20.5)	6.3	(4.6)	
		剥片	－	SX13 上層	珪質凝灰岩	一部残	(36.4)	(38.3)	9.9	(10.8)	
		剥片	－	C 区表土	凝灰岩	—	25.7	39.8	11.2	10.1	
		剥片	－	SX13 上層	泥岩	ほぼ完	89.5	64.9	12.5	116.9	
		剥片	－	SX13	粘板岩	完	91.1	43.2	10.4	53.7	
		打製石斧	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	81.3	43.2	20.3	101.5	
		打製石斧	－	SX13 上層	凝灰岩？	完	58.8	31.7	14.3	29.1	
		打製石斧	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	73.8	46.2	18.9	80.7	
		打製石斧	－	SX13 下層	凝灰質砂岩	完	52.8	41.4	8.4	25.0	磨石転用？
		打製石斧	－	SX13 上層	凝灰岩	一部残	(44.2)	58.7	17.4	(62.1)	
		打製石斧	－	B 区表土	凝灰岩	完	92.2	45.6	14.7	71.2	
		打製石斧	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	一部残	(91.1)	93.3	32.7	(370.0)	
		磨製石斧	－	SX13 上層	安山岩	刃部欠	(82.9)	37.4	21.4	(102.7)	
		磨製石斧	－	SX13 上層	泥岩	刃部欠	(87.0)	42.7	19.8	(115.5)	
		磨石	a	C 区表採	砂岩	一部欠	143.8	115.1	63.5	(1480.0)	
		磨石	b	SX13 表土	砂岩	一部欠	(103.4)	67.0	43.5	(480.0)	石製品か？
		磨石	b	SX13 上層	凝灰質砂岩	一部欠	(76.5)	84.1	66.5	(660.0)	
		磨石	b	SX13	凝灰質砂岩	ほぼ完	114.1	83.3	57.9	820.0	
		磨石	b	SX13	凝灰質砂岩	完	104.4	100.2	74.8	1250.0	
		磨石	b	SX13	凝灰質砂岩	完	97.1	82.2	63.1	730.0	
		磨石	b	SX13 中層	石英斑岩	1/2	(80.5)	88.5	67.8	(600.0)	
		磨石	b	SX13	凝灰質砂岩	完	109.9	91.3	54.0	825.0	
		磨石	b	SX13	凝灰質砂岩	完	77.1	63.4	28.7	233.1	
		磨石？	b	SX13	ホルンフェルス？	一部残	(77.4)	51.8	31.7	(207.1)	
		磨石	d	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	83.5	71.9	44.3	430.0	
		磨石	d	SX13 上層	凝灰質砂岩	完	68.2	56.3	51.6	279.5	
		磨石	d	SX13	凝灰質砂岩	1/2 残？	(1603.0)	90.3	930.0	(2220.0)	
		磨石	d	SX13 上層	軽石	—	—	—	—	17.4	
		磨石	d	SX13 中層	軽石	—	—	—	—	35.6	
		凹石	－	C 区	凝灰質砂岩	—	(128.9)	(78.7)	42.6	(430.0)	
		凹石？	－	SX13	凝灰質砂岩	—	(66.2)	70.1	39.3	(210.9)	
		凹石	－	SX13 上層	泥岩	一部残	(102.1)	39.9	23.8	(159.2)	
		凹石	－	SX13 中層	砂岩	—	(124.9)	57.2	35.7	(340.0)	
		石皿	－	SX13 上層	凝灰質砂岩	一部残	(1735.0)	(1590.0)	(46.5)	(960.0)	
		石皿	－	SX13	凝灰質砂岩	一部残	(1020.0)	(1220.0)	(64.2)	(850.0)	
		石皿	－	SX13	凝灰質砂岩	一部残	(1600.0)	(1040.0)	50.8	(1340.0)	
		石皿	－	表採	砂岩	一部残	(88.7)	(1540.0)	620.0	(1070.0)	
		砥石	－	SX13 上層	粘板岩	一部残	(42.4)	(42.0)	(6.3)	(11.8)	古代？
		石核？	－	SK35	珪質凝灰岩	—	68.8	53.7	21.3	82.1	
		自然礫	－	SX13 上層	軽石	—	—	—	—	5.1	
		自然礫	－	SX13 カクラン	軽石	—	—	—	—	10.2	
		自然礫	－	SX13 中層	軽石	—	—	—	—	12.3	
		自然礫	－	一括	軽石	—	—	—	—	46.6	
		石棒	－	SX13	粘板岩	一部残	(112.9)	32.3	26.2	(143.0)	
		棒状石製品	－	SX13 上層	泥岩	一部残	(66.6)	34.8	(7.2)	(28.8)	
		棒状石製品	－	SX55 上層	粘板岩	一部残	(220.1)	4.5	(22.7)	(310.0)	
		棒状石製品	－	SX13 中層	ホルンフェルス？	一部残	(50.5)	31.8	7.6	(21.6)	
		棒状石製品	－	SX13	粘板岩	一部残	(97.4)	40.1	19.2	(83.8)	
		コの字形石製品	－	SX13	凝灰質砂岩	ほぼ完	93.6	180.0	38.8	380.0	

（5）古銭・金属製品（362 ～ 482、写真図版 28・29）

今回出土した古銭は、123 点である。このうち 1 点は、Ｂ区の SA54 の柵列内のピットから出土したもので、それ以外の 122 点は経塚からの出土である。

内訳は、渡来銭の元豊通寶（宋銭、篆書体、始鋳 1078 年）1 点、永楽通寶（明銭、真書体、始鋳 1408 年）1 点、古寛永通寶 96 点、新寛永通寶（文銭）23 点、寛永通寶（新古の判読不明）2 点であり、元禄 10(1697) 年に鋳造が始まる無背の新寛永通寶はまったく出土していない。

第７表　古銭計測値比較

	古寛永	文　銭
外縁外径平均値 (cm)	2.46	2.54
外縁内径平均値 (cm)	1.97	2.03
内郭外径平均値 (cm)	0.70	0.71
内郭内径平均値 (cm)	0.56	0.58
縁厚平均値　(cm)	0.12	0.13
重量平均　(g)	3.02	3.10
縁幅比平均	0.12	0.13
孔径比平均	0.29	0.29

（破片は平均値に含まれない）

古寛永と文銭を（点数の多寡を考慮せず）比較すると、外径、内径、縁厚、重量の平均値は、心持ち文銭の方が大きな値を示した。

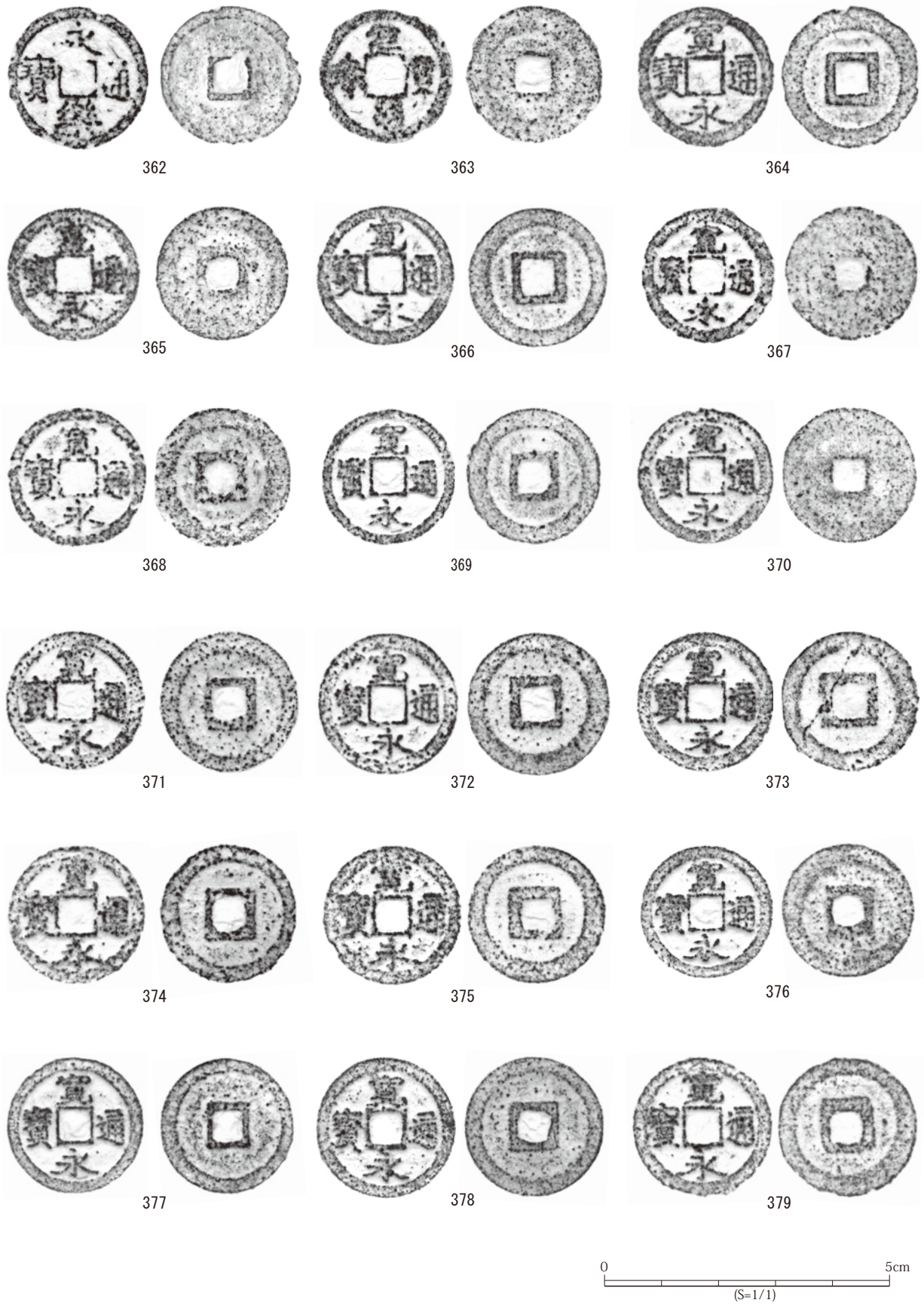
古寛永は鋳造地が多く、仙台で鋳造されたものは一般的に仙台銭と呼ばれている。今回、字体などにより一部分類ができる余地があったが、敢えて行っていない。

金属製品は、大半が SI08 から出土している。468 ～ 470 は銅製品で、468 は煙管の雁首で、火皿と脂返しとの接合部に補強帯を持ち、肩付きであることから、小泉編年のⅡ段階（17 世紀後半頃）と言える。この他、SB10 付近からもう 1 点出土しているが、バラバラに割れているため、図化はできなかった。火皿と脂返しとの接合部に補強帯を持ち、脂返しは 1 本作りで肩が付かないタイプで、小泉編年のⅢ段階（18 世紀前半頃）に相当するものである。469・470 は製品の破片であるが、不明である。469 はもしかしたら刀子状の柄の可能性がある。

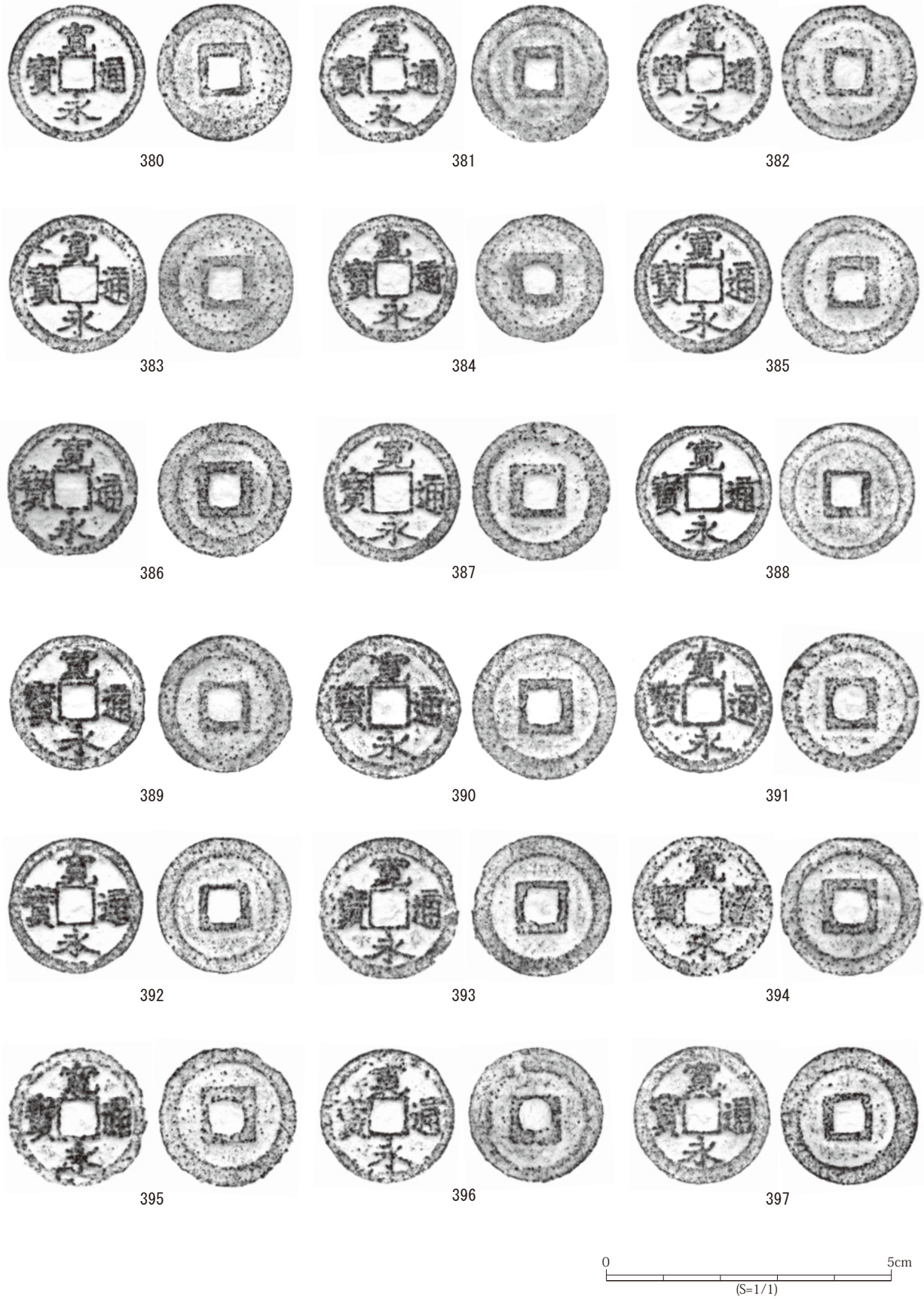
鉄製の釘は、13 点が出土し 12 点を図化した。大半が小形の釘で、SI08 の建物に使用されたものと考えているが、481・482 は掘り方から出土している。

第８表　金属製品一覧表

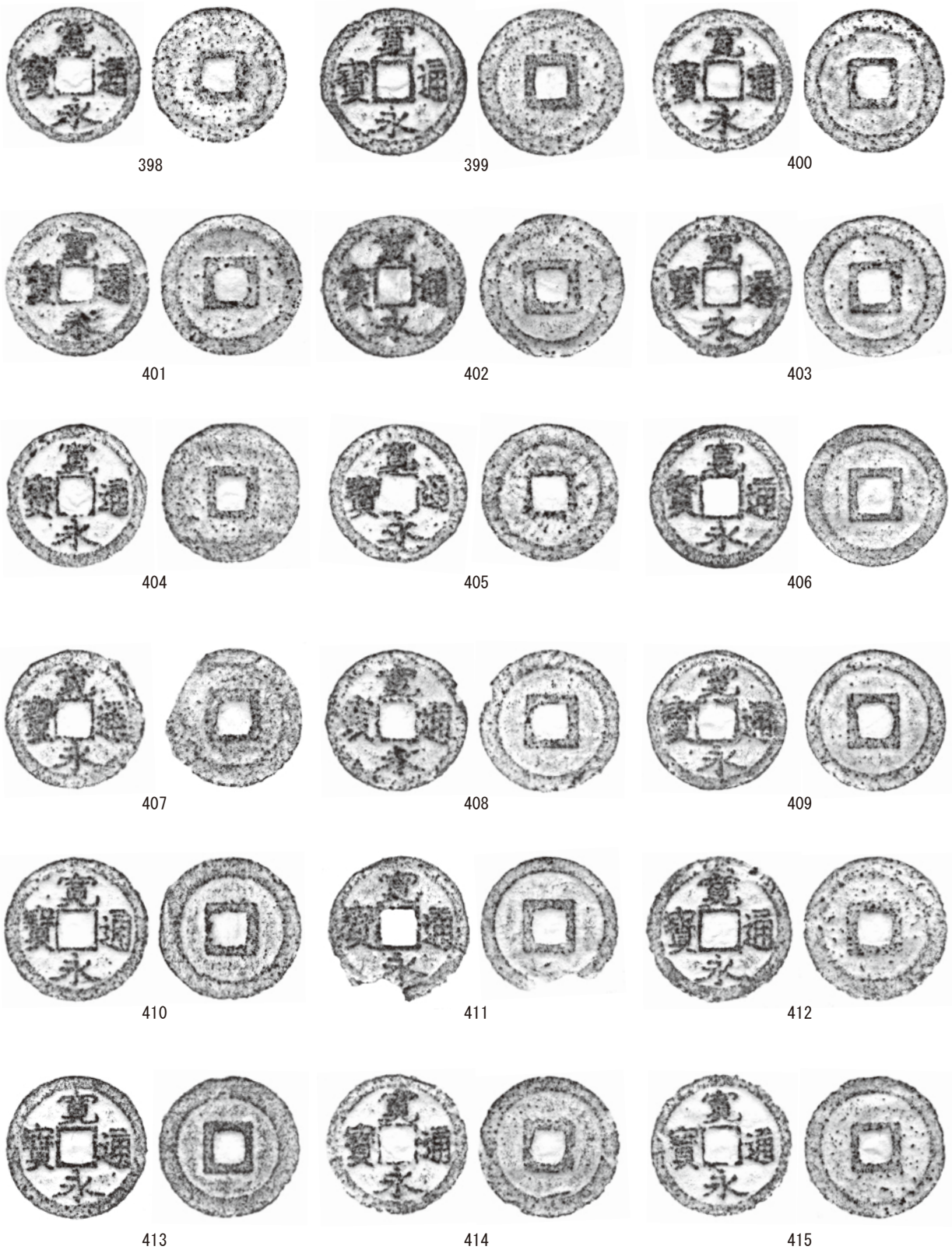
No.	材　質	種　類	出土遺構	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　考
468	青銅	煙管雁首	SI08 掘り方	(2.0)	(2.2)	-	(4.1)	肩部径 0.9cm
469	青銅	柄？	SI08 掘り方	(5.5)	(1.7)	(0.1)	(4.1)	孔 0.15cm
470	青銅	金具	SI08 上層	(2.0)	(0.9)	(0.3)	(1.0)	釘 0.3cm
471	鉄	釘	SI08 上層	(3.9)	0.5	0.4	(1.9)	
472	鉄	釘	SI08 上層	4.2	0.9	0.6	1.7	
473	鉄	釘	SI08 上層	(4.3)	1.4	0.8	(5.3)	
474	鉄	釘	SI08 上層	(5.4)	0.5	0.5	(4.6)	
475	鉄	釘	SI08 上層	(3.7)	0.7	0.7	(2.3)	
476	鉄	釘	SI08 上層	(1.8)	0.5	0.5	(2.4)	
477	鉄	釘	SI08 上層	(2.7)	0.6	0.5	(1.1)	
478	鉄	釘	SI08 上層	(1.9)	0.7	0.5	(0.6)	
479	鉄	釘	SI08 上層	(2.6)	0.9	0.7	(2.2)	
480	鉄	釘	SI08 上層	(3.3)	0.7	0.6	(3.3)	
481	鉄	釘	SI08 掘り方	(3.8)	0.5	0.6	(2.3)	
482	鉄	釘	SI08 掘り方	(3.0)	1.0	0.6	(1.6)	


362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
0
5cm
(S=1/1)

第 48 図　古銭 1

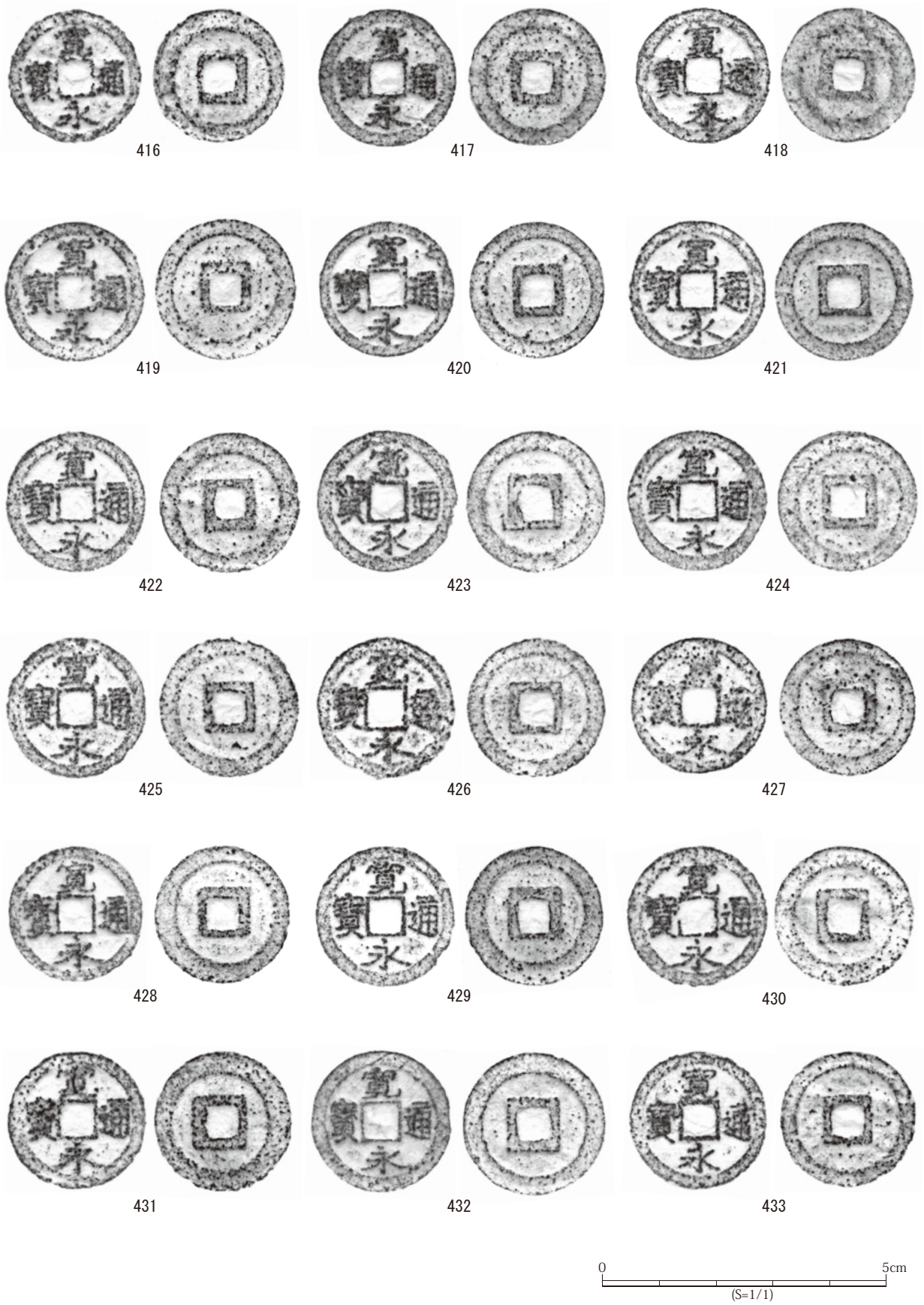

380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
0
5cm
(S=1/1)

第 49 図　古銭２

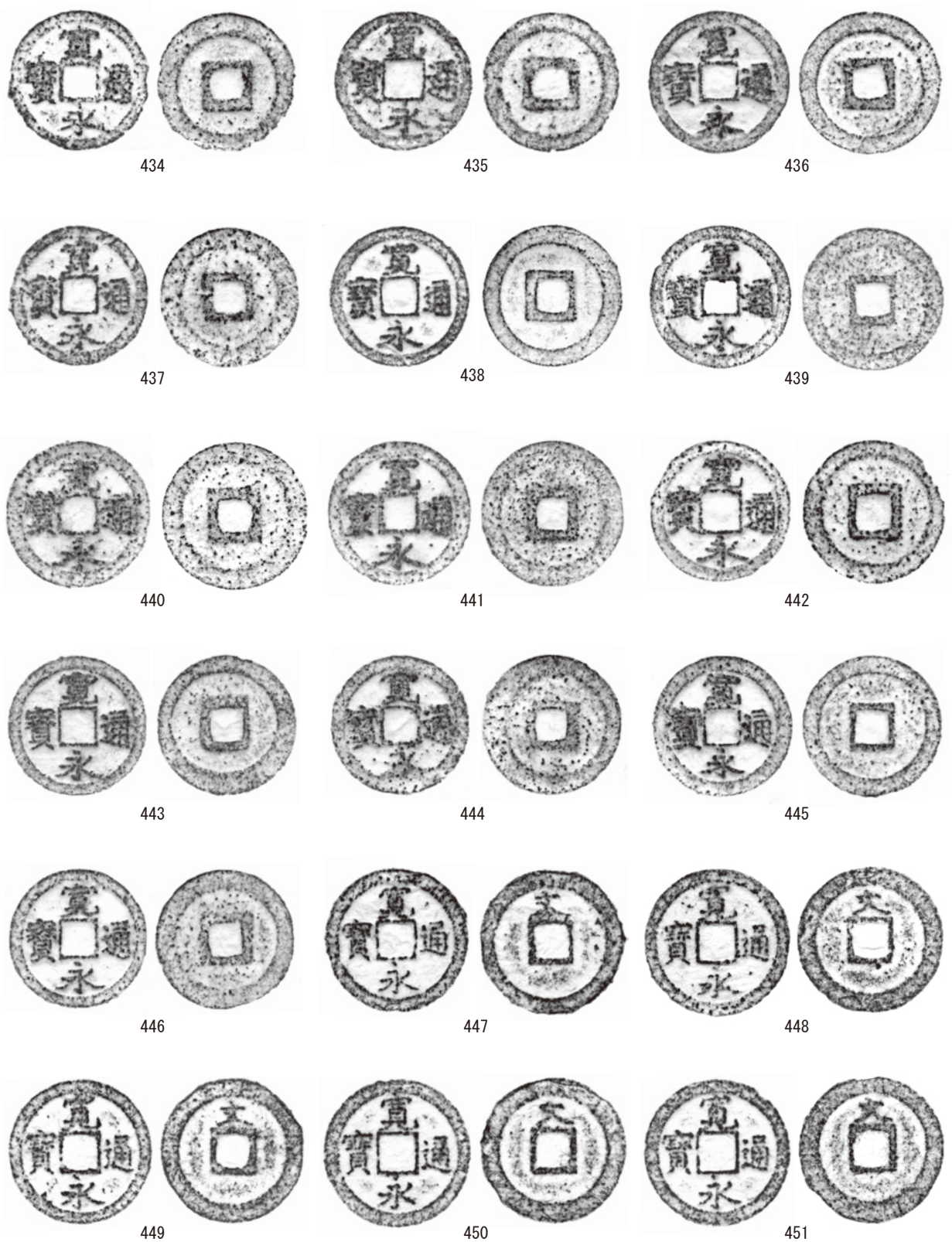


0 5cm
(S=1/1)

第50図　古銭３

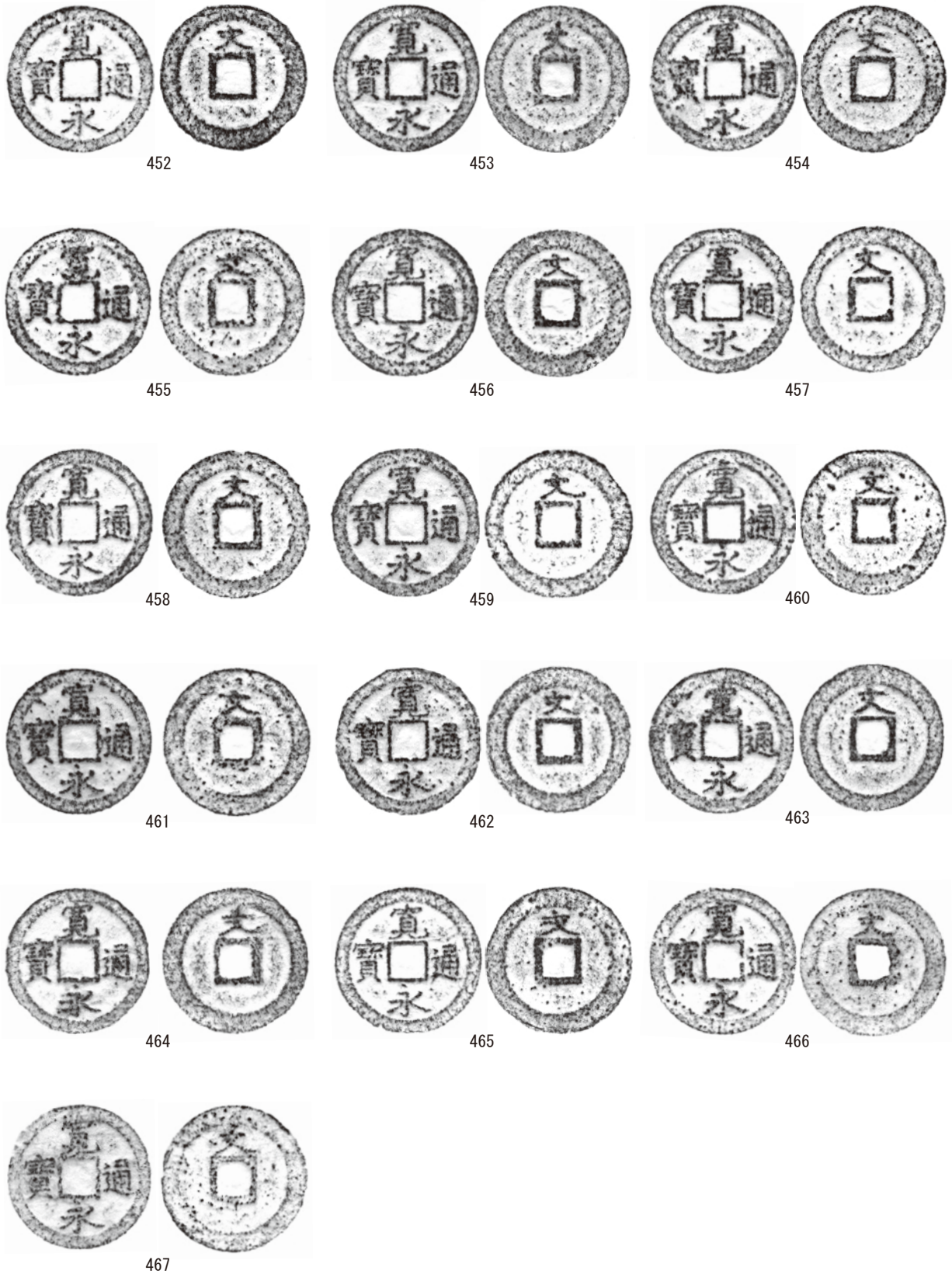

416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
0
5cm
(S=1/1)

第51図　古銭4



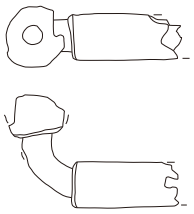
0 5cm
(S=1/1)

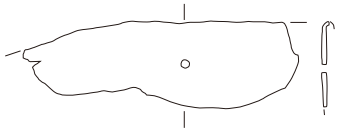
第52図　古銭５

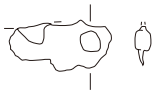


0 5cm
(S=1/1)

第53図　古銭6


468


469


470

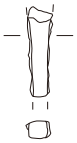
471

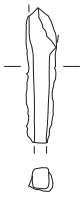
472

473

474

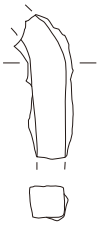
475


476

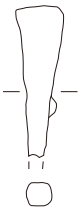

477

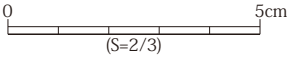
478

479


480

481


482



第 54 図　金属製品

第９表　古銭一覧表

No.	出土地点	種　別	外縁外径 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	縁　厚 (cm)	重　量 (g)
362	SA54 P1	永楽通寶	2.51	2.11	0.65	0.54	0.12	2.5
363	経塚	元豊通寶	2.42	1.94	0.78	0.62	0.16	2.8
364	経塚	古寛永	2.50	1.98	0.69	0.56	0.12	3.0
365	経塚	古寛永	2.37	1.96	0.74	0.56	0.12	3.3
366	経塚	古寛永	2.48	2.00	0.76	0.60	0.11	2.5
367	経塚	古寛永	2.38	1.88	0.66	0.52	0.11	2.1
368	経塚	古寛永	2.48	2.02	0.68	0.55	0.13	2.7
369	経塚	古寛永	2.40	2.00	0.68	0.55	0.12	3.0
370	経塚	古寛永	2.40	1.89	0.67	0.57	0.10	2.1
371	経塚	古寛永	2.49	2.00	0.75	0.59	0.14	3.8
372	経塚	古寛永	2.51	1.98	0.68	0.59	0.13	3.5
373	経塚	古寛永	2.48	1.90	0.73	0.58	0.13	3.3
374	経塚	古寛永	2.47	1.99	0.76	0.58	0.14	3.0
375	経塚	古寛永	2.46	1.96	0.71	0.53	0.14	3.8
376	経塚	古寛永	2.37	1.91	0.65	0.55	0.11	2.7
377	経塚	古寛永	2.42	1.94	0.65	0.54	0.13	3.3
378	経塚	古寛永	2.48	1.99	0.71	0.55	0.13	3.6
379	経塚	古寛永	2.50	1.93	0.71	0.57	0.14	3.7
380	経塚	古寛永	2.43	2.00	0.65	0.54	0.11	2.0
381	経塚	古寛永	2.44	1.98	0.66	0.53	0.13	3.3
382	経塚	古寛永	2.42	2.01	0.68	0.58	0.12	2.2
383	経塚	古寛永	2.46	1.94	0.71	0.61	0.11	3.4
384	経塚	古寛永	2.29	1.84	0.68	0.55	0.11	2.4
385	経塚	古寛永	2.49	1.97	0.71	0.56	0.14	3.6
386	経塚	古寛永	2.40	1.97	0.73	0.54	0.13	2.9
387	経塚	古寛永	2.48	1.98	0.76	0.60	0.11	2.0
388	経塚	古寛永	2.45	2.00	0.65	0.54	0.12	2.7
389	経塚	古寛永	2.44	1.97	0.69	0.57	0.12	3.2
390	経塚	古寛永	2.58	2.00	0.72	0.60	0.12	2.9
391	経塚	古寛永	2.47	1.99	0.76	0.58	0.14	2.8
392	経塚	古寛永	2.42	1.97	0.69	0.58	0.13	4.3
393	経塚	古寛永	2.52	2.00	0.71	0.59	0.10	(2.0)
394	経塚	古寛永	2.53	2.01	0.73	0.60	0.12	2.8
395	経塚	古寛永	2.50	1.97	0.79	0.58	0.11	2.9
396	経塚	古寛永	2.40	1.97	0.69	0.54	0.11	3.0
397	経塚	古寛永	2.46	1.90	0.70	0.53	0.11	2.8
398	経塚	古寛永	2.35	1.93	0.70	0.58	0.08	(2.1)
399	経塚	古寛永	2.53	2.00	0.70	0.55	0.12	(2.5)
400	経塚	古寛永	2.46	2.01	0.69	0.55	0.13	2.6
401	経塚	古寛永	2.47	1.92	0.71	0.55	0.10	3.0
402	経塚	古寛永	2.51	2.01	0.71	0.56	0.14	3.1
403	経塚	古寛永	2.46	1.94	0.69	0.56	0.12	(3.3)
404	経塚	古寛永	2.45	1.94	0.69	0.55	0.11	(2.7)
405	経塚	古寛永	2.40	1.90	0.68	0.57	0.12	2.4
406	経塚	古寛永	2.48	1.98	0.72	0.60	0.10	2.4
407	経塚	古寛永	2.39	1.84	0.71	0.57	0.10	(2.6)
408	経塚	古寛永	2.45	2.01	0.71	0.59	0.12	(3.2)
409	経塚	古寛永	2.44	1.99	0.74	0.58	0.12	3.8
410	経塚	古寛永	2.50	1.98	0.70	0.57	0.13	2.8
411	経塚	古寛永	2.42	1.98	0.75	0.61	0.12	(3.1)
412	経塚	古寛永	2.50	1.96	0.73	0.58	0.11	3.0
413	経塚	古寛永	2.45	1.95	0.72	0.53	0.12	2.4
414	経塚	古寛永	2.43	1.96	0.67	0.55	0.11	2.9
415	経塚	古寛永	2.45	2.00	0.68	0.55	0.13	3.1
416	経塚	古寛永	2.40	1.90	0.67	0.53	0.14	3.4
417	経塚	古寛永	2.46	1.95	0.70	0.54	0.11	3.1
418	経塚	古寛永	2.40	1.92	0.68	0.57	0.11	3.0
419	経塚	古寛永	2.50	1.99	0.72	0.54	0.11	(3.2)
420	経塚	古寛永	2.42	2.00	0.71	0.56	0.12	2.7
421	経塚	古寛永	2.49	2.04	0.73	0.58	0.12	2.9
422	経塚	古寛永	2.51	2.01	0.73	0.53	0.12	3.8

No.	出土地点	種　別	外縁外径 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	縁　厚 (cm)	重　量 (g)
423	経塚	古寛永	2.52	2.02	0.71	0.59	0.12	3.8
424	経塚	古寛永	2.51	1.98	0.76	0.61	0.13	3.4
425	経塚	古寛永	2.52	2.02	0.70	0.54	0.12	2.8
426	経塚	古寛永	2.50	1.97	0.78	0.62	0.14	3.3
427	経塚	古寛永	2.47	1.96	0.72	0.59	0.14	4.7
428	経塚	古寛永	2.45	1.96	0.70	0.54	0.12	2.8
429	経塚	古寛永	2.48	2.01	0.70	0.56	0.13	3.4
430	経塚	古寛永	2.52	1.96	0.71	0.60	0.14	3.8
431	経塚	古寛永	2.50	2.00	0.70	0.55	0.13	3.2
432	経塚	古寛永	2.54	1.99	0.71	0.61	0.14	4.2
433	経塚	古寛永	2.46	1.97	0.72	0.56	0.13	2.8
434	経塚	古寛永	2.43	2.00	0.70	0.50	0.12	3.1
435	経塚	古寛永	2.40	1.93	0.75	0.61	0.10	2.1
436	経塚	古寛永	2.47	2.04	0.67	0.59	0.11	2.4
437	経塚	古寛永	2.42	1.96	0.70	0.55	0.10	2.1
438	経塚	古寛永	2.43	2.00	0.66	0.55	0.13	4.0
439	経塚	古寛永	2.48	1.98	0.67	0.55	0.11	2.5
440	経塚	古寛永	2.54	1.98	0.70	0.55	0.13	3.9
441	経塚	古寛永	2.51	2.00	0.67	0.52	0.10	3.1
442	経塚	古寛永	2.47	1.98	0.76	0.62	0.12	2.5
443	経塚	古寛永	2.44	1.99	0.67	0.55	0.12	3.1
444	経塚	古寛永	2.43	1.92	0.66	0.55	0.13	3.8
445	経塚	古寛永	2.46	1.89	0.65	0.57	0.12	2.7
446	経塚	古寛永	2.43	1.97	0.65	0.57	0.11	(2.7)
	経塚	古寛永	2.56	2.02	0.74	0.60	0.11	(2.2)
	経塚	古寛永	2.33	1.89	0.66	0.57	0.10	1.6
	経塚	古寛永	2.37	1.83	0.69	0.52	0.12	(2.4)
	経塚	古寛永	2.43	2.00	0.68	0.54	0.10	(1.5)
	経塚	古寛永	2.42	1.95	0.67	0.54	0.10	(1.6)
	経塚	古寛永	2.47	1.94	0.69	0.54	0.13	3.8
	経塚	古寛永	2.46	2.03	0.70	0.56	0.12	(2.9)
	経塚	古寛永	2.48	2.00	0.70	0.54	0.12	(1.8)
	経塚	古寛永	(2.52)	1.97	0.70	0.58	0.12	(1.5)
	経塚	古寛永	2.50	1.95	0.70	0.54	0.13	(3.1)
	経塚	古寛永	2.45	2.00	0.68	0.53	0.12	2.7
	経塚	古寛永	2.40	1.90	0.67	0.57	0.11	(1.1)
	経塚	古寛永	2.53	2.00	0.75	0.57	0.10	1.8
447	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.01	0.69	0.58	0.16	3.3
448	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.08	0.72	0.59	0.13	2.5
449	経塚	新寛永（文銭）	2.53	2.04	0.74	0.57	0.14	3.2
450	経塚	新寛永（文銭）	2.56	2.04	0.72	0.60	0.12	2.9
451	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.05	0.73	0.62	0.12	3.0
452	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.05	0.71	0.60	0.12	3.1
453	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.02	0.71	0.57	0.12	2.5
454	経塚	新寛永（文銭）	2.53	2.01	0.70	0.58	0.12	3.0
455	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.02	0.71	0.57	0.13	3.2
456	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.01	0.69	0.57	0.13	3.3
457	経塚	新寛永（文銭）	2.53	1.98	0.71	0.58	0.12	2.9
458	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.01	0.70	0.60	0.13	2.4
459	経塚	新寛永（文銭）	2.56	2.03	0.73	0.60	0.13	2.8
460	経塚	新寛永（文銭）	2.52	1.98	0.70	0.56	0.13	4.1
461	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.04	0.72	0.56	0.14	4.3
462	経塚	新寛永（文銭）	2.53	1.99	0.71	0.56	0.11	2.7
463	経塚	新寛永（文銭）	2.53	1.98	0.71	0.58	0.13	3.3
464	経塚	新寛永（文銭）	2.53	2.04	0.72	0.58	0.14	3.8
465	経塚	新寛永（文銭）	2.54	2.03	0.70	0.59	0.13	4.0
466	経塚	新寛永（文銭）	2.57	2.04	0.70	0.58	0.13	3.6
467	経塚	新寛永（文銭）	2.53	2.03	0.71	0.58	0.13	3.3
	経塚	新寛永（文銭）	2.55	2.01	0.69	0.57	0.14	2.2
	経塚	新寛永（文銭）	2.56	2.14	0.73	0.58	0.11	2.0
	経塚	寛永通寶（不明）	－	－	0.70	0.52	0.11	(1.6)
	経塚	寛永通寶（不明）	2.34	1.79	0.71	0.52	0.12	3.2

第Ⅳ章　まとめ

１．縄文土器と石器

以下では、本遺跡から出土した縄文時代の遺物で特徴的な遺物やその傾向について述べ、嚮館跡の縄文時代についてまとめる。

（1）土器

１）層位別の土器出土傾向

本遺跡で出土した土器はSX13包含層を中心に総量約151kgで、そのうち233点を図化し報告した。出土した土器の中には、磨滅が著しく報告に堪えないものも少なくないが、報告した土器で遺構とSX13包含層から出土した土器の傾向を概ね示しえたと考える。

SX13包含層から出土した土器を層位別に第10表にまとめた。表より、下層では早期末の土器群と考えられる２類土器が出土土器の主体である。中層・上層ともに後期前半の土器型式である門前式に併行する土器群や南境式併行の土器群が主体であるが、その比率をみると中層では門前式併行の土器の割合が大きく、上層は南境式併行の割合が大きくなる。このことから、SX13包含層では下層から上層に向け、より新しい土器群の割合が高くなることが確認できた。ただし、下層において４類土器が出土し、中層・上層においても１・２類土器が出土していることから、純然たる層ではないことは注意が必要である。

第10表　層位別土器分類表

	早期末		中期末	門前式併行		南境式併行	十腰内1式併行	後期前半	南境式以降	三十稲場式類似			
	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	10類	11類	その他	計
上層	4(3.8%)	6(5.8%)	2(1.9%)	9(8.7%)	3(2.9%)	32(30.8%)	7(6.7%)	12(11.5%)	1(1.0%)	1(1.0%)	17(16.3%)	10(9.6%)	104
中層	1(1.2%)	11(13.1%)	0	11(13.1%)	7(8.3%)	12(14.3%)	8(9.5%)	6(7.2%)	0	0	19(22.6%)	9(10.7%)	84
下層	0	11(52.4%)	0	3(14.3%)	0	0	0	0	0	0	4(19.0%)	3(14.3%)	21

	早期	中期末	後期		
			門前式併行	南境式併行	南境式以降
上層	9.60%	1.90%	11.60%	49.00%	1.00%
中層	14.30%	0%	21.40%	31.00%	0%
下層	52.40%	0%	13.40%	0%	0%

２）土器の文様と底部圧痕

遺跡から出土した土器の中で、いくつかの特徴的な文様がみられた。以下では、各分類のうち特徴的な土器文様と、底部に残る圧痕について、その特徴を述べる。

１類土器で特徴的なものは、第24図25～27にみられるように、口縁部や口縁部に近い胴部の表裏に地文を施すものである。地文にはLR、RLともにみられ、表裏ともに同様の原体を用いる。口縁部には外面側から刻みを施す。２類土器は胎土に繊維を含む土器で、第24図29・30、第30図130・132・136～138、第34図213～217などで特徴的にみられる。これらの土器は胎土に繊維を含むほか、LRがやや優勢の地文や羽状縄文、縄の押圧などもみられる。これら１・２類でみられる特徴から、これらの土器群は早期末に位置づけられる土器と考える。

３類土器は、区画する隆帯と隆帯に沿う刺突を有する特徴を持つ土器で、遺跡からの出土は極端に少なく、第24図35・36に示したのみである。刺突は土器に対し上方向から施文される。この特徴から、本報告ではこれらの土器を中期末～後期初頭（大木10式末併行か？）に位置づけられる土器とした。

４類土器で特徴的なものは、第 24 図 44・39 ～ 41、第 30 図 145・146 などである。これらの土器は縦位方向の隆帯に刺突を施す鎖状隆帯や２個１対の刻み、ボタン状貼付文など門前式の土器文様の特徴を持つものがみられる。第５類土器の特徴を示すものは、第 30 図 152 ～ 154 などである。これらの土器は４類土器に見られる隆帯による区画が沈線による区画に変化しているものの、２個１対の刻みを施文するため、一部貼付隆帯を残し施文するものである。門前式の中で区画や施文が隆帯から沈線文による施文に変化することが指摘されており（稲村 2008）、隆帯による区画や文様から沈線による区画・文様を施文する土器への過渡期的な特徴を示すものとしてとらえた。これら４・５類土器は門前式の範疇に当たるものであろう。

６類土器の特徴を示すものは、第 23 図 24、第 25 図 48 ～ 51、58、63 などである。これらの土器は数条の沈線により、口縁部近くや胴部に渦巻文様や半円を描くほか、渦巻文様や半円などを起点に縦位方向へ数条の沈線文を描く。これらの土器は南境式土器の範疇に当たるものとして、門前式併行の土器群に後続する土器群としてとらえている。

７類土器は、第 31 図 171 ～ 177 などにみられる比較的幅の狭い数条の沈線と磨消縄文により特徴付けられる土器群である。また、文様区画の結節点に刺突を持つものもみられる。これらの特徴から、７類土器として分類した土器群は十腰内１式土器と考えられる。

最後に 10 類土器である。本調査では第 27 図 101 に示した１点のみの出土である。この土器は胴部全面に刺突を有する特徴を持ち、三十稲場式土器の特徴と共通するものと考える。これまでに三十稲場式土器は北東北～東海・近畿までその影響が及んでおり、三十稲場類型の主要素を概ね兼ね備え同様式と認められるものと特徴的な刺突施文のみが共通し、三十稲場式の影響下に製作されたものの両者があることが指摘されている（石坂 2008）。本遺跡で出土した土器は底部付近の破片資料であり、前述の指摘にあるどちらかを明言することはできないが、岩手県陸前高田市堂の前貝塚で三十稲場式土器の影響下で製作されたとみられる例がある（陸前高田市 1999）ことから、第 27 図 101 も同様に三十稲場式土器の影響下で製作された例であると考える。

底部圧痕について、木葉痕（平行葉脈圧痕を含む）と網代圧痕の両者を確認することができた。層位別に見ると、上層（総数 219 点）で木葉痕 73 例、網代圧痕 10 例、中層（総数 207 点）で木葉痕 37 例、網代圧痕 11 例であり、ともに木葉痕を残すものが優勢である。また出土例から、上層は中層に比べ、木葉痕を残すものが多くなる傾向が確認できた。なお、木葉痕と網代圧痕の両者を残す例（第 33 図 211）も少数であるがみられた。

（２）石器

１）石器石材とその組成

本遺跡では珪質凝灰岩をはじめ、多くの石材が確認されたが、器種別に素材となる石材に傾向がみられる。その傾向を第 11 表にまとめた。表から、上段に示した石鏃や石錐など打製石器の素材には珪質凝灰岩を主体にメノウや黒曜石が大半を占め、その他の石材は少数である。これに対し、打製石斧等の大形打製石器や磨石等の礫器、石製品は、珪質凝灰岩やメノウ、黒曜石などの石材はほぼみられず、砂岩や泥岩を主体し、やや幅広い石材がみられる結果となった。

これまでに気仙沼市で調査された田柄貝塚（縄文時代中期～晩期）の発掘調査報告書において、肉眼観察と偏光顕微鏡観察による石器石材の分類結果と器種の関係について、剥片石器は珪質頁岩や珪化凝灰岩、黒色頁岩が主体に利用され、玉髄や黒曜石、碧玉が併せて利用されているのに対し、

石斧や磨石、凹石、石棒には堆積岩類や火成岩類など多様な石材が用途に合わせ利用されるとの指摘がされている（蟹沢 1986）。今回の調査成果は前述の指摘と対応する傾向が得られたといえる。

第 11 表　石器石材組成表

打製石器

	石鏃・尖頭器	石錐	石匙	楔形石器	不定形石器	計
珪質凝灰岩	25(73.5%)	5(83.3%)	4(100%)	11(55.0%)	19(79.1%)	64(72.8%)
メノウ	6(17.7%)	0	0	2(10.0%)	0	8(9.1%)
黒曜石	3(8.8%)	1(16.7%)	0	1(5.0%)	0	5(5.7%)
砂岩	0	0	0	0	1(4.2%)	1(1.1%)
泥岩	0	0	0	0	2(8.3%)	2(2.3%)
シルト岩	0	0	0	0	0	0
凝灰岩	0	0	0	1(5.0%)	0	1(1.1%)
ホルンフェルス	0	0	0	0	1(4.2%)	1(1.1%)
玄武岩	0	0	0	0	0	0
安山岩	0	0	0	0	0	0
緑色岩	0	0	0	0	0	0
粘板岩	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	5(25.0%)	1(4.2%)	6(.6.8%)
計	34(100.0%)	6(100.0%)	4(100.0%)	20(100.0%)	24(100.0%)	88(100.0%)

大形打製石器・礫器・石製品

	打製石斧	石箆	磨製石斧	磨石	敲石	凹石	石皿	砥石	石製円板	石製品(石棒・石冠など)	計
珪質凝灰岩	0	1(33.3%)	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1.3%)
メノウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
黒曜石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
砂岩	7(43.6%)	1(33.3%)	0	15(83.2%)	1(100.0%)	6(75.0%)	0	0	10(90.9%)	3(25.0%)	43(53.7%)
泥岩	1(6.2%)	1(33.3%)	1(25.0%)	1(5.6%)	0	1(12.5%)	5(100.0%)	0	0	5(41.8%)	15(18.7%)
シルト岩	2(12.6%)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2(2.5%)
凝灰岩	4(25.2%)	0	1(25.0%)	0	0	0	0	1(50.0%)	1(9.1%)	0	7(8.7%)
ホルンフェルス	0	0	0	1(5.6%)	0	0	0	0	0	1(8.2%)	2(2.5%)
玄武岩	1(6.2%)	0	0	0	0	1(12.5%)	0	0	0	0	2(2.5%)
安山岩	1(6.2%)	0	1(25.0%)	0	0	0	0	0	0	0	2(2.5%)
緑色岩	0	0	1(25.0%)	0	0	0	0	0	0	0	1(1.3%)
粘板岩	0	0	0	0	0	0	0	1(50.0%)	0	3(25.0%)	4(5.0%)
その他	0	0	0	1(5.6%)	0	0	0	0	0	0	1(1.3%)
計	16(100.0%)	3(100.0%)	4(100.0%)	18(100.0%)	1(100.0%)	8(100.0%)	5(100.0%)	2(100.0%)	11(100.0%)	12(100.0%)	80

なお今回の石器石材の分類は肉眼観察による分類を行っている。分類にあたっては、東北大学宮本毅氏より、一般に珪質頁岩と呼ばれるものは珪質凝灰岩と肉眼での同定が困難な場合があること、また珪質凝灰岩と玉髄や碧玉等の同定についても、同一母岩の中で、変成作用の程度の差異である場合があるなどの助言をいただいた。これを受け、本書では珪質頁岩や玉髄、碧玉等を広義の珪質凝灰岩として分類し報告した。また、これらの中で特に珪質化が進んだものをメノウとして分類している。

２）石器製作上の特徴

出土した石器のうち、製作において特徴的なものがみられた。第 38 図 281、第 44 図 336 ～ 341 など、石箆や打製石斧にみられる原礫面を大きく残した石器である。稀に第 44 図 339 のように、素材となる礫端部の両面を調整し作製されるものがみられるが、大半は礫の片面に剥離を施し、片刃の石器としている。これらの石器は遺跡周辺の海岸部などで得られる平面長楕円の礫や、凹石などを転用し素材としており、素材となる礫の形状を生かした成形がなされる。これらの特徴は、田柄貝塚出土打製石斧中にも同様の特徴を示す一群（背面全体に自然面を残した縦長剥片が用いられる打製石斧）があり（宮城県教育委員会 1986）、気仙沼市域における当該期の大形打製石器の製作における特徴を示したものと考える。

３）磨石について

遺跡からは磨石 20 点が出土し、５点を図化し報告した。また、報告した磨石のほかに、遺跡からは多くの円礫が出土している。遺跡は丘陵上に立地し、遺跡周辺には沖の田川や滝根川があるも

のの、遺跡内に河川跡等が確認できないことから、これらの円礫は自然にあるものではなく、遺跡の外から搬入され、残されたものと考える。出土した磨石、および遺跡に搬入されたとみられる礫のうち、形態による特徴がみられたので、第 12 表に示し述べる。

出土した磨石のうち、明確に稜を持つほど磨面が研磨されたものや球形の礫が使用されることはごく少数で、主体となるものは平面長楕円形で扁平な礫を用いるもの（全体の 60%）であった。また、搬入された可能性のある礫群のうち、主体となるものは平面長楕円形で扁平な礫とやや不定形の円礫であった。このことから、平面長楕円形の礫を中心に、礫が遺跡に持ち込まれ、このうち平面長楕円で扁平な礫が高い頻度で磨石として用いられたと考える。また、これら平面長楕円形で扁平な礫は磨石として用いられるほか、前述のように打製石斧等にも活用されたと考えられる。これらの礫は遺跡周辺の海岸部などで得られる砂岩を中心とした堆積岩であり、剥片類にみられる石材と傾向が異なることから、遺跡周辺で得られる在地石材の利用の在り方の一端を示したものと考えられる。

第 12 表　磨石分類表

報告書報告磨石

a	b	c	d	計
2 (10.0%)	12 (60.0%)	1 (5.0%)	5 (25.0%)	20 (100.0%)

掲載外礫群（完形品）

a	b	c	d	計
0	79 (43.9%)	12 (6.7%)	89 (49.4%)	180 (100.0%)

なお、田柄貝塚の報告において、完形磨石の平面形態を観察・分類した結果、楕円形のものが 81%を占めること、縦横比が４：３に近いものが多いこと、横幅の斉一性が高いことが指摘されており（宮城県教育委員会 1986）、今回出土した磨石や礫群にみられた傾向も、これに対応するものと考える。

４）黒曜石分析の結果を受けて

今回の調査で出土した黒曜石は 10 点以下と、客体的存在というより非常に少ないものである。肉眼で分別可能な３種類を抽出し、波怒棄館遺跡と台の下遺跡・貝塚も併せて参考資料として分析を依頼した。これまで、市内出土の黒曜石の産地推定は、縄文時代中～晩期の田柄貝塚の５点のみであり、今回の分析方法と異なるものの、４点が岩手県雫石町の小赤沢産の可能性が高いと報告されている。また、北隣の陸前高田市の縄文時代中期末の門前貝塚で、今回と同じエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による産地推定が行われている。123 点中、40 点が北上折居 1 群（岩手県、北上川エリア）、46 点が北上折居 2 群（岩手県、北上川エリア）、１点が北上折居 3 群（岩手県、北上川エリア）、７点が湯の倉群（宮城県、宮崎エリア）、25 点が金ヶ崎群（秋田県、男鹿エリア）、４点が今野川群（山形県、羽黒エリア）と分析されている。宮城県内の縄文時代の遺跡から出土する黒曜石は、県内産（加美町湯の倉産）が主体である（佐々木 2013）が、沿岸部の気仙沼では、岩手県南部の沿岸部と同じ地域から黒曜石が搬入されていることが改めて裏付けられ、今後の分析資料の蓄積と共に、交易ネットワークなどの解明を期待したい。

上述の諸特徴や傾向から縄文時代の嚮館跡は、その痕跡は希薄ではあるが、縄文時代早期末に竪穴状遺構や集石、落とし穴などとともに少数の遺物を残す活動の場であった。しばらくの間、人間の活動の痕跡は見られないが、縄文時代後期前半に再び掘立柱建物跡や貯蔵穴を含む土坑群を伴う生活の場が形成される。後期の人々は田柄貝塚など気仙沼市域の人々と共有する石器石材や土器型式を用いている一方で、黒曜石や三十稲場式類型の土器などがみられる遠隔地からの要素も用いていた。こうした人々の生活は後期後半まで続くことはなく、後期後半に入ると再び人間の活動痕跡は見られなくなってしまう。

２．近世の遺構について―大肝入小野寺宮内との関連―

嚮館跡の歴史的背景は第Ⅰ章でも記載したが、再度、小野寺宮内に関して整理しておきたい。

嚮館跡の北１㎞にある峰平館は、天文年間（1532 ～ 1555）年に、小野寺出雲守道重が大寿院（大壽院）として開基した修験の寺（本山派）である。小野寺出雲守の子が右馬助、孫が但馬で、但馬は大和国の大峰入吉祥院中将公権大僧都という官位に補されている。但馬の子が小野寺宮内で、宮内が大肝煎になったため、山伏を孫の円寿院に、峰平館（通称峰屋敷）は子の彌惣エ門と孫に譲り、次男兵左エ門と長峰（長根か？）の里に移り住んだと『岩尻邑風土志』にある。この長根の里が嚮館のことである。また、嚮館跡で見つかった墓を改葬した仙翁寺は、安元２（1176）年に創立、應安５（1372）年に中興された寺で、小野寺家が檀那となっている寺であり、過去帳に小野寺宮内が記載されている。

この位置関係を明確にするために、巻頭に掲載した『本吉郡北方岩尻村分間絵図』（東北歴史博物館蔵）の部分写真を第 55 図に掲載した。この絵図は、下書きの可能性が高く、制作年代は不明である。絵図で嚮館跡の場所には、「長根」と「ヤシキ」の記載があることから、これが長根屋敷に該当するものと思われる。この屋敷を現在の地図と比較したところ、今回の調査区のＣ区にほぼ相当する。Ｃ区には、第５図に示した瓢箪形をした池や写真図版 11 に掲載した井戸が確認された。地元住民によると、この場所は長根の小野寺家の新家であり、小野寺家はその南側にあったという。Ｃ区からは、上記以外の近世の明確な遺構は確認できなかったことから、削平された可能性が高い。なお、小野寺家は明治期に唐桑に移っている。

一方、峰平館には小野寺家の本家が今もあるが、大寿院は明治の神仏分離や修験宗の廃止などで、廃寺となったのであろう。ここには小野寺家の屋敷墓地があり、小野寺宮内、彌想右衛門（宮内の長男彌惣エ門）、安説（宮内の四男、仙台二代藩主御侍医）などの墓が残っている。今回、嚮館が確定したことにより、峰屋敷（峰平館）と長根屋敷（嚮館）が従来時々混同されていたので、時系

第 55 図　嚮館跡周辺絵図（巻頭写真拡大）

列に整理したのが、第 13 表である。

第 13 表　小野寺宮内関連年表

元 号	西 暦	事項（嚮館跡）	事項（峰屋敷）	根　拠	出　典	備　考
寛永 15	1638		小野寺宮内の名初出（大肝入）		古館家文書	
寛永 16	1639		小野寺宮内の名初出（大肝入）		気仙沼市史	
寛永 18	1641		「郡長、小野寺宮内（峰）」の文書あり		岩尻邑風土志	
慶安年間	1648 ～ 1651	小野寺宮内が嚮館を築き、仲子（次男）兵左ェ門重次と住み始める	小野寺宮内、峰の家を嫡子彌惣ェ門、其子円寿院に譲る		岩尻邑風土志	
承応４	1655	古館家文書で小野寺宮内の名が頻出する最後の年			古館屋敷文書	
寛文元	1661	小野寺紀一文書に、宮内の名あり			小野寺 1979	
寛文６	1666	小野寺宮内から子の兵左衛門に大肝入の役目引き継がれる		大肝入知行目録添状？	本吉町誌	
延宝７	1679	小野寺宮内、経塚を築く		経塚供養碑		
延宝８	1680	小野寺宮内、享年 89 歳死去		仙翁寺過去帳	岩尻邑風土志	
天和２	1682					清水川の高橋藤兵衛らが許可を得て、波路上に製塩場をつくる
貞享４	1687	古館家文書で小野寺兵左衛門の名が頻出する最後の年			古館家文書	
元禄９	1696		四代藩主伊達綱村が、峰屋敷小野寺源内宅に泊まる。源内が侍に取り立てられる。		気仙沼市史	
元禄 11	1698	小野寺宮内の子兵左衛門死去			小野寺 1979	
享保 13	1728	五代藩主伊達吉村、岩尻村を訪れ小野寺某の家に宿泊			続隣松集	

小野寺宮内が務めた大肝入（大肝煎）とは各代官所管轄下に置かれた役人で、地方の有力者から選任され、代官の命を受けて管内の行政、司法、警察の役割を果たした。では、小野寺宮内が大肝入を務めた管内とはどこを指すのかが問題となる。嚮館は本吉郡にあるが、江戸時代のある時期以降には本吉北方（20 箇村）と本吉南方（13 箇村）に分かれ、代官所も北方と南方の２箇所にあったことが知られている。長根屋敷や峰屋敷は岩尻村にあり、本吉北方に属していると理解されている。ところが、寛永 18（1641）年の検地の時にはまだ岩尻村はなく、検地により大谷本郷が７箇村に分割され、その一村が岩尻村となったのである。残念ながら、この分割（村割り）が、実際いつ行われたかは定かではない。

気仙沼市史などによると、熊谷又左衛門が承応２（1653）年、清水藤内が天和２（1682）年、熊谷儀兵衛が貞享元（1684）年、熊谷太兵衛が貞享３（1686）年に大肝入を務めたとされるが、この間、小野寺宮内・兵左エ門親子も大肝入を務めている。唐桑町史によると、「本吉北方は気仙沼本郷、新城、月立、赤岩、鹿折、唐桑、小原木の七ヶ村を称し、一名の大肝入が任命されていた。この行政区の変化は、恐らく寛永の検地以後である。ところが、隣村岩尻・平磯・波路上・長磯・最知・岩月・松崎七ヶ村の本郷は岩尻村で、これを大谷本郷と称し、大肝入が一名任命されていたが、元禄以後（年

代不明）本吉北方に編入された。故に本吉地方は岩尻以北小原木村までの十四ヶ村となり、広区域の行政区となった。」（唐桑町 1968）とある。町史の根拠は不明であるが、小野寺兵左エ門が大肝入を辞める 1687 年頃までは、本吉北方 (1) 域に２人の大肝入が存在したと考えるのが、理解しやすい。しかし、辻褄が合わない点もある。小野寺宮内は、寛永 15（1638）年もしくは 16 年には大肝入となっており、寛文４年（1664）年頃に子の兵左エ門に引き継がれ (2)、貞享４（1687）年頃まで務めたことは、同じ本吉北方の唐桑村古館屋敷に伝わる鈴木家文書（以下古館家文書と呼ぶ）で確認できる (3)。大谷本郷の北方編入時期に関係なく、一貫して小野寺宮内・兵左エ門親子が大肝入として登場している。北部の気仙沼域に大肝入が存在したのであれば、古館家文書に小野寺親子の名前しか見当たらないのは、不自然なことである。また、承応２（1653）年の気仙沼域の大肝入は熊谷又左衛門であり、承応２・３年に古館家文書で小野寺宮内の名前が登場することから、少なくとも承応２年には２人の大肝入が存在していたことは確実である。小野寺昭英は、寛文元（1661）年の知行目録（小野寺紀一家文書）の中に、宮内の肩書が「元良北方大肝入」と読めるとしている（小野寺 1997）ことから、仮に大肝入が２人存在した時期でも、本吉北方大肝入と称し、役割を分担したのではなかろうか。その場合であっても、大肝入は膨大な職務をこなさなければならず、ベテランの宮内が主たる任を担っていたため、古館家文書に名前が登場すると理解しておき、資料の蓄積を待ちたい。

さて、大肝入は藩から高五貫文（五十石）の土地もしくは年金五両が給料として支給され、その他に三両以内の補助金を区域内から徴収することが認められ、年貢諸役の免除、苗字帯刀御免、絹紬着用御免などの特権が与えられた。大肝入役所は専用の建物があったのではなく、自宅を使用したと言われる。役所には手代や増手代の書記、犯人捕縛の手伝いをする締役、小使などを雇用することができたことから、役所はかなりの規模の建物であったことが推測される。そのため、峰屋敷から長根屋敷に移った際に、それ相応の規模の建物を建てたと考えるのが妥当である。今回Ｄ区で確認された SB10 を長根屋敷とするには、あまりにも小規模であり、前述のように屋敷推定地はＣ区であることなどから、長根屋敷だとは考え難い。個人的には、隠居後の宮内が、20 年以上にわたり法華経を読経し、石に写経した場所ではなかったかと想像している。

次に、経塚（礫石経）について述べたい。経塚はトレンチ調査だけのため、全体的な構造は不明である。平坦面に五段階にわたり版築状に突き固めた盛土を行い、方墳状の高まりを形成している。頂部の表土を取り除いた段階で石組が見つかっているが、これは供養碑の基礎部分と考えている。碑文から、経石を埋納したと考えられるが、経石を確認するまでの掘削はしていない。表面や表土中から扁平な石が多数確認されたが、これらには墨書の痕跡は認められなかった。経石を確認していないため推論でしかないが、これらの扁平な石は、経石として利用するために海岸など遺跡外から持ち込まれたものであり、経石として利用しなかったものを経塚の構築時に埋めたのではないかと考えている。

また、供養碑には大乗妙典一千部読誦供養と八巻を写経した石を入れるという、読誦と納経の２種類のことが記されている。この大乗妙典とは法華経（妙法蓮華経）のことであり、法華経は特定宗派に限定されず、天台宗や禅宗など幅広く用いられた経典であり、修験との関わりも強い。大寿院は本山派の修験寺であり、本山である吉野大峯山では、法華経を読むことが修行の一つと知られ

ていることから、宮内も法華経を選んで読誦したのであろう。また、経塚信仰は、釈迦が『法華経』を説いたところ、多宝塔が湧き出たと『法華経』に記載されていることから、弥勒菩薩がこの世に下生し、救済してくれることを願って経典を埋めたことが、起こりと言われている。それが近世になると、先祖供養・子孫繁栄・五穀豊穣・村内安全などの現世の利益を追求することや父母などの追善供養になったと言われており、宮内の築造目的は前者であった。一般に経文の読誦と書写の功徳は同じであることから、読誦か納経のどちらか一方の銘文となることが多い。近世には、写経した経典を埋納したことなどを銘文とする納経塔（一字一石塔など）よりも、経典を読誦したことや回数を銘文とする読誦塔の方が多くなる傾向が見受けられる。宮内が経塚を造立するまでの災害を見てみると、延宝年間には毎年のように災害に見舞われており、この直近の情勢が、宮内の経塚築造の契機となったのではなかろうか。そして、子孫への強い思いが故に、読誦を兼ねた経碑となったのであろう。

第 14 表　江戸時代初期の災害・凶荒の被害年表

元 号	西 暦	内　容	根　拠	出　典
天正 13	1585	津波有	口碑	本吉郡誌 唐桑町史
慶長 16	1611	三陸沿岸で地震後、大津波。仙台藩内で、1783 人死亡。		気仙沼市史 本吉町誌
元和元	1615	凶作。大飢饉で人馬が餓死。		唐桑町史 本吉町誌
元和２	1616	三陸地方に強震後、大津波		本吉郡誌 唐桑町史 本吉町誌
元和３	1617	凶作。大暴風雨・洪水。		唐桑町史
元和４	1618	彗星出現		唐桑町史
寛永元	1624	冷害、凶作	東藩史稿	気仙沼市史
寛永 14	1637	仙台藩で飢饉		唐桑町史
寛永 17	1640	大凶作		唐桑町史
寛永 19	1642	凶作		唐桑町史
慶安４	1651	亘理郡（宮城県南部）で津波		本吉郡誌
延宝３	1675	4 月 15 日、本吉郡沿海部に、迅雷、大きさ 5 ～ 7 寸の雹が降る。行人傷つき、飛鳥死す。		気仙沼市史
延宝４	1676	10 月、常陸、岩城、陸奥の沿岸に津波。人畜溺死、家屋の流出。	古文書	本吉郡誌 唐桑町史 本吉町誌
延宝５	1677	3 月 12 日、陸中南部領で、数十回の地震。その後の津波により、宮古・大槌方面で家屋の流出。	口碑	本吉郡誌 唐桑町史 本吉町誌
		5 月 11 日、本吉郡、迅雷、大風、雹が降る。長さ 20cm、厚さ 5cm、木や田畑に被害あり。		気仙沼市史 唐桑町史
延宝７	1679	大凶作		唐桑町史

市内には近世の経塚（礫石経）は 28 箇所（悉皆調査では 25 箇所）あり、今回確認されたものは市内最古のものである。経塚（礫石経）は、経石とその記念碑である経碑がセット関係にあるが、開発などにより経碑だけが移転されてしまい、下部の経石は顧みられないことが多い。市内に分布する経塚も、経碑だけ移転され、嚮館跡のように塚状のマウンドを有するような良好な保存状態のものは珍しい。さらに、ほとんどは造立者が不明であり、今回のように元大肝入と特定できたのは、稀有である。また、赤岩館経塚のように、開発に伴う発見・調査事例も多く、復興事業おける市内初の保存例として、経塚を保存できたことは意義がある。

註

(1)　幕末における本吉北方は現在の南三陸町の歌津以北を指し、唐桑町史にある北方の範囲の変更が行われた時期は不明であり、岩尻村より南の人物が大肝入なった記録は、現時点では見当たらない。

(2)　古館家文書 317 の寛文４年（1664）年で、大肝煎兵左衛門が初出する。本吉町誌では、寛文６（1666）年の「大肝入知行目録添状？」に「……本吉大肝入源内隠居跡肝入願之知行高五貫文同子兵左エ門ニ御本帳右役目相勤候内計　地形引続相渡可被申候以上」とある。

(3)　古館家文書はこの頃から少なくなり、大肝入の記載と文書の多寡が比例する可能性はある。

引用・参考文献

相原淳一　2009 「東北地方における縄文時代中期末葉から後期後葉に関する土器編年」『研究紀要』10　東北歴史博物館

相原淳一　2015 『東北地方における最古の土器の追究』

石坂圭介　2008 「三十稲場式土器」『総覧　縄文土器』

稲村晃嗣　2008 「門前式土器」『総覧　縄文土器』

小野寺昭英　1997 『地域史断章』

蟹沢聰志　1986 「田柄貝塚から出土した石器類の材質について」『田柄貝塚Ⅱ』宮城県教育委員会

久保兼一（写）『岩尻邑風土志』

古泉弘　2001 「喫煙２　煙管」『図説　江戸時代考古学研究事典』柏書房

紫桃正隆　1973 『史料　仙台領内古城館』第２巻

唐桑町　1968 『唐桑町史』

気仙沼市　1986 ～ 1998 『気仙沼市史』

気仙沼市教育委員会　2011 『唐桑の石碑』

佐々木繁喜　2013 「岩手県門前貝塚および宮城県大木囲貝塚出土の黒曜石の産地推定分析」『岩手考古学』24

佐々木繁喜　2013 「宮城県の黒曜石について」『宮城考古学』15

佐藤宏一　1983 「仙臺領北部における近世修験の消長に就いて」『研究紀要』９　東北歴史資料館

丹野雅人　2008 「土器片加工円板・錘」『総覧　縄文土器』

藤沼邦彦　1975 「宮城県の経塚について」『研究紀要』1　東北歴史資料館

宮城県教育委員会　1980 『歴史の道調査報告書　気仙道（小野～唐桑）』

宮城県教育委員会　1981 『東北地建バイパス関係遺跡調査報告書』

宮城県教育委員会　1986 『田柄貝塚Ⅰ・Ⅱ』

宮城県教育委員会　2007 『山居遺跡（縄文時代編）ほか』

宮家準　2001 『修験道』講談社学術文庫

本吉郡町村長會　1949 『本吉郡誌』

本吉町　1982 『本吉町誌』

本吉町教育委員会　1989 『本吉町の石碑』

本吉町教育委員会　1999 『平貝遺跡・平貝窯跡』

陸前高田市教育委員会　1999 『堂の前貝塚Ⅱ』

SUMMARY

Kesennuma City is located at the northeast tip of Miyagi Prefecture, along the Pacific coast, neighboring Iwate Prefecture to its north. A rias coastline extends north-south from Aomori to Iwate to Miyagi Prefectures, and the part where Kesennuma is located, called the Sanriku Coast, is particularly deeply indented, with alternating narrow harbors and peninsulas making the coastline resemble tree-branches. This area has historically been prone to the ravages of tsunamis.

The Great East Japan Earthquake which occurred on March 11, 2011 caused a massive tsunami which reached the eastern coast of Japan, including Kesennuma City. The city was catastrophically damaged, especially near the coast. Approximately 16,000 homes were destroyed, 9,000 households were affected, and 1,200 lives were lost. There are large-scale development works underway in Kesennuma today, towards recovery and reconstruction, including the rebuilding of homes by individuals, communal relocation to higher elevations, and the rebuilding of commercial and industrial facilities and infrastructure. To ensure that the accompanying buried cultural properties excavation surveys and assessments are conducted with necessary speed, Kesennuma has welcomed assistance from local governments across Japan in the form of temporary assignments of specialist staff for this purpose.

This volume is a report of the buried cultural properties survey conducted as part of the reconstruction effort in fiscal year 2014. This is the first report from the administrative unit Motoyoshi Town, which has been formed on September 1, 2009 by municipal merger.

The site of *Mukaitate-Ato*, reported in this volume, is located on a gentle hill about one kilometer inland from the coast, with great views of the Pacific Ocean. The site was understood as the former residence of Onodera Kunai, who was the *Oo-Kimoiri* (the top local official from the farmer (peasant) class overseeing several villages) in the early Edo period. The survey confirmed this through the excavation of features and artifacts dating to the late 17th to early 18th centuries. A *Kyo-Zuka* (mound where Buddhist scriptures were buried) was newly discovered, with inscriptions on the accompanying monument noting its construction by Onodera Kunai in 1679; this feature will be preserved *in situ*, due to its historical significance.

Additionally, features and artifacts from End Incipient Jomon, Early Late Jomon, and Ancient periods have been identified. It was unknown until this excavation survey that *Mukaitate-Ato* was occupied transitionally in the final stages of the Incipient Jomon period and for a certain period of time in the early part of the Late Jomon period, and thus these findings are highly significant. Features including pit houses from the Jomon period were unfortunately unidentifiable, likely erased by construction in later periods, but artifacts were found in a debris deposit within a shallow valley, giving a glimpse of life in the Jomon. Characteristic pottery and stone tools were identified, and while being a relatively small occupational site, its obsidian was sourced from outside the Prefecture.

This volume thus constitutes a significant addition to the historical record of Kesennuma, where buried cultural property surveys have rarely taken place. It indicates that perhaps a rich archaeological record remains to be discovered here. It is the author's hope that this volume will, together with the many other volumes coming out from the reconstruction effort, sheds light on the early history of this region.

附編

気仙沼市内遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

嚮館跡は、気仙沼市南部の本吉町長根に所在する縄文時代後期前葉の集落跡である。また、波怒棄館遺跡は気仙沼市北部の唐桑町荒谷前に所在する縄文時代前期～中期初頭の集落跡・貝塚、台の下遺跡は唐桑町台の下に所在する縄文時代中期後葉の貝塚のある集落跡である。これら気仙沼市内に所在する３遺跡から出土した縄文時代の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、嚮館跡出土の３点、波怒棄館遺跡出土の２点、台の下遺跡・貝塚出土の２点の、合計７点の黒曜石製石器である（表1）。

表１　分析対象

No.	遺跡名	時期	出土地点	備考
1	嚮館跡	縄文時代早期末・後期前葉	D区 SK02	落し穴
2			B区 SK21	
3			B区 SK24付近	
4	波怒棄館遺跡	縄文時代前期～中期初頭	SK432	石鏃
5			SX88	貝層
6	台の下遺跡・貝塚	縄文時代中期後葉	4区 SI63	
7			4区 SI62	

試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管ターゲットはロジウム（Rh）、Ｘ線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径８㎜、電圧 50kV、電流 1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月 1999 など）。本方法では、まず各試料を蛍光Ｘ線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素のＸ線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

1）Rb 分率 =Rb 強度× 100/(Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度)

2）Sr 分率 =Sr 強度× 100/(Rb 強度 +Sr

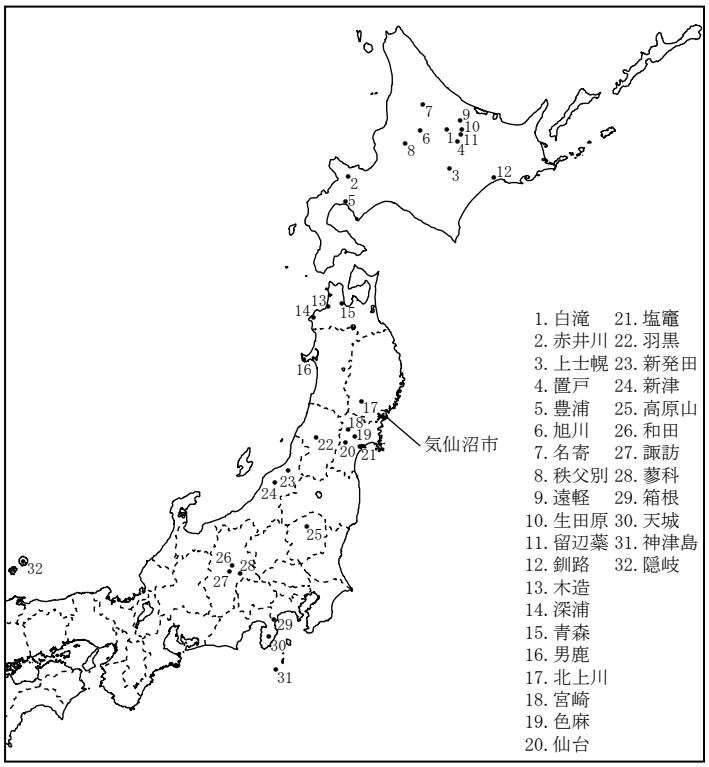


図１　黒曜石産地分布図（東日本）

強度 +Y 強度 +Zr 強度)

3) Mn 強度× 100/Fe 強度

4) log(Fe 強度 /K 強度)

そして、これらの指標値を用いた 2 つの判別図（横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度× 100/Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率－縦軸 log(Fe 強度 /K 強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe 強度 /K 強度) の値が減少する（望月 1999)。試料の測定面にはなるべく奇麗で平坦な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表 2 に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図 1 に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表 3 に石器の測定値および算出した指標値を、図 2 と図 3 に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。なお、視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、1 点が金ヶ崎群（秋田県、男鹿エ

表 2　東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)	赤石山山頂, 八号沢露頭, 八号沢, 黒曜の沢, 幌加林道(36)
		白滝2	7の沢川支流(2), IK露頭(10), 十勝石沢露頭直下河床(11), アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股(4), タウシュベツ川右岸(42), タウシュベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
	豊浦	豊浦	豊泉(10)	
	旭川	旭川	近文台(8), 雨紛台(2)	
	名寄	名寄	忠烈布川 (19)	
	秩父別	秩父別1	中山(66)	
		秩父別2		
		秩父別3		
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)	
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマップ川河床(9)	
		留辺蘂2		
	釧路	釧路	釧路市営スキー場(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15), 鶴ヶ坂 (10)	
	深浦	八森山	岡崎浜(7), 八森山公園(8)	
	青森	青森	天田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)	
		脇本	脇本海岸(4)	
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9), 真城 (33)	
		北上折居2		
		北上折居3		
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)	
	色麻	根岸	根岸(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(18)	
		秋保2		
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24), 大越沢 (10)	
		櫛引	たらのき代 (19)	
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)	
	新津	金津	金津(7)	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)	
		七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 枝持沢(3)	
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)	
		鷹山	鷹山(14), 東餅屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
		土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20), 土屋橋北西(58), 土屋橋西(1)	
		古峠	和田峠トンネル上(28), 古峠(38), 和田峠スキー場(28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)	
		高松沢	高松沢(19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35), 星ヶ塔(20)	
	蓼科	冷山	冷山(20), 麦草峠(20), 麦草峠東(20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)	
		畑宿	畑宿(51)	
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)	
静岡		上多賀	上多賀(20)	
	天城	柏峠	柏峠(20)	
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)	
		砂糠崎	砂糠崎(20)	
島根	隠岐	久見	久見パーライト中(6), 久見採掘現場(5)	
		箕浦	箕浦海岸(3), 加茂(4), 岸浜(3)	

表 3　測定値および産地推定結果

No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 / Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	No.
1	81.9	45.4	1008.1	177.0	201.6	166.1	458.4	17.65	4.50	20.10	1.09	北上折居2	北上川	1
2	222.8	143.0	1234.4	517.2	535.4	277.7	623.8	26.47	11.58	27.40	0.74	櫛引	羽黒	2
3	135.0	76.2	1748.3	292.2	355.1	266.2	775.1	17.31	4.36	21.03	1.11	北上折居1or2	北上川	3
4	181.6	112.6	1041.5	407.7	410.7	221.0	485.4	26.74	10.81	26.93	0.76	櫛引	羽黒	4
5	198.1	115.1	2681.9	427.0	563.4	386.3	1168.8	16.77	4.29	22.13	1.13	北上折居1	北上川	5
6	279.1	192.9	1207.6	888.9	548.1	376.5	675.5	35.71	15.97	22.02	0.64	金ヶ崎	男鹿	6
7	171.8	94.0	2005.4	369.3	408.3	346.4	946.4	17.83	4.69	19.72	1.07	北上折居2	北上川	7

リア)、1点が北上折居1群（岩手県、北上川エリア)、2点が北上折居2群（岩手県、北上川エリア)、1点が北上折居1群と同2群の重複域、2点が櫛引群(山形県、羽黒エリア)の範囲にそれぞれプロットされた。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表4に時期・遺跡別の産地を示す。点数が計7点と少ないにもかかわらず、岩手県、秋田県、山形県産とさまざまな産地の黒曜石が確認された。今後、この地域の黒曜石の測定例が増えれば、ほかの産地の黒曜石の存在や、時期による傾向などが確認できる可能性がある。

表4　時期・遺跡別の産地

時期（縄文時代）	遺　跡	北上川	羽黒	男鹿	計
前期～中期初頭	波怒棄館遺跡	1	1	—	2
中期後葉	台の下遺跡・貝塚	1	—	1	2
後期前葉	嚮館跡	2	1	—	3
計		4	2	1	7

4. おわりに

気仙沼市内の3遺跡より出土した縄文時代の黒曜石製石器計7点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、4点が北上川エリア、2点が羽黒エリア、1点が男鹿エリア産と推定された。複数の産地の黒曜石が持ち込まれており、今後のデータの蓄積が期待される。

引用文献

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定．大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」：172-179，大和市教育委員会．

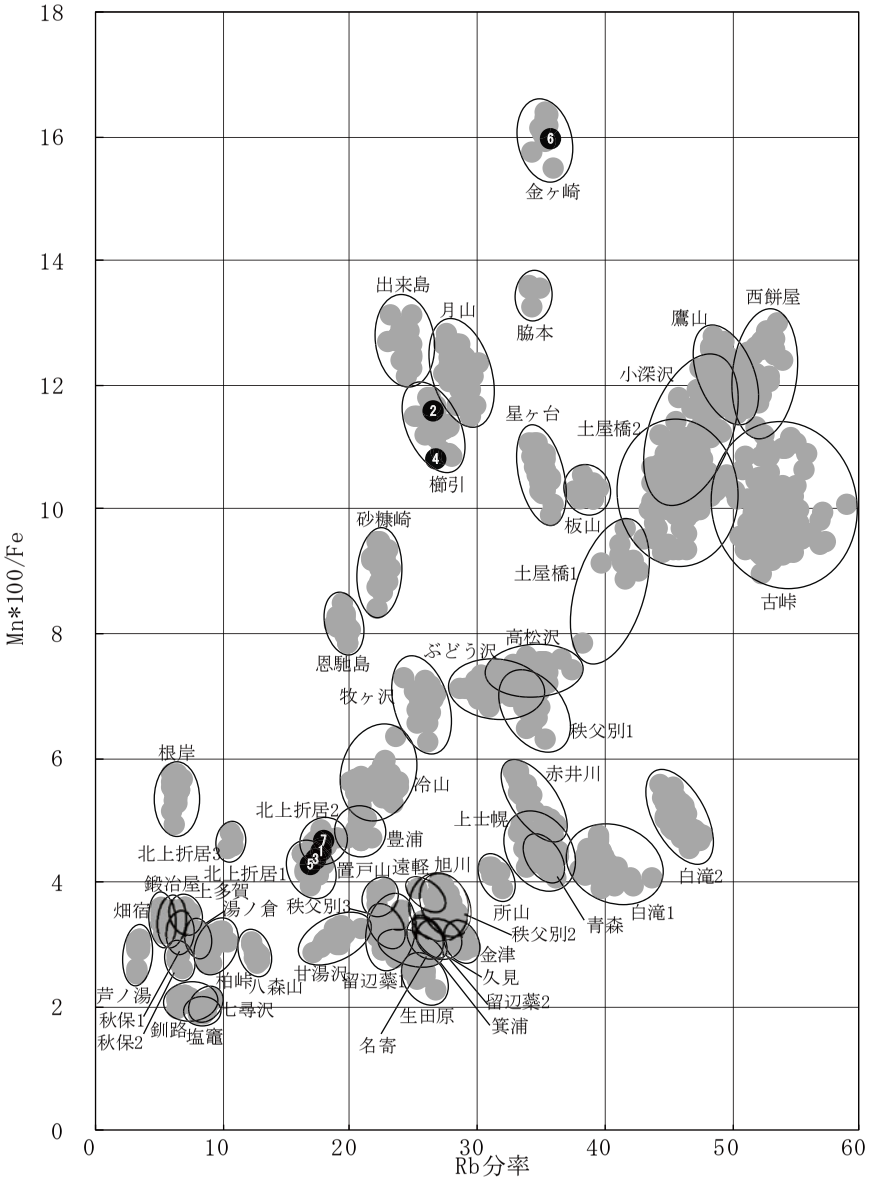


図２　黒曜石産地推定判別図 (1)

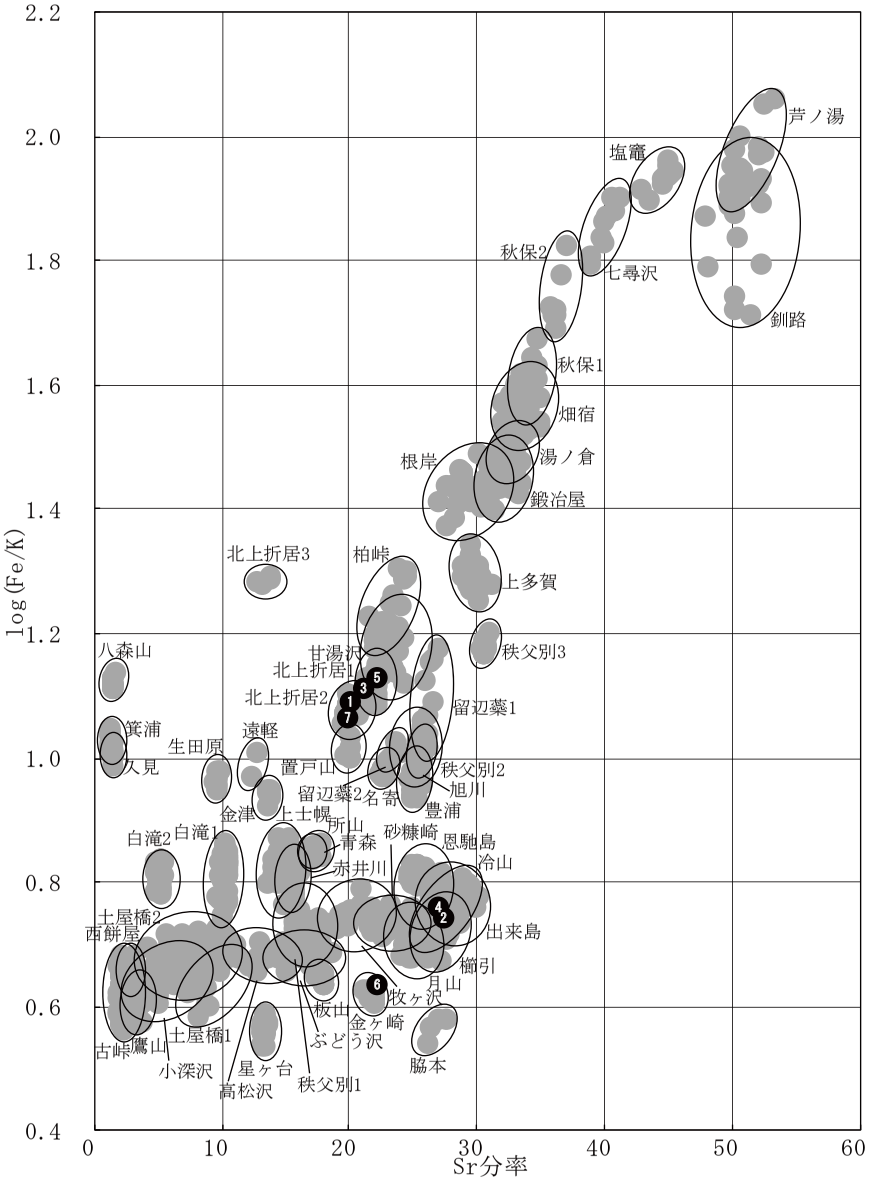


図３　黒曜石産地推定判別図 (2)

写　真　図　版

図版1　嚮館跡空中写真1

西から

北東から

図版２　嚮館跡空中写真２

Ｂ区・Ｄ区・経塚全景

Ｂ区全景

SI41（東から）

SI41（空中から）

SB43（東から）

SI40（東から）

SX55 確認状況（北から）

SX55 遺物出土状況（北から）

SX55 完掘状況（北から）

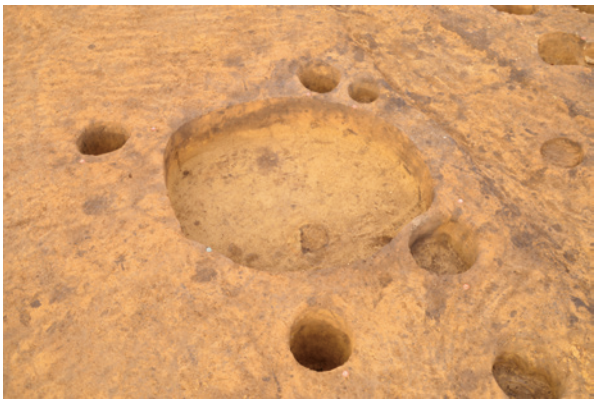
SX42 集石確認状況（東から）

図版４　Ｂ区遺構写真２

SX66 半截状況（南から）

SK56（南から）

SE60（南から）



SK14（南から）

SK22（南から）

SK27（南から）

SK31 半截状況（南から）

SK31 完掘状況（南から）

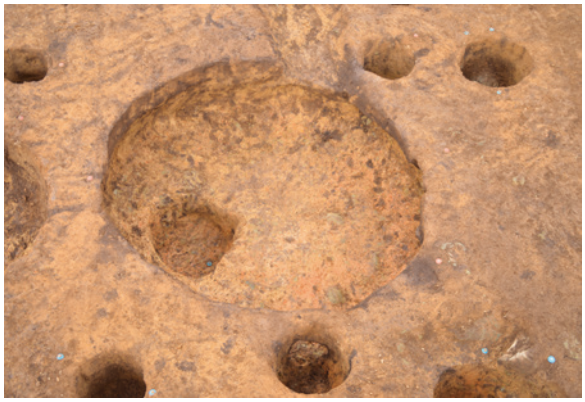
SK33（南から）

SK34（南から）

SK37（北から）

SK38（南から）

SK39（東から）

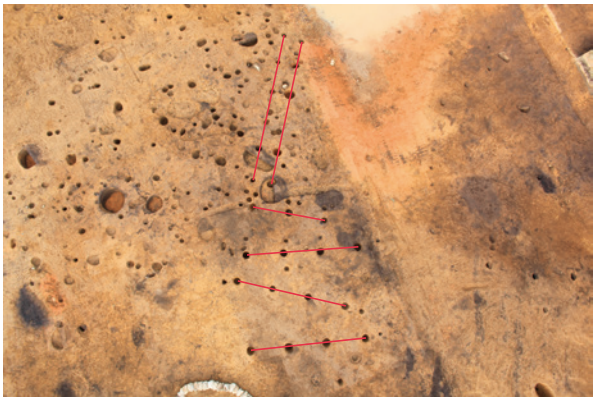

SK49（南から）

SK62（南から）

SK65（南から）

図版６　Ｂ区遺構写真４

SK76（南から）

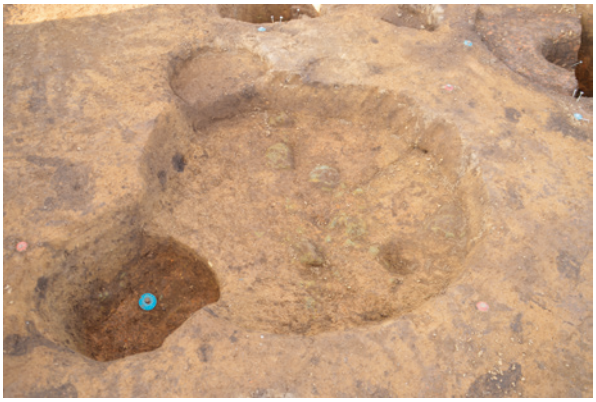


SA47・48・50～52・54（空中から）

SA50～52（南から）

SK16（東から）

SK24（南から）



SK30（東から）

SK35（南から）

SK59（東から）

SK68（東から）

SK70（南から）

SK79（南から）

SX13 土器出土状況 1

SX13 土器出土状況 2

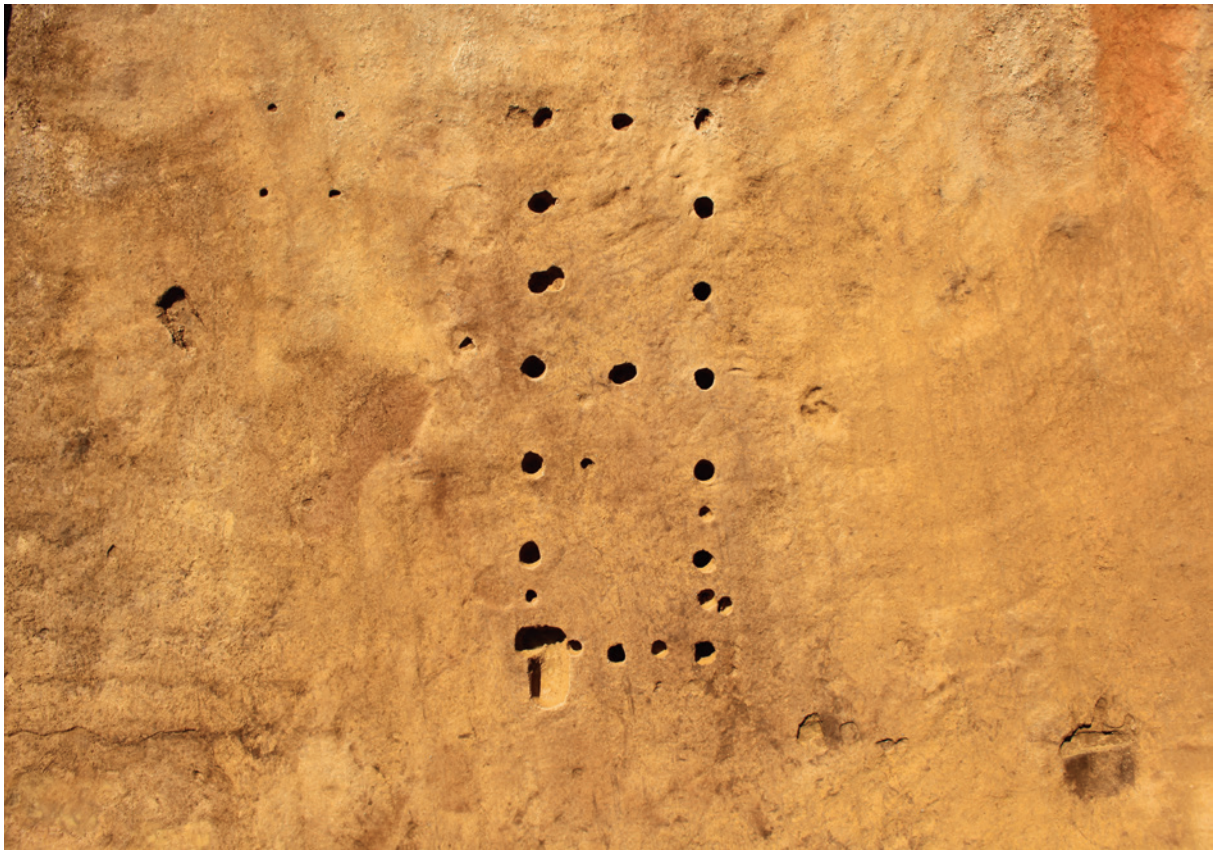
SX13（空中写真）

SX13（南東から）

SX13（北東から）

図版８　Ｄ区空中写真

Ｄ区空中写真



SB10・11 空中写真

SB10（南から）

SB10・11（北から）

SB11（南から）

SK5・SB12（南から）

SI08（西から）

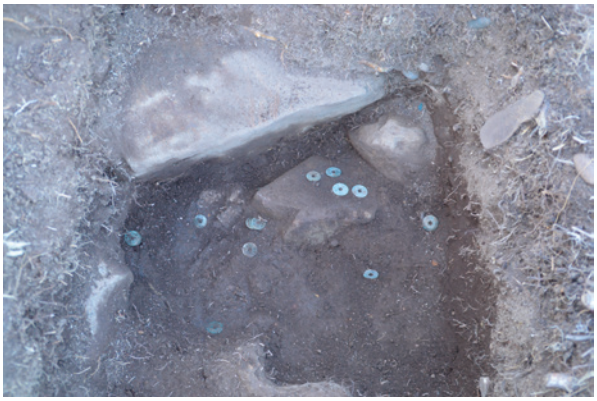
SI08 掘り方（西から）

SD01・SK02・03（西から）

SK07（東から）

図版10　経塚

経塚確認状況



経塚古銭出土状況

経塚トレンチ調査状況

右　供養碑文
左　供養碑

心

大乘妙典讀誦一千部供養

蒙二十年來依佛門敬担道而奉納書写法華八秩

持者

右意趣者　佛前或書写八巻石入塚□旃為毎日是旨勤無怠

奉稱阿弥陀六字妙號供養

敬白

願□茲善利現當安穩子孫繁栄要如指諸掌者也

施主小野寺宮内義重　法名明旭常程居士八十八齢

□當歳維延寶七己未八月二十五吉日□□

岩尻村長根屋敷

経塚東西トレンチ（南西から）

経塚頂部石組確認（南西から）

経塚東西トレンチ（西から）

経塚保存状況（東から）

C区井戸截ち割り

小学生体験発掘

現地説明会

図版12　遺構出土土器1

SX55

1

2

3

4

5

6

SK14

7

8

9

SK24

10

SK37

11

12

SK38

13

14

SK69

17

18

19

15

16

SK78

20

21

SK80

22

1～22（S=1/3）

SX66

23

遺構保存地区出土

24

23・24（S=1/3）

図版14　SX13包含層上層出土土器1

25～48（S=1/3）

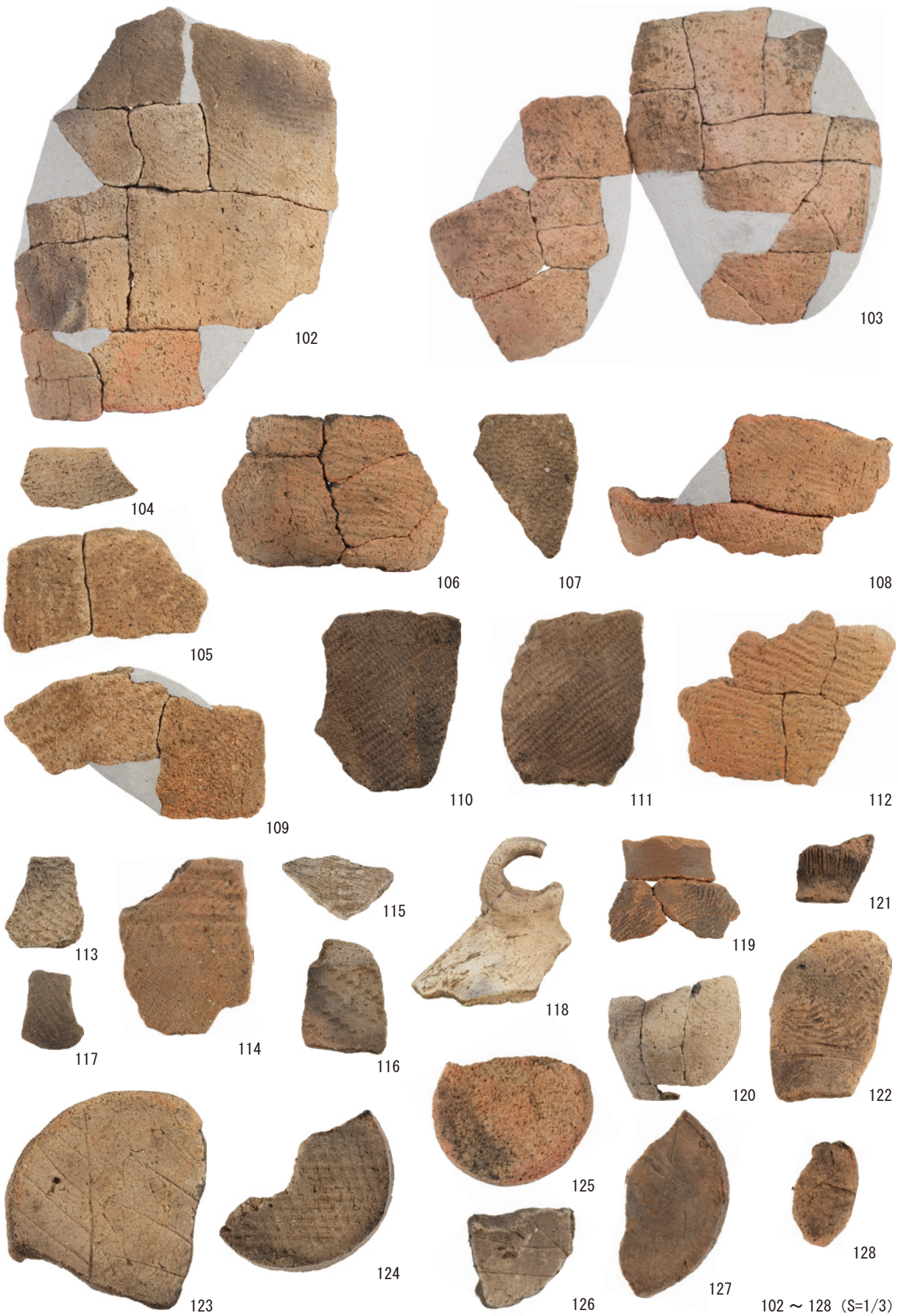
図版15　SX13包含層上層出土土器2

49 ～ 80（S=1/3）

図版16　SX13包含層上層出土土器3

81 ～ 101（S=1/3）

図版17　SX13包含層上層出土土器4

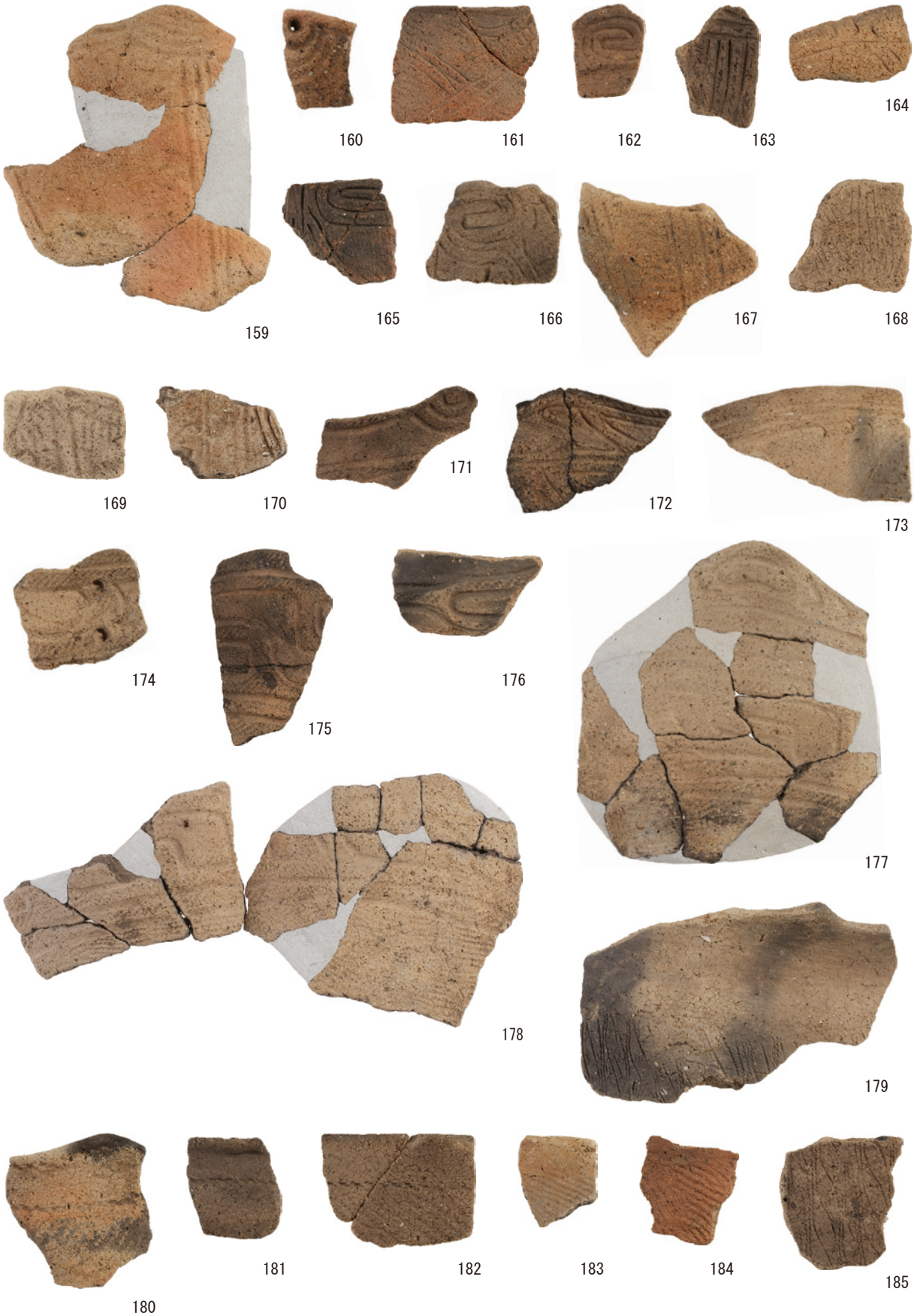


102～128（S=1/3）

図版18　SX13包含層中層出土土器1

129～139、141～158（S=1/3）

図版19　SX13包含層中層出土土器2

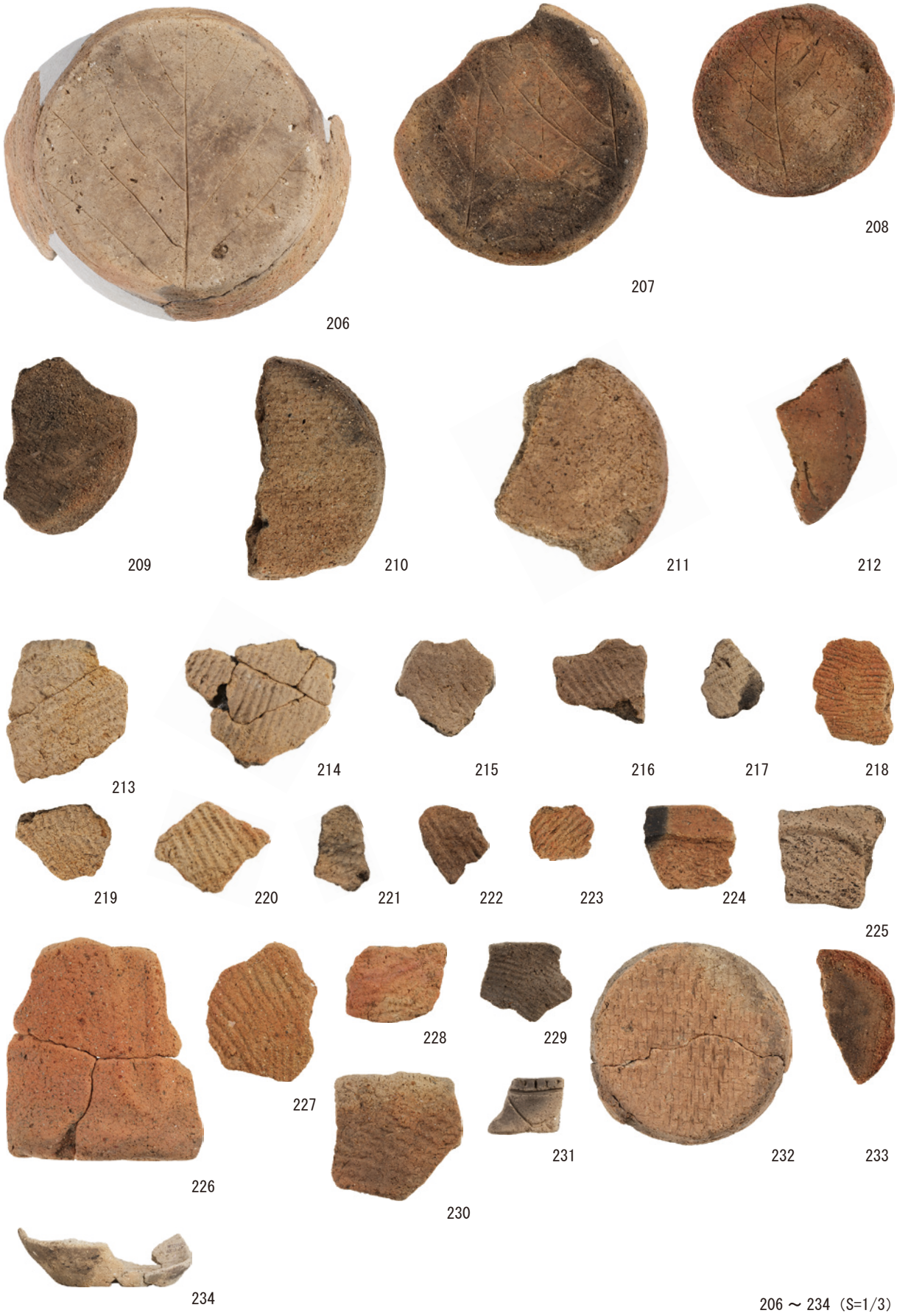


159～185（S=1/3）

図版20　SX13包含層中層出土土器3

186～205（S=1/3）

図版21　SX13包含層中層出土土器4・下層出土土器・土師器



206～234（S=1/3）

図版22　土製品

239 ～ 272（S=1/2）

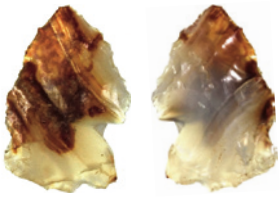
図版23　遺構出土石器

273

274

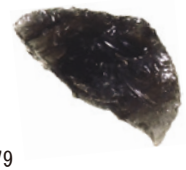
275

276


277

278

279


279

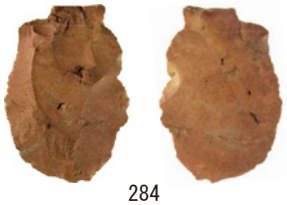
282

283

280

281

281


284

273 ～ 284（S=4/5）

285

287

288

289

286

290

291

292

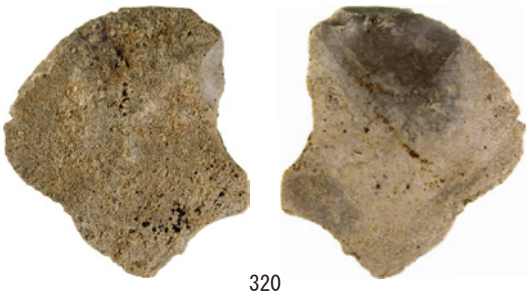
285 ～ 292（S=1/2）

図版24　SX13包含層出土石器1

293～318（S=4/5）

図版25　ＳＸ13包含層出土石器２

319

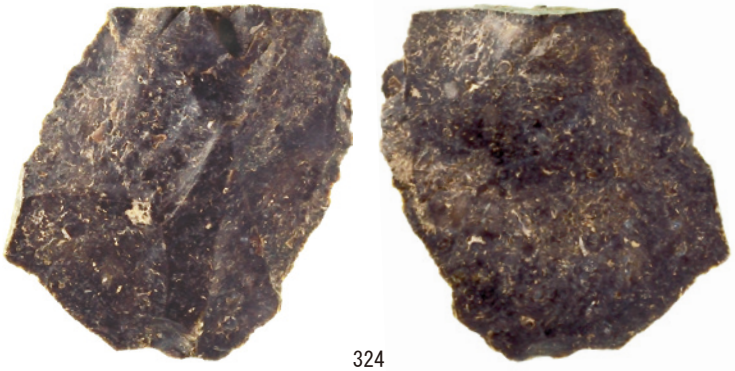


320

321

322

323



324

325

326

327

328

319～323・325～328（S=4/5）、324（S=2/3）

図版26　SX13包含層出土石器3

329

330

331

332

333

334

335

336

338

339

340

337

341

342

344

345

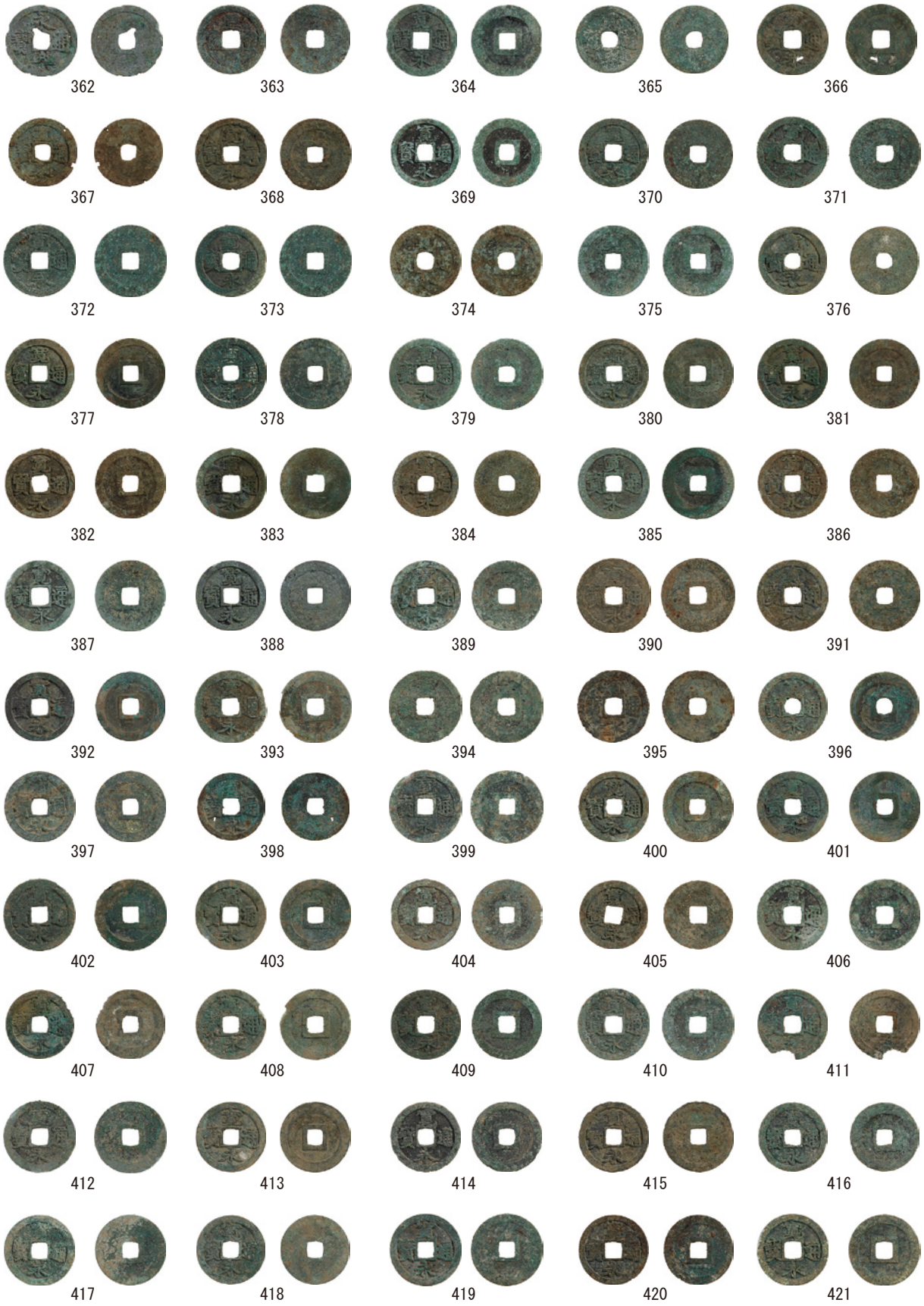
343

329・331～342・344・345（S=1/2）、330（S=1/3）、343（S=1/1）

図版27　ＳＸ13包含層出土石器４

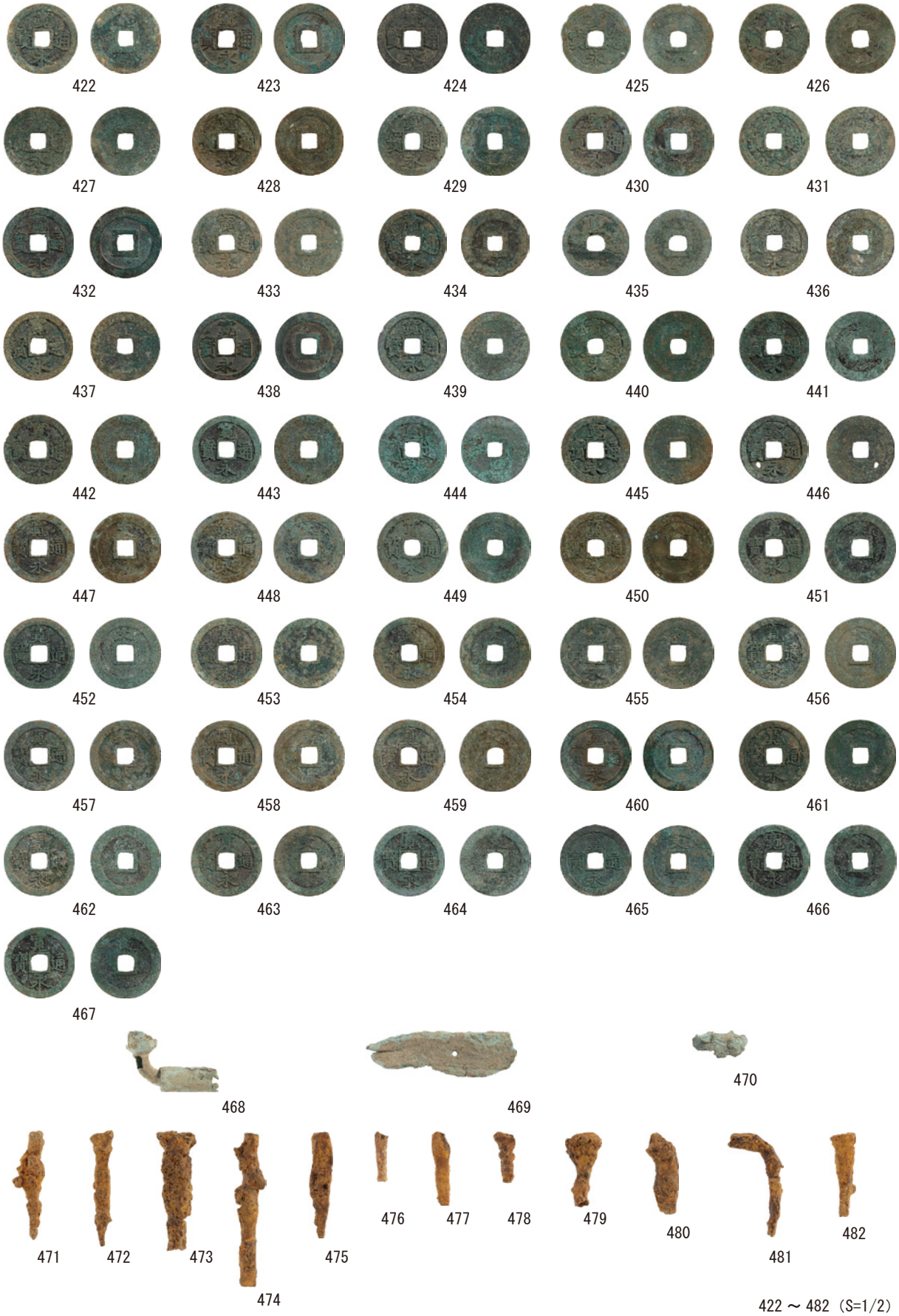
346～356（S=1/3）、357～361（S=1/2）

図版28 古銭1



362 ～ 421（S=1/2）

図版29　古銭2・金属製品



422 ～ 482（S=1/2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	むかいたてあと
書　　名	嚮館跡
副 書 名	防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業（大谷地区）に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	気仙沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	8
編著者名	野﨑進（編）　堤英明　竹原弘展
編集機関	気仙沼市教育委員会
所 在 地	〒988-8502　宮城県気仙沼市魚市場前1番1号　TEL 0226-22-6600
発行年月日	西暦2016年7月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
むかいたてあと 嚮館跡	みやぎけんけせんぬましもとよしちょうながね 宮城県気仙沼市本吉町長根	04256	62035	38°49′17″	141°34′8″	20140701 ～ 20140806	2,184	試掘・確認調査
						20140901 ～ 20141225	5,697	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嚮館跡	集落・屋敷・経塚	縄文時代早期・後期、古代、近世	竪穴建物跡2、掘立柱建物跡5、竪穴状遺構2、貯蔵穴13、落とし穴4、集石土坑2、土坑、ピット、井戸跡2、柵列6、経塚1	縄文土器、石器、土製品、土師器、陶磁器、古銭、金属製品	大肝入の屋敷推定地であり、掘立柱建物跡や柵列、経塚などを発見。

要　　約	嚮館跡は宮城県北東部の太平洋沿岸の丘陵地に位置し、中世の屋敷地と周知されていた。東日本大震災による防災集団移転促進事業に伴う発掘調査により、縄文時代、古代、近世の遺構が確認された。縄文時代は後期前葉の遺構が主体で、SX13包含層から出土した遺物が全体の8割を占めている。この他、竪穴状建物跡、貯蔵穴、落とし穴などが見つかり、早期末の遺構も見つかっている。近世は、掘立柱建物跡や竪穴状遺構、柵列、経塚などが確認された。仙台藩で本吉郡北方の大肝入を務めた小野寺宮内の屋敷跡を特定することはできなかったが、17世紀後半から18世紀にかけての陶磁器や古銭、金属製品などが発見された。特に、小野寺宮内が延宝7（1679）年に築造した経塚は、市内最古の礫石経であり、築造者が大肝入と判明した稀有な例のため、市内の集団移転事業では初の保存事例となった。

気仙沼市文化財調査報告書第８集

嚮 館 跡

Mukaitate-Ato

防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業
（大谷地区）に伴う発掘調査報告書

発　行　日	2016 年 7 月 28 日
編集・発行	宮城県気仙沼市魚市場前１－１ 気仙沼市教育委員会
印　　刷	宮城県仙台市若林区六丁の目西町８番 45 号 笹氣出版印刷株式会社